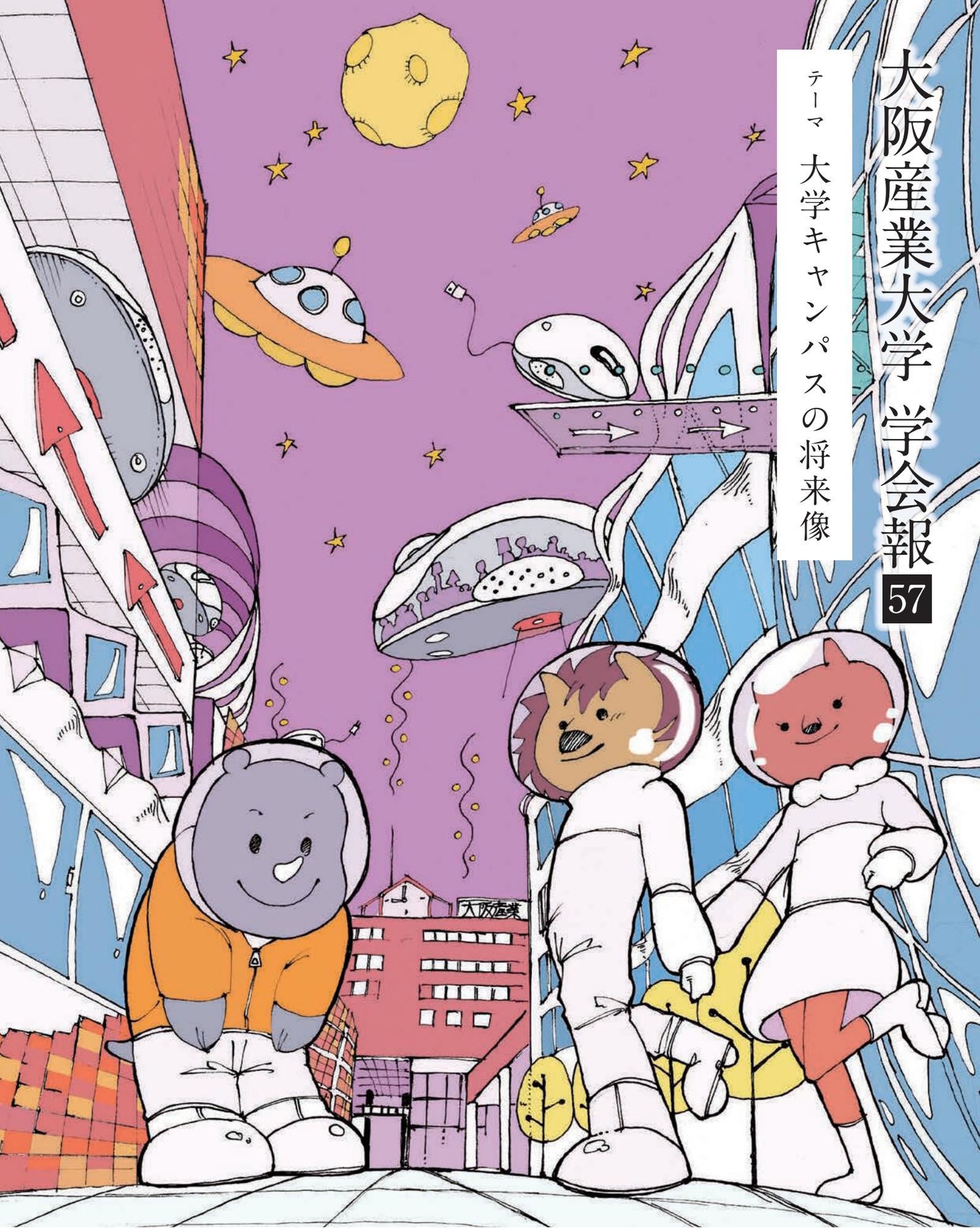


大阪産業大学 学会報

57

テーマ 大学キャンパスの将来像



2021

表紙 令和3年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)優秀賞作品
『大学の将来像』
竹重 風美(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

裏表紙 令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『照』
浜尾 一生(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)



学会報の 発刊にあたって

吉川 耕司

大阪産業大学学会 会長(本学学長)

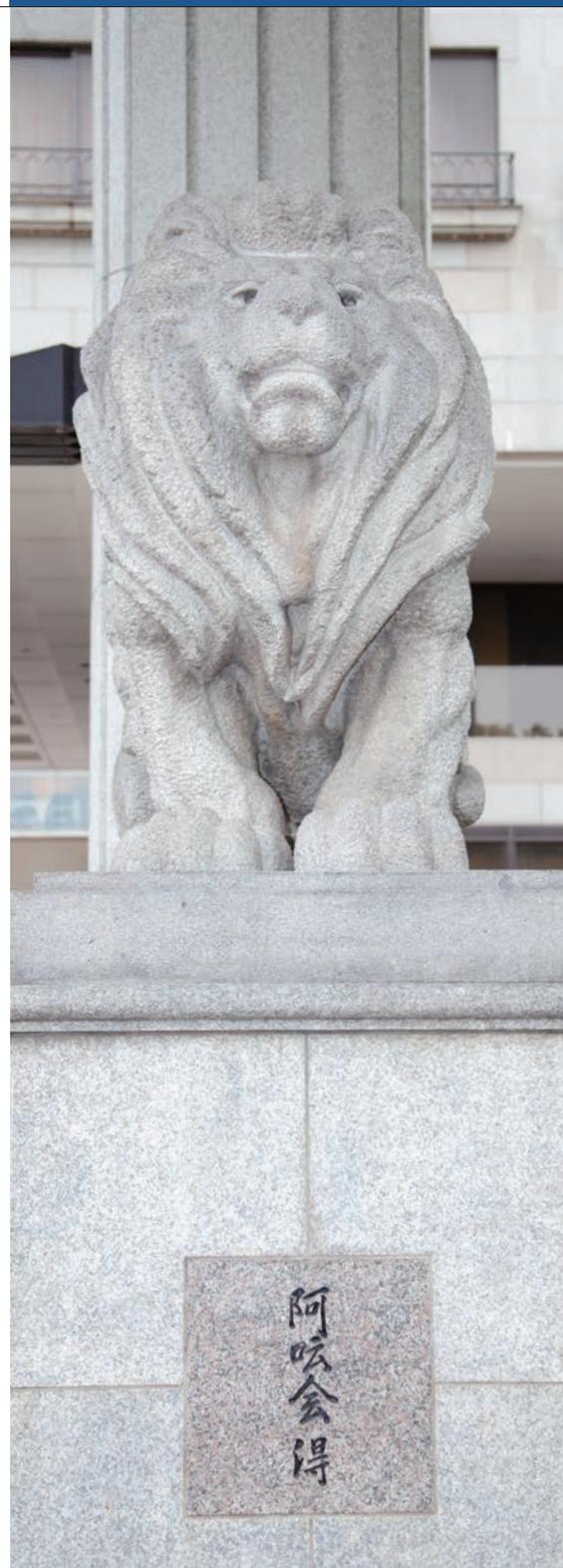
大阪産業大学学会は、論集や学会報の発行、講演会開催や研究助成だけでなく、コンテストや見学会等のイベントを通じて学生会員の皆さんへの積極的な還元を目指しています。

ところが残念ながら、昨年度からのコロナ禍の継続により、学会運営も困難な状況が続いています。そうした中、本年度は、時期的・形態的に開催可能と判断できたイベントは実施に至り、また、学会コンテストのWeb応募や、講演会のライブ配信といったインターネットのさらなる活用も試みました。こうして、少しずつですが、平常時の状況を取り戻す道筋を見定めつつあり、また出版助成や、可能な限りの海外留学費補助を行うことができました。これらは常任委員の先生方と事務局の皆さんの創意工夫とご努力の賜物だと思います。

この学会報でも、見学会の参加報告や、オンライン形式ではあるものの海外研修や留学の体験記を、例年より記事数は少ないながらも掲載することができました。一方、今回は「学生による教員の研究テーマ」と「学生支援部署の活動」の紹介記事が新設されました。前者は、教員へのインタビュー形式だけでなく、チームごとの研究テーマ紹介や教員紹介の体裁をとったものもあり、学生目線からの研究の捉え方を知れるだけでなく、ユニークな活動内容も散りばめられ、楽しく読んでもらえると思います。また後者に関しては、それぞれの部署のコロナ禍に対応した取り組みのご報告を頂くことができました。

さて今回の特集テーマは「大学キャンパスの将来像」です。本学会の運営のみならず、生活全般を通して私たちは、不自由さの中でも様々な工夫をこらして、新しい生活様式や価値観を手に入れようとしています。時代の転換点とも言えるこの機会に、これからの大学教育・研究や大学生活を支えるキャンパスのあり方や将来像を考えるための寄稿を、教員と学生の皆さんにお願いしました。学生の皆さんは、オンライン授業に伴う苦勞を語りながらも、自ら積極的に行動をする大切さに気づく機会にもなり、新しいチャンスが存在すると建設的にとらえてくれていることを知り、また、大教室の今後の活用法や、キャンパスを偶発的な出会いの場や地域との接点ととらえたアイデアを示してもらうことができ、大変嬉しく感じました。先生方には、大学の本質や教授法へのふりかえりのうえで、これからの学びの姿を様々な視点からお考え頂き、懐が深くおしゃれで、異文化理解の場ともなるキャンパスを目指すことで、本学の独自性が発揮できるとの道筋のご提案も頂きました。

これから我々みんな、新たな時代の大学像を探っていかなければなりません。今回で執筆の方々だけでなく、全ての学生の皆さんと教職員の皆さんで知恵を持ち寄り、力を合わせて歩を進めていければと思っています。大阪産業大学学会が、多様な活動を通じてこのための架け橋になることを期待しています。



CONTENTS [目次]

巻頭言

学会報の発刊にあたって

大阪産業大学学会 会長(本学学長) 吉川 耕司

令和4年度学会行事予定一覧

4

06

特集 大学キャンパスの将来像

大学キャンパスの将来像 有言実行	(国際学部 国際学科)	春口 淳一	6
大学キャンパスの将来像	(国際学部 国際学科)	高木 萌々香	8
ニューノーマル時代における大学での学び	(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)	早瀬 朱莉	10
大学キャンパスの将来像	(経営学部 経営学科)	那須野育大	12
大学キャンパスの将来像	(大学院 経済学研究科)	呂 秋陽	14
大学における新たな形式での学びのあり方	(経済学部 国際経済学科)	佐井 勇斗	15
情報機器の活用と人間対人間の関係の ハイブリッドで学生の心を掴む	(デザイン工学部 環境理工学科)	奥田 翔吾	16
教育思想から考える、 これからの大学キャンパス	(工学部 電子情報通信工学科)	矢来 篤史	17
	(全学教育機構 教職教育センター)	塩見 剛一	19

22

学生による、教員の研究テーマ紹介

国際学部 紅粉芳恵先生研究室	畑 絵梨奈	22
スポーツ健康学部 宮本忠吉先生研究室	早瀬 朱莉	24
経営学部 澤登千恵先生研究室	森本 恵未	26
経済学部 李東俊先生研究室	呂 秋陽	28
デザイン工学部 船曳悦子先生研究室	出川 翔	30
工学部 川野大輔先生研究室	寺田 将也・浅井 優騎・武元 章	32

36

各支援部門の活動紹介

COVID-19(新型コロナウイルス)禍における 就職活動の変化とその支援	(キャリアセンター)	富永 利和	36
語学留学・海外研修の現状とオンライン研修の可能性	(国際交流課)	大友 康司	38
コロナ禍によって爆発的に加速した 情報コミュニケーション技術とその今後、 また、新しいICTと私たちの生活の変化について	(情報科学センター)	大屋 秀文	40

44

キャンパスリノベーション

44

48

学会主催見学会

神戸海洋博物館と人と防災未来センター見学	中來田 航	48
聖地・鈴鹿で安全運転研修	西川 諒	49
第6回芸術鑑賞巡りに参加して	藤澤 佳歩	50
「空宙博(そらはく)見学会」感想文	上田平まいか	51



54

コンテスト報告

令和3年度 企画委員長

大橋美奈子 ————— 54

コンテスト優秀作品

第22回ぶんかくコンテスト(長編部門)優秀賞作品：
明日、『何者』かになるために

山中 郁弥 ————— 57

72

講演会報告

学術講演会終了後の感想と報告

元木裕太郎 ————— 72

76

留学記

私の2週間の朝鮮語海外研修
私の充実したECCオンライン留学

川口 紗耶 ————— 76

船田理紗子 ————— 78

80

学術研究書出版助成本の概要

『流通システムの基礎と展開』の概要
『憲法教育研究』の概要
『路面電車とまちの風景 —LRTデザインパレット—』の概要

藤岡 芳郎 ————— 80

佐藤 潤一 ————— 82

ベリー史子 ————— 84

88

学会報告

令和3年度 年次報告	令和3年度 常任委員長	喜多見 洋 ————— 88
令和3年度 学会活動報告		————— 89
令和2年度 学会会計報告	令和2年度 財務委員長	塩見 剛一 ————— 92

編集後記

令和3年度 編集委員長

藤岡 芳郎

令和4年度学会行事予定一覧

EVENT INFORMATION

4月	学会報配付 見学会実施予定ポスター掲示	新入生・在学生に配付 (学内各所にも置いています)
7月	前期見学会参加受付	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、 Portal-OSUで案内
夏期休業期間中	各種見学会開催予定(2~3回) ※新型コロナウイルスの感染状況により、変更・中止になる場合があります	
9月	後期見学会参加受付 学会コンテスト募集開始	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、 Portal-OSUで案内
10月	学会コンテスト募集締切・書類審査 ※優秀な作品は学会報に掲載されることがあります 学術講演会	
11月	学会コンテスト最終審査 各種見学会開催予定(2~3回) ※新型コロナウイルスの感染状況により、変更・中止になる場合があります	
※適時	学会主催・共催講演会	

※見学会、講演会等の学会企画事業については、適時、学会webサイトでもご案内します。

※コンテストの応募内容や詳しい情報は、学会webサイトや学内掲示のポスター等でご確認ください。

※各見学会は、募集人数に制限があります。詳しい内容につきましては学会webサイトやポスター等でご確認ください。

学会公式webサイト <https://as-osu.jp/>



大阪産業大学学会とは

「大阪産業大学学会」は、昭和39年(1964年)に設立された学術研究団体です。

本会は本学における学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて学会会員の研究助成等を図ることを目的としています。これらの目的を遂行するため、「大阪産業大学論集」「大阪産業大学学会報」の発行、「学術講演会」等の講演会・研究会・シンポジウム・学外研修会の開催、教員会員だけでなく学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事業、さらには、主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々の学外見学会を行っています。

〈学会に関する問合せ先〉

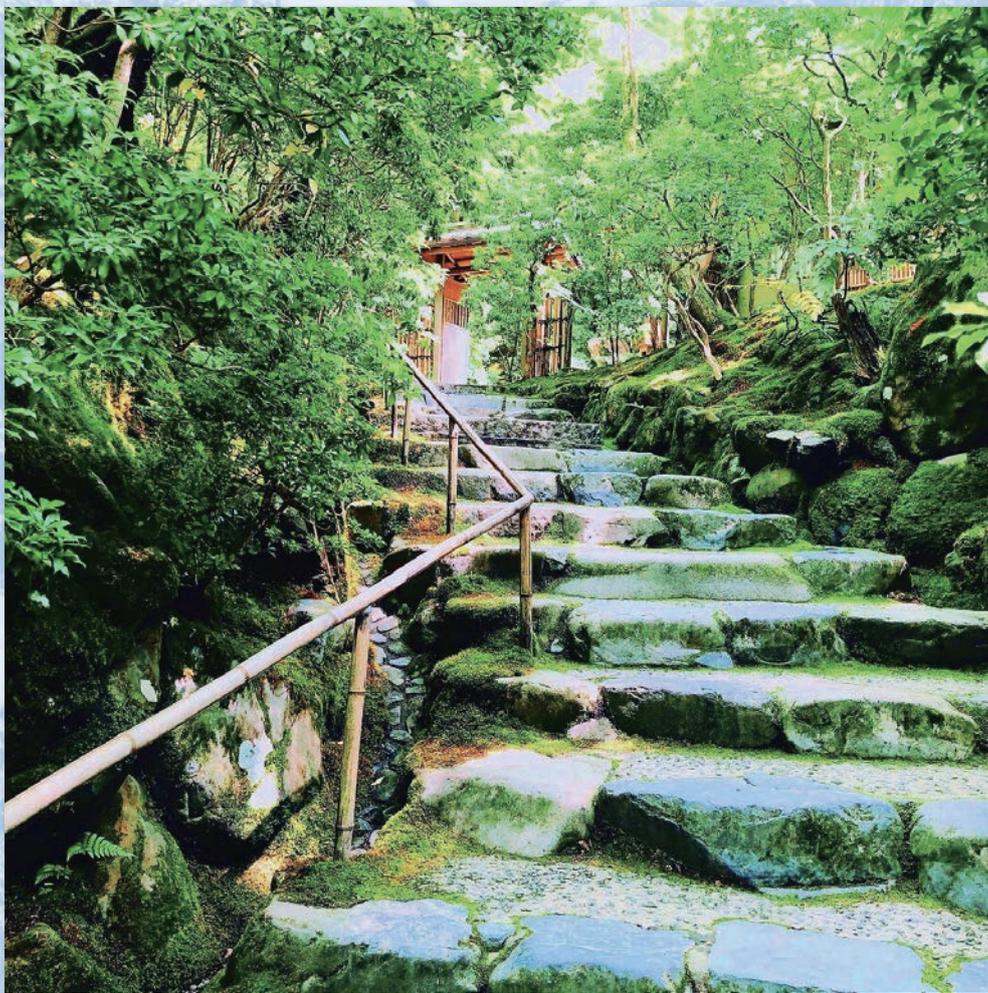
大阪産業大学学会事務局(本館8階 産業研究所事務室内) 072-875-3001(内線:2815) お気軽にご連絡ください

特集

大学キャンパスの将来像

特集

Special Topics



令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品
『新緑の空間へと導く階段』
吉永 有輝(経営学部 経営学科)

大学キャンパスの将来像

国際学部 国際学科 准教授 春口 淳一

今年3月にパスポートが失効していたことに気がついたのは、春学期が終わってからのことでした。私は海外に足を運ぶことが多く、見返してみますと、1年で8回パスポートを引っ張り出した年もあります。それが、19年11月の中国・上海への出張を最後にしまい込んだまま、ついには期限が切れたことにも気づかずに半年が経過していたわけです。コロナによって海外が遠くなったことを感じます。

このコロナのために留学の機会を逸した学生は、それぞれ気の毒です。翻って、留学生の減少もまた顕著ですね。国を越えての移動の制約は、コロナがもたらした大きな災厄の一つです。

「トビタテ! 留学JAPAN^(注1)」や「留学生30万人計画^(注2)」など、留学を通じた高度人材の育成は、日本の教育政策における近年の流行と言えるかもしれません。であれば、知の拠点である大学には、地域コミュニティの指標ともなるグローバル化を体現した空間であることが期待されるでしょう。しかし、コロナ禍においてキャンパスに足を運ぶ学生がごく少数となったことで、物理的に日本人学生と留学生とが分断されているのが偽らざる現状です。

いや、そもそもコロナ以前、多くの学生たちが行き交っていた当時の大学キャンパスは、地域のモデル足り得るグローバルな環境であったのでしょうか。もちろん、12号館1階にあるランゲージ・カフェを活用する学生、国際交流を形作るいくつかのプロジェクト共有に参加する学生など、異文化接触に積極的な大学生も多くいました。

しかし、そうとばかりは言えないのが残念な実情です。かつてインドネシアの留学生がヒジャブ(頭部などを覆うイスラム教を信奉する女性の装束のこと^(注3))を日本人学生に冷やかされたというエピソードを、ある先生が語ってくれたことがあります。21世紀の大学キャンパスの風景としては情けないことです。

移動の制約が解かれるアフター・コロナにおける「大学キャンパスの将来像」を考えると、私は留学生との心理的な垣根も解きほぐされたキャンパスであってほしいと思います。多文化共生社会の模範となるキャンパス像こそ

が、21世紀にあるべき姿だと考えるからです。

キャンパスにおける多文化共生社会の構成員とは、多様な文化的背景を持つ大阪産業大学生一人ひとりです。それは単純に国籍でラベル付けされるものでもありません。国籍の上では同じであっても、ルーツや生い立ちは人それぞれであり、このことは「日本人」についても当てはまるでしょう。ですから、留学生と日本人学生の間だけの問題として論じるべきでもありませんね。集団の中で、特徴のある背景を持つ人物が、それによって揶揄されたり、排除されたりするのではなく、むしろ特長としてそのルーツに誇りを覚えてもらえるようなきっかけが、キャンパスの中で設けられたらと思います。

鳥飼^(注4)はその冒頭で、留学が難しいコロナ禍の今、「ドラマや映画などの映像作品を活用しての異文化学習を提案する」と述べています。それも確かにいいでしょう。でも、それを活用するのはそもそも異文化、多文化に触れたいと考えている人だからかもしれません。

より広範囲にきっかけを与える空間として、キャンパスが一役果たせないものでしょうか。これまで私が訪問した海外の大学の中には、キャンパス内に茶室を設けて、日本文化に親しんでもらおうとするなど、外国の文化を疑似体験する環境をつくる大学がいくつもありました。ただ、これも実際に利用する学生は、もとより外国文化への興味関心の高かった学生に特化されそうです(……何よりコストがとんでもないことになりますね)。

異文化理解のきっかけ作りであれば、もう少し手軽なことから考えてみていいでしょう。たとえば、売店に外国雑貨を並べてみることから始めてみたらどうでしょうか。今や、ちょっとしたスーパーでも入手できるようになりましたが、より身近な場所でも目にするようになれば、異文化に目を向ける第一歩になるかもしれません。また学食で、日本ではあまり馴染みのない外国の料理を提供するのも話題作りになりそうです。ファミレスチェーンでも、海外フェアをよく見かけますよね。「なんだ、これ?」「意外にウマイ」という声に、自らのルーツを活かして「実はこれってさあ…」と語ってもらえたら。いや、商品開発から声を挙げ

でもらったっていいかもしれません。

もちろん異文化とは物質的なものに限定されるものでもありませんし、一を見て十を知ったと思ひ込み、ステレオタイプを抱くようになって困ります。とはいえ、まずは違いを楽しむことから一歩踏み出せる、そういった工夫にあふれたキャンパス像を模索してみてはどうでしょうか。

^(注1) 文部科学省ホームページ「トビタテ! 留学JAPAN」
(最終閲覧日：2021年8月15日)

<https://tobitate.mext.go.jp/>

^(注2) academist Journalホームページ「『留学生30万人計画』が数値上達成した今、日本が実現すべきこと」
(最終閲覧日：2021年8月15日)

<https://academist-cf.com/journal/?p=10997#>

^(注3) TABI LABOホームページ「ムスリムの女性が身に着ける『ヒジャブ』とは? その意義と想いを聞いてみた」
(最終閲覧日：2021年8月15日)

<https://tabi-labo.com/294755/aufa001>

^(注4) 鳥飼久美子(2021)『異文化コミュニケーション学』
岩波書店

有言実行

国際学部 国際学科 高木 萌々香

これから私の大学生活の半分で起こったコロナの影響について述べていきたいと思います。コロナは私にとってとても大きな影響を及ぼしました。大阪産業大学に入学して2年が経った時、コロナが日本で広がりだし、大学の授業も全てオンラインになり、3回生の間ではキャンパスには一度も行くことができませんでした。

私は、留学を目前に控えていました。大阪産業大学の派遣留学生に選抜されて、2020年の3回生になる4月から、カナダのLangara Collegeに約4ヶ月留学をする予定でコロナ禍の前から準備をし、心待ちにしていたのですが、その期間には行けなくなり、留学は後期に延期となりました。その時は、前期に行くことができなくても、後期には行くことができるだろうと期待していましたが、後期での留学も延期になってしまいました。その時に私は、どうしたら良いのか分からず、休学をして海外に行こうとも考えましたが、叶いませんでした。後期の授業が終わり、英語にも触れない毎日を送っていましたが、国際交流課の方に、カナダ留学の代替措置としてオンライン留学を勧められました。もう留学に行けないと思っていましたし、就職先でも英語を使うことがないだろうと思っていたため、あまりオンライン留学に魅力を感じずにいました。大好きな英語も、もう勉強しなくなって使わなくなると思ったからです。しかし、英語漬けの毎日を送れるということはどれほど幸せなことで、自分にとってどれほどプラスなことなのかを理解し、オンライン留学の参加を決断しました。

そうして私は2021年の3月に約1ヶ月間、ECCのオンライン留学に参加しました。朝から夕方までの時間に4時間分の授業があり、朝からずっと英語での授業が始まりました。授業内容は、Speaking、Reading、Listening、Presentationで、最後のPresentationの授業はECCのネイティブの先生と二人だけの時間になっていました。そしてプレゼンテーションが出来上がると生徒全員で発表し、他の人からの質問に答えたり、改善点を見直したりしました。このオンライン留学を通して、私の英語力もとても向上し、自分の苦手分野の克服もでき、得意分野では自分のスキルを活かすことができました。平日毎日あるので

とてもきつそうに思えましたが、英語が好きな私からすると、とても楽しく、毎朝みんなの顔を見れるのが嬉しかったのを覚えています。生徒は全員で3人だったのでわからないことはわかるまで聞くことができ、とても良い環境で英語を学べたと思います。私より年下の学生からも年上の私が学ぶことがたくさんありました。私が使ったことのない単語を簡単に使っていたり、説明するのが難しいことまで、簡単に説明してしまうのを見て、私ももっと頑張らないといけないとやる気を毎日もらっていました。そのため、この約1ヶ月で自分の精神面と語学力の面での成長がとても感じられました。私は授業内でみんなの1日の出来事などを話すはじめのウォーミングアップの時間が大好きでした。英語で話すのでもちろん英語の勉強にもなるのですが、みんなの生活や過去の体験を聞いてると自然に笑顔になることができたので、授業の初めから良いスタートの状態で行うことができました。オンライン留学で英語の力を伸ばすことも学びましたが、それと同時に助け合うこと、励まし合うことを学ぶことができました。

最後に、私はこのオンライン留学を体験してから、前よりも英語が好きになり、語学力を向上したいという気持ちが大きくなったため、もう一度留学に行こうという決心ができました。有言実行、一度留学を決めたのだから、遅れても実行したいと思いました。なので、大阪産業大学を卒業してから、就職をせず、約一年間マルタ共和国に留学することにしました。私が大学生活で叶えられなかった留学という夢を卒業後に叶えられるようになりました。コロナでカナダの留学がなくなってしまい、留学は諦めようと思っていましたが、この1ヶ月間のオンライン留学をとおして、自分の今一番やりたいこと、すべきことがはっきりと分かった気がしました。就職をして、留学に行っておけばよかったと後悔はしたくないので、今しかないと思いました。私の決断が良いのかはわかりませんが、今の自分なりにできることをして、今までの経験を存分に活かし、悔いのないようにしていきたいです。これからは、大学卒業後に就職するという選択だけでなく、好きなことに悔いのないように挑戦することや、自分の夢に向かって突き進むと

いった選択も増えてくると思います。これからの学生が自分の好きなことを見つけ、その事に挑戦できるようになって欲しいと思っています。

大学キャンパスの将来像

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 早瀬 朱莉

コロナ禍により、大学キャンパスは大きく変化しました。授業形式が変化したことにより、学生が登校する機会が極端に減少しました。大学施設の大半を占めているであろう講義室は無用の長物と化しているといっても過言ではないかもしれません。ハイブリッド型の授業が展開され、一定数の学生が大学へ講義を受けに来たとしても大講義室のような広さは必要ありません。講義室の数もそれほど多くは必要ないでしょう。また、今後テレワークが進み、これまで大学で行っていた事務手続きがオンライン化されたり、先生方が自宅等で授業や研究を行ったりすることになったと仮定すると事務室や研究室も今までと同様の数やスペースは必要ではなくなるでしょう。つまり、コロナ禍で求められている生活様式が当たり前となったとき、大学キャンパスに価値がなくなってしまう可能性があるといえます。しかし、私はこれまでの大学生活で得た経験から、大学キャンパスは価値あるものであり、今後も存在し続けてほしいと思っています。そこで私は大学キャンパスの将来像を自身の経験をもとに「人と人との出会いの場」という観点から考えました。

①同世代と偶発的に出会える場

授業の形式がオンラインに変わり、一年半が経ちました。資料やリアルタイムで知識を得て学ぶことはできましたが、友人と会う機会、講義などで新しく出会った学生と話をしたり同世代との交流が減りました。今やSNSなどオンラインでも同世代の交流はできますが、自発的に交流をするのは自分の興味のあることがほとんどです。大学は同世代がお互いに示し合わせたわけでもなく偶然に集まる場だといえ、そこでの交流も偶発的です。私が大学で仲良くなった友人達は「学籍番号が近かった」「所属している部活動は違えけれど、活動場所が同じだった」など、出会ったきっかけは偶発的なものばかりです。また、大学に在籍している同世代の人たちは各々が様々な価値観を持っているため、自分自身の視野が広がります。講義後の空き時間などにたわいのない談笑を楽しむ機会に色々な人から自分が知らない情報などを教えてもらうことができ

る、相手が知らないことを教えたりできる。大学キャンパスにはそのような価値があると考えています。その偶発的な出会いを創造できる場として、大学キャンパスがもっと機能すればよいのではないかと思います。

②地域の人々が気軽に立ち寄れて、学外関係者間の交流が加速する場

大学は、地域・社会貢献をする機能を持っています。私達の大学も先生方が地域の方と連携したり、大学施設を地域の方々に提供したりして、地域貢献活動を行っています。例えば、大学施設の1つであるWellness2008では、「いきいき大東スポーツクラブ」という総合型地域スポーツクラブを併設し、地域の方々の健康に貢献するような活動をしています。そのスポーツクラブの中では、会員同士の交流も生まれており、このような場が大学キャンパス内にもっと増えれば良いのではないかと思います。

特に、現在はコロナ禍であり、大学生がキャンパスに来ることが少ない状況です。これを機に地域の方が食堂やカフェで昼食や軽食をとったり、中庭で談笑したりする場としての機能を強化することで、地域に根ざした大学キャンパスとして存在価値を見出せるようになると思います。コロナ禍の行動制限が求められる中で、このような取り組みを実施することは難しいかもしれませんが、今後、学生が従来のように大学へ登校するようになったとき、少しでも地域との接点が増えていると、学生にとっても良い学びの場となると思います。

③学生と社会の架け橋になる場

就職活動もオンラインに変わり、企業説明やインターシップなども現地に行くことがなくなりました。その中でも大きく変わってしまったと感じるのは、卒業生や先輩などの話を聞くことが出来なくなっているということです。キャンパスに足がむかなくなったのは学生だけではありません。大学を卒業していったOB、OGも気軽に来れなくなりました。企業との繋がりはオンラインでも担保できますが、今まではゼミなどで、就職活動の話などをしてもらって

たのに、会う機会がないので、実際のリアルな実体験を聞くことができなくなりました。

このような出会いの場は私の経験上、先生の研究室で偶発的に起こったり、ゼミ活動の中で自然と生じたりするものです。ゼミの活動で先輩と会った時に就職活動をどう始めれば良いか迷っていることを話すと、「まず何をすれば良いか?」「就職活動の流れ」などについて教えてもらえました。また、ゼミの先輩や先生の研究室を来訪されていた卒業生、社会人の方と話をすることで、自分の視野が狭まっていることに気づかされました。

これらの経験は、私の就職活動に大いに役立っています。先輩から後輩へ、就職活動という話題をきっかけとして社会への踏み出し方を伝えることは、現役大学生の将来への不安を軽減する効果があると思います。このような場を生み出すのは、ゼミなどの活動を行える大学キャンパスが持ちうる大きな価値の1つといえます。

大学キャンパスは私たちの交流の場として大きな意味をもたらしてくれています。オンライン化が進み、交流の機会が少なくなった今だからこそ、キャンパスで交流していたのは価値のあることだったと気付かされました。特に私の場合は、1年次はコロナ以前の大学生活を送っていたため、2年次に大学キャンパスへ行く機会が激減した際に、大学キャンパスにおける人との交流の価値がとても貴重なものだったと強く実感しました。大学キャンパスは、これまで以上に人と人を繋ぐ場として発展してくれることを願っています。

ニューノーマル時代における大学での学び

経営学部 経営学科 准教授 那須野 育大

1. はじめに

本稿では、「ニューノーマル時代における大学での学び」について、筆者の見解を中心に述べたい¹。ここでニューノーマル(New Normal)とは、「新しい常態」または「新常态」のことをいう。すなわち、「社会に大きな変化が起こり、以前と同じ状況に戻ることはできず、新たな常識が定着する」ことを意味する。このニューノーマルは、2000年代初頭のインターネット時代の到来時、2008年のリーマンショック後など、これまでの常識が通用しない「新常态」を指す用語として用いられた。

そしてコロナ禍に見舞われた現在、ニューノーマルは、コロナ後の「新常态」を指す用語として用いられている。コロナ禍によって、我々の日常生活は大きく変わった。例えば、働き方では、テレワーク、オンライン会議、時差通勤などが定着しつつある²。また筆者の専門分野の観光では、マイクロツーリズムやワーケーションなどが注目されている³。もちろん大学においても、オンライン授業が当たり前のように定着した。コロナ禍2年目を迎えた2021年度、「ニューノーマル時代における大学での学び」について、少し考えてみたい。

2. コロナ禍で分かったこと(2020・2021年度)

コロナ禍が大学教育に大きな影響を及ぼし始めたのは、2020年度であった。本学においては、2020年度前期、対面授業が全面中止となり、教職員・学生ともに突貫工事でのオンライン授業対応を強いられた。2020年度後期になると、ハイブリッド授業が開始され、感染状況に応じて「対面授業/オンライン授業」の柔軟な切り替えが可能となった。2021年度、引き続きハイブリッド授業が継続されている。こうした状況において、従前との大きな変化を2つ挙げたい。

変化の第1は、オンライン授業である。全ての教職員と学生が、否応なしにオンライン授業を経験した。ここでは、基本的なパソコン操作やインターネットアクセスはもちろん、アプリケーションソフト(Microsoft Officeなど)や電子メール、本学の学習支援システムWeb Class、会議

ツール(GoogleMeetやZoomなど)を使いこなすことが求められた。

変化の第2は、電子化(または「デジタル化」。以下同様)である。これまで、教員は、授業で紙資料を配布し、紙媒体を使って試験を行ってきた。学生は、レポートや試験に手書きで対応し、学内の掲示板を見て連絡事項を確認していた。いま改めて考えてみると、教育現場は何とアナログであったことか。しかし、こうした光景は一挙に消え去り、全て電子化された。

こうした2つの変化、すなわちオンライン授業と電子化には、一方で利点が存在する。学生にとっては、いつでもどこでも授業を受講できるようになる。移動時間が無くなり、時間を効率的に使えるようになった⁴。教員にとっても、画像や動画を使った分かりやすい授業の実施、紙資料の削減などが可能となる。他方、大きな欠点も指摘できる。学生にとっては、対面での学びや交流の機会が失われ、修学意欲の減退が避けられない。教員にとっても、学生の理解状況を見ながら授業を進めることができず、直



▲写真1 本学中央キャンパス 出典：2021年4月4日、筆者撮影。

接声掛けできないもどかしさがある。

筆者のゼミでは、学生どうしグループディスカッションで意見交換しながら、情報収集や資料作成を行う。まずは仲間どうし仲良くなった上で、新たな“知の創造”を試みていく。しかしオンラインでは、これを実践することが極めて難しい。筆者は、オンラインでのゼミ運営のいわば限界を痛感した。筆者自身、学部時代のゼミでは、ディスカッションとともに、友人どうしの何気ない会話、ゼミ合宿、飲み会などの記憶が色濃く残っている。このように、学生どうし対面で交流しながら人間関係を構築する中でこそ、充実したゼミ研究が可能となる。学生が集い、交流する場を提供することこそ、大学キャンパスの最大の意義であるといえよう。

3. ニューノーマル時代に向けて(2022年度以降)

コロナ禍1年目(2020年度)、教員も学生も「いつかコロナ前の状況に戻るはず」と考えていたかもしれない。しかしコロナ禍2年目(2021年度)を迎え、教員も学生も「もうコロナ前には戻らない」と考え始めているのではないかと筆者もそのように考えている。

2022年度、新しい生活様式が定着するとともにワクチン接種が進み、コロナ禍は落ち着いていることを期待したい。そうすると、新たな授業のあり方、すなわち「ニューノーマル時代における大学での学び」の姿が模索されることになるであろう。オンライン授業と電子化の洗礼を受けた教職員と学生は、コロナ前よりも効率的・効果的な授業形態を模索・構築していくに違いない。このことは、大学の独自性や特徴にも資するものと考えられる。

注

- 1 大学での学びのあり方は実に多様であり、様々な見解が存在する。本稿の内容は、あくまで筆者の一意見であることをお断りしておく。また、本稿の執筆時点は2021年7月であり、『学会報』57号発行予定の2022年3月時点と状況が異なっている可能性がある。
- 2 厚生労働省(2020)「『新しい生活様式』の実践例」

参照。

- 3 日本経済新聞2020年12月21日付参照。
- 4 文部科学省の調査によると、オンライン授業に「好意的な意見を持つ学生(56.9%)」は多く、「不満を持つ学生(20.6%)」を上回っている。日本経済新聞2021年6月29日付参照。

[参考文献]

厚生労働省(2020)「『新しい生活様式』の実践例」参照。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html(閲覧日：2021年7月6日)
 日本経済新聞2020年12月21日付、2021年6月29日付。

大学キャンパスの将来像

大学院 経済学研究科 呂 秋陽

1. はじめに

2020年から始まった新型コロナウイルスは急速に広がり、さまざまな分野に大きな被害を与えている。特に、大学では、多くの学生の集まりを避けるために、オンライン授業や規模の小さいクラスの授業などさまざまな方法で授業が行われている。

2. オンライン時代

アメリカのジャーナリストとコラムニストであるトーマス・フリードマン(Thomas Loren Friedman)は、『ニューヨーク・タイムズ(The New York Times)』紙に「私たちの新しい歴史的な転換：B.C.とA.C.—コロナの前の世界と後の世界(Our New Historical Divide: B.C. and A.C.—the World Before Corona and the World After)」というタイトルの記事を載せた。フリードマン氏は、新型コロナウイルスが「紀元前と西暦」のような時代の転換点、つまりB.C.(=Before Corona)とA.C.(=After Corona)になると信じている。彼によれば、私たちは新型コロナウイルス後の時代に生きている。この記事は私たちにいくつかの質問をしている。例えば、新型コロナウイルスの後、何が排除され、何が残り、何が最適化されるのでしょうか。また、私たちの生活様式がすべて「リセット」される。その後、世界はどのようになるか。コロナは、人々の伝統的な概念を変えた「触媒」である。昔は学校に行き教室に座っているだけで勉強と呼ばれていたが、今ではパソコンや携帯などの電子機器を使って勉強できるようになった。大学教育・研究もオンライン時代に入ることになった。

3. オンライン授業

「オンライン授業」とは、インターネット回線を通して遠隔で行う、時間や場所の制約をある程度解決した教育手段のことである。新型コロナウイルス感染拡大により、外出が制限される中でも授業を行うために、オンライン授業を導入する学校は全国的に広まっている。新型コロナウイルス感染拡大以来、世界中のほぼすべての学校がオ

ンライン教育を実施してきた。自粛要請も一つの原因として、先生も学生も学校ではない場所で授業に参加することができた。オンライン授業は非常に便利で多くの利点があるけど、無視できない多くの欠点もある。

4. オンライン授業の利点と欠点

オンライン授業の利点は多くある。例えば、留学生にとっては、コロナの影響で入国できない留学生もオンラインで授業を受けることができる。距離や環境に制限がないから、自由に授業に参加することができる。時間も大幅に節約できる。そして、ライブ配信によるオンライン授業では、チャットやマイクなどを活用し、先生や学生たちは双方意見交換することもできる。オンライン授業であるが、実際には対面授業とほとんど同じである。

オンライン授業の無視できない欠点もたくさんある。一つは、オンライン授業を受けるには、一定の通信環境や設備が必要である。授業中に突然インターネットが接続できなくなった場合、授業に大きな影響を与える状況もありうる。もう一つは、長い時間のオンライン授業は、健康に悪い可能性もある。例えば、電子機器の画面を長時間見ている場合、やっぱり目の疲れにつながることもある。そして、運動不足を引き起こす可能性もある。

5. 大学キャンパスの将来像

以上のように、オンライン教育にも無視できない多くの欠点があるが、オンライン教育の利点は欠点よりも顕著である。将来的には、大学教育・研究はますます国際的になるかもしれない。テクノロジーの進歩とインターネットの普及により、さまざまな国の教員と学生がインターネットを通してコミュニケーションを行うこともできる。そして、海外に行かなくても留学できるかもしれない。自分の国でオンライン教育を通じて海外の授業に参加するのは良いことではないでしょうか。新型コロナウイルスは世界にとって災害であるだけでなく、変化の機会でもある。「リセット」されている世界の中で、私たちは新しい環境に適応しながら新しいチャンスを掴むべきである。

大学キャンパスの将来像

経済学部 国際経済学科 佐井 勇斗

この学会報が発行する時には、コロナはどうなっているのでしょうか。誰もが予想できなかったこの現状。期待と不安がいっぱいある中入学して、新しくできた友達と授業を受けたり課題を進めたりと当たり前のように通っていた大学が急に無くなりました。留学することも考えていましたが、まだできずにいます。20年度21年度に入学した学生は、私が抱いていた不安を遥かに超えていると思います。また、期待していたスクールライフもまだ楽しむことができていないのではないのでしょうか。

withコロナを考えていく世の中になり大学側もそれに合わせたキャンパスや環境を作っていくかといけません。コロナの流行当初には積極的にオンライン授業を取りいれました。また対面とオンラインを同時運用するハイブリッド形式を採用しました。ここからは個人の意見となりますが、私はこのハイブリッド形式は少し問題があると思いました。もちろん対面で講義することが望ましいですが、コロナ禍においての感染者数や緊急事態宣言などを考えると講義はハイブリットにせず全員オンラインで講義をするべきだと思いました。オンライン講義では基本的には教授から配布される資料やパワポを見ながら授業をしていくと思います。これに対面を加えると結局はその配布された資料を見ながら講義を聞くだけになるのでオンラインと何も変わりありません。実際に受けてみて教授を見ていると対面者に話しているのかオンラインの受講者に話しているのか定まっていなかったこともありました。また、オンラインでの質問や不具合がすぐに返すことができないこともありました。教授の負担を減らすためにも、どちらの形式でするか一つに絞って講義をするべきだと思いました。

そうならば、多くの学生と同じ教室で教授の講義を受けることができるのは、まだまだ先になるかもしれません。それまで使わない教室をどう活用するべきか。一部の大教室は自習やオンライン授業用に開放すると良いのではないかと思います。オンライン形式でも家で受けずに大学内の空気感で受けたい! そのような学生も多くいるので電源設備とwi-fi環境が整っている本館の教室を利用でき

るようにすれば良いのではないのでしょうか。一時期、食堂が休業して自習スペースにもなっていましたが、少しずつ対面が増えてきて食堂も営業しているので、空いている教室の使用は生徒にとっても良い有効活用なのではないかと思います。

他に、教室でいえば3人や5人座りの椅子や机を無くして一つずつの単独した机と椅子を設置するべきだと思いました。これは世の中でも多く耳にするソーシャルディスタンスを確保することができて、かつ単独にすることで個人の空間ができて勉強しやすいのではないかと思います。

コロナが終息してもしなくても、これから長く学生に愛される大学にするには生徒が過ごしやすい環境や設備がないといけません。私はそんな大学を望んでいます。

大学における新たな形式での学びのあり方

デザイン工学部 環境理工学科 奥田 翔吾

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、大阪産業大学においてオンライン授業が主要な授業形態となつてから1年以上が経過しました。そこで、学生である私が大阪産業大学における新たな形式での学びについて感じたことを述べていきたいと思つています。

私が入学した頃はコロナ流行以前であった為、活気のあるキャンパスで対面式での授業でした。友人や教員との対話が可能であり、またフィールドワーク等の学外での活動による興味深い学びができる環境でした。そんな中、コロナ禍によるオンライン授業となり、情報機器や通信環境の整備、授業形態や課題、試験方法等戸惑うことが多く、さらに対話がほとんどない、ただひたすら講義を聴いて日々の課題に取り組むという状況が続いていました。

2020年の後期から2021年にかけて、リアルタイム形式やハイブリット形式での授業となり、リアルタイムでの参加による授業形態と、対面で受ける学生とオンラインで受ける学生の双方向での授業形態が主流となりました。この授業形態の変化によって、これまでのオンライン授業とは異なり、沢山の学びを得ることが出来ました。それは、今まで出来ないとされていたリアルタイムでの遠隔授業、試験、グループワーク等が可能となった事です。しかし、その授業形態にはいくつか問題点があると考えています。一つは、勉強の質が落ちてしまうという事です。リアルタイムでのオンライン授業になったとは言っても、実際に学校へ行って対面で授業を受けるのとは明らかに集中力等に差が出ると私自身感じたからです。2つ目は、積極的に授業に参加しなくなる事です。オンライン授業の良い点としては、どんな場所であっても受けられる事がありますが、逆に他人に見られることなく授業を受ける事ができるので、悪く言えばGoogle meetに参加さえしていれば、授業に出席したことになるという事です。その結果として、勉強の質が落ちてしまうという事にもつながるのではないかと考えています。ではこういった問題点を解決するにはどういった事が必要でしょうか。

私は、興味を持ち行動する事が必要だと考えます。私は普段の生活から緑、植物に関わる事が多いのですが、大

阪産業大学に入学してから環境について学ぶようになり、植物に興味を持つようになりました。そこで、実際に自分で植物を育ててみると、成長過程を見ることができ、植物の奥深さを知る事が出来ました。そして、もっと視野を広げているんな自然、公園、庭園のデザインを見に行くようになり、気づかないうちに様々な事に興味を持つようになりました。

こういった身近なことから行動に移していく事で、もっと深く学びたいという意欲が出てくると考えています。そして、興味を持って学ぶことで、今まで知らなかった事に気づくことができると考えます。この事が、勉強の質や積極性を高める事に繋がり、大学における新たな形式での学びとしてより良いものになっていくのではないかと考えています。

これらのことは、知らない事を学ぶのだから、一見当たり前の事だと思つるのが普通だと思つています。しかし、この学会報を読んでいる読者の中には、「大学が面白くない」、「授業が楽しくない」と感じている方は少なくないと思われれます。それは、私自身も含め、「受け身になっていないか」という事を確認する必要があると考えます。自分の身の回りで視野を広げて色々な事に目を向けてみると、案外面白いと思つような事が沢山あると思つています。これを勉強にも活かしてみたいかがでしょうか。

このような大学での学びについて考えるきっかけになったのは、オンライン授業になって色々問題点が見えた事だと思つています。皆さんもそれぞれ色々な考えがあると思われれます。私は、自分自身で学びを見つける事が大学における新たな形式での学びのあり方だと考えます。皆さんも一度「大学における新たな形式での学びのあり方」について考えてみてはいかがでしょう。

私は、今後も起きる可能性がある生活様式や学びの変化に対していかに適応していくかが重要であると考えます。また、自分自身で考え、行動するという力を身につけるチャンスであり、一人の人間として成長できるチャンスが到来していると感じます。

情報機器の活用と人間対人間の関係の ハイブリッドで学生の心を掴む

工学部 電子情報通信工学科 教授 矢来 篤史

今回、コロナ禍中「大学キャンパスの将来像」というテーマで執筆を依頼された。本来大学は教育と研究の両立が必須ではあるが、ここでは主として本誌は本学学生向けの学会報であるため、その趣旨から本学学生に向けたキャンパス将来像の一提案としたい。まずポイントは「デジタルネイティブ世代の学生の心をいかにして掴むか」である。彼らは物心ついたころからテレビゲームにPC、タブレット等に慣れ親しんできた世代である。一方筆者は、所謂バブル世代であり、自動車や半導体などの日本製品が世界を席巻し、社会全体が浮かれていた頃に青春を過ごした。しかし今改めて見ると残念ながら大学の教授法は今も昔もほとんど変化していない。講義科目では、数百名の大教室で教員は板書とただマイクに向かって喋っているだけ。語学や演習科目では、教室で問題を解いたり発表したり、ただその場で演習するだけ。実験・実習では、マニュアルどおりの内容を大多数の学生は意味も理解せずに機械的にこなし、ただデータを取り、報告書を手書きするだけ。変わったものは掲示板から電子掲示板にOHPからプロジェクターにTSS端末からPCに履修申請が手書きからwebに代わったぐらい。すなわち情報機器の発達により便利になった。言いかえれば情報機器をいかに活用化することと後で述べるアナログ的な良さを融合させる、まさにハイブリッド形で若者の心を掴み活性化させることが大学キャンパスの将来像と考えられなくもない。

勿論これまでの旧態依然の教授法を完全否定するつもりはもうとうない。多様なメディアを高度に活用するのみではなく、現在の学生がこれまで受けてきた教育環境や生活環境を鑑み、憧れや気楽さ、教員との距離の近さの実現化などにアナログ的な要素も取り入れ、学生および保護者の満足度向上なども加味し、さらにそれに加え自分もやれば出来るんだという自信をつけさせるためにはどのような教育形態がよいのか、模索することが望まれる。以前、元学長の瀬島先生が「教員の能力が全てにおいて学生のそれを上回っていることはない。学生の方が上のももある。それをうまく生かすことで、学生の潜在的能力

を引き出すことが出来る。」と仰っていたことが印象的であり、今まさにそれを具体化するための手腕が本学にも求められていると思う。そこで多少の理想論でもあるが、批判は覚悟のうえ、おじさんのボヤキも含め、「大学キャンパスの将来像」全般を以下順不同で考えつくまに述べてみたい。

①オシャレで押しつけの無い授業形態の実現

受講は教室内のみではなく、学内でWi-Fiが使える出来れば緑が見えるおしゃれなカフェで飲物を片手にタブレット端末やLaptop PCを見ながら講義を受ける。そこには定額制で飲物が用意されていることが望ましい。講義＝堅物＝我慢して受けているというイメージを払拭して、講義＝気軽で楽しいものというイメージを定着したい。結果として良い意味でのポジティブフィードバックにより単位取得率の上昇、すなわちストレート卒業率の向上も期待できる。スターバックスカフェで高校生が勉強している姿をよく見かけるあれにヒントがある。Mercedes meのようにブランドイメージの刷新のためのアイデアを教育現場にも採用すれば如何か。

②身近な相談相手の配置

理系学部学科では、1科目で良いので1年生前期の専門基礎科目において1クラス10名以下、学科所属の専任教員全員で担当する。入試で競合する近隣のS大学では、一部の学部学科で全専任教員が一丸となって入門ゼミのような形態で専門教育科目の導入を図っている。正規に手当支給が可能な担任制と考えても良い。現代の若者は身近で気軽に相談にのってくれる人やその場面をアナログ的に求めている。それが他店との差別化によりビジネスでも奏功しているものもある。例えばOcean Tokyoのように人気美容師の約1時間のメンズカットが1万円でも予約がとれない状況が続いており、技術のみではない相談相手に高額を支払い、現代の若者はコト消費をしている。大学も同様で単に“面倒見が良い”と連呼するだけでなく、特に入学当初で不慣れなときに学生が気軽にいつ

でも相談に乗ってくれる相手とその機会をアナログ的な方法ではあるが積極的に提供することで他大学との差別化を図れば如何か。

③スマホアプリによる電子学生証の発行と自動的な出席管理システム、学内呼出システムの構築

今や自分が所有する自動車ですえ地図上の何処にあるかがスマホ上に表示される時代である。個人ごとの履修申請情報はコンピュータ上で管理されているので、学内のどの教室に今いるのか教室内に設置されたWi-Fi親機を用いて各人のスマホにインストールされたOSU専用アプリで認識すればリアルタイムな出席管理システム、学内呼出しや学内電話など簡単に構築出来てしまう時代となっている。学生にとっては監視されているかもしれないし少々過保護かもしれないが、通学経路や下宿での在宅情報も含め、その情報が保護者のスマホでも閲覧できるようなシステムを構築すれば、保護者の方々からも大きな安心感が得られるに違いない。またスマホによる電子学生証の発行によりコスト低減を図り、学内利用での電子認証やPayPayのように学内の学生食堂、コピー機、購買関係、osuシャトルバスなどでもキャッシュレスサービスの拡充が今後望まれる。磁気カードやRFID方式の学生証、クレジットカード機能付の学生証はもはや時代遅れである。

④学生窓口対応の良否を学生がその場で評価する顧客満足度(CS)申告システムの導入

海外出張時にドイツ鉄道(DB)の窓口で喜んでいる顔から怒っている顔までのボタンが4個並んだ箱を見つけた。それは職員の窓口対応の良否をその場で客に電子的に申告させるシステムである。ボタンを押される側にとってはすごいプレッシャーかもしれないが、社を挙げて顧客サービスの向上に取り組んでいる姿勢は評価できる。それに倣って本学でも教務課を始めとした窓口で学生サービスの一環として同様なことが他大学に先駆けて出来ないであろうか。学生や保護者の満足度以外に入試戦略的

にも役立つものと思われる。

以上考えつくままに述べてみた。ここで私的なことにはなるが、自宅の隣は個別指導の学習塾であり、少子化の中、新興住宅地では大盛況である。その理由について少し話を聞いてみると、現在の親御さん世代は人口が多く大手予備校などでマスプロ教育を受けた世代であり、その時の経験から自分の子供にはマスプロ教育を受けさせたくないという思いが強いので、個別指導を望んでおられるとのこと。やがてこれらの個別指導で育ってきた子供が大学にも入学してくることになる。18歳人口がこれからも減少してゆくなか、他大学との差別化を図り、本学も選んで貰える大学として生き残るためには、「大学は自分で勉強するところ」と言った一見正論ともいえる旧態依然の考えを捨て、本学も“てとりあしとり”でコンサルティング的な要素をもち顧客満足度を如何にして高められるかにかかっており、それを実現するための有効な手段・機能をもった大学・キャンパスが将来的に求められてゆくだろう。

教育思想から考える、これからの大学キャンパス

全学教育機構 教職教育センター 准教授 塩見 剛一

大学キャンパスのこれからを考えるなら、暗い予想ではなく、できれば明るい希望を見出したいものです。手放しで希望だけを述べるとすれば、現在の困難な状況に対峙するなかで、多くの人が趣向を凝らし知恵を働かせ、さまざまに工夫することで、革新的な技術や、新しいだけでなく快適でもある生活様式、今までにない豊かな価値観が生まれるかもしれません。イノベーションの誕生に期待したいのはやまやまですが、残念ながら私には、先進的な技術に関する知識や、新奇なキャンパス像のアイデアの持ち合わせはありません。ただ私にできることは、大きな改革や希望の喧伝ではなく、大学教育にかかわる過去の思想の知恵を借りることです。大学の本質とは何かを過去から学び、「今、ここ」でどのような発想の転換ができるかを問うことが、これからの大学の歩む道筋を照らす光明となるのではないか、というささやかな願いを述べてみたいと思います。そこで、フンボルトの思想を参考に見てみます。

フンボルトの大学教育理念—孤独と自由

フンボルトというと、フンボルトペンギンやフンボルト海流といった名称が思い浮かぶのではないのでしょうか。これらの名前の由来となったのは、ドイツの探検家で地理学者のアレクサンダー・フォン・フンボルトでした。ここで参照するのはアレクサンダーの兄であり、言語学者で政治家のヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)の思想です。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはプロイセンの文部大臣として、ベルリン大学の創設(1810)に携わりました。彼の大学教育に関する思想は「フンボルト理念」として知られ、「ベルリン高等学術施設の内的ならびに外的組織について」という未完の文書に記されています。そのなかでフンボルトは、高等学術施設つまり大学の本質は学問にあるといい、「孤独と自由(Einsamkeit und Freiheit)はこの領域で支配的な原理である。」(Humboldt1985: 118)といます。この「孤独と自由」という言葉はよく知られ、大学の理念としてしばしば引用されるところです。

自らの意志の下、学問に打ち込むことを「孤独と自由」と表現するのでしょうか、それでは、大学キャンパスにおいて「孤独と自由」を生かし学問に向き合えるのはどこでしょうか。私が考えるのは、図書館です。もちろん、パソコンに向かっても、人影の少ない教室で自学するのも「孤独と自由」かもしれませんが、皮肉なことに今、「孤独と自由」だけは豊かに与えられている、とも考えられます。

ですが、本当に私たちは孤独で自由なのでしょうか。ふいに訪れる着信音や提出期限の迫る課題、おもわず辿りたくなるネット上の情報など、外部とつながり、外からの意志に動かされ続けているともいえます。「私たちは注意散漫の世界に生きている」(ウルフ2020: 100)という言葉に、深く首肯せざるをえません。電子機器の電源を切り、外部から自発的に孤独になって、時間に追われることなく知の世界に浸りきることができる場所が図書館です。そこでは大きな声で話す人もネットサーフィンに時間を奪われることもありません。そして、日本の中世の教育施設の始まりが図書を集積した金沢文庫であり、また文庫を備えた「足利学校」であったことを考えると、図書館を中心とする将来のキャンパス像というのは、いみじくも教育施設の大元の姿に帰ることともいえそうです。

もちろん、学問分野によっては実験など、図書館でできないこともあるでしょう。だとすれば、それぞれの場で「自由」かつ「孤独」な環境が生じるようにすることが、これからの大学に求められるのではないかと考えられます。

「協働」がもたらす豊かさ

ところで、有名な「孤独と自由」の一文に続けてフンボルトが語った言葉はあまり注目されていないように思います。フンボルトは次のように記します。「しかしながら、人間の精神的な活動はただ協働(Zusammenwirken)によってのみ育まれる。」(Humboldt1985: 118) それも、のびのびと、無意図的に協働を生みだし維持しなければならない、といます。フンボルト理念としては孤独の語に注目が集まりがちですが、他者とのかわりがあり初めて成長がある、と述べられているのです。それも、学生の成長

だけでなく、教師の仕事も学生があって初めてうまくいくとフンボルトは言います。教師と学生、あるいは学生同士がお互いを高め合う協働が果たされる場合は、授業が基本でしょう。

しかし、オンライン授業で対面とおなじ協働が果たせるのでしょうか。どうも難しいようにも感じます。対面での授業ではオンライン以上に、教師は受講者の予期しない反応にたじろぐことがあります。そこに、新たな精神活動が生じているとも考えられます。それも、各人に問いかける機会が多くあり、問われることで応答責任が生じる少人数での学習において、協働は明確に現れるでしょう。オンラインで受けざるを得ない現状は変えられないにしても、少人数でこそ機能する協働を重視し、互いに学び合う小グループでの対面授業を重視し維持すること。それを生かすのはゼミナールや演習科目だけでなく、受講者の少ないニッチな開講科目の維持についても、これからのキャンパスに求められるのではないのでしょうか。

学問だけでないキャンパスのはたらき

フンボルト理念は近現代の大学教育に影響をあたえたといわれる一方で「産業化社会の進展に即応する実用主義的学問観に依拠する大学観によって激しく批判を招くことにもなった」（川添2008：434）ともいわれます。実用も大事ですが「不要不急」が声高に叫ばれる今だからこそ、一見無用なもの、趣味のものの価値やありがたさを身に染みて感じます。そういった感覚を抱くからこそ、大学の進むべき道は、さらなる産業化社会への最適化、実学の先鋭化だけでなく、実学から離れた「虚学」を大切にするのではないのでしょうか。フンボルト理念は大学教育の根本理念というだけでなく、時流に反するものとして批判を浴びてきたがゆえに、むしろ今を時流の変わり目とするなら、かえって見るべきものがあるのでは、と思います。

他方でフンボルト理念は学問を中核に据えています。この核は大学の名が示すとおり至当たと思いますが、中核があれば周縁や枝葉もあるはず。本質だけを追求し一色に染まることは、異質な存在や他者を排除すること

にもなりかねません。学問だけに純化するのではなく、一見「不純」に見える余白を残すこと。それがこの困難な時期を乗り越え、そしてまた失われやすい自由を守るために、大学キャンパスがもつべき懐の深さなのでは、と私は考えています。

引用文献

- 川瀬邦臣「フンボルト」『改訂版 教職用語辞典』橋本美保編、2019年
- ウルフ・M.『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』大田直子訳、インターシフト、2020
- Humboldt,W.v., *Bildung und Sprache*, Ferdinand Schöningh, Paderborn, 1985
- フンボルト・W.v.『人間形成と言語』クラウス・ルーメル、小笠原道夫、江島正子訳、以文社、1989年

学生による、教員の研究テーマ紹介

学生による、
教員の研究テーマ紹介

Student Introductions of Faculty Research



令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)奨励賞作品
『和洋折衷』
加藤 竜一(工学部 交通機械工学科)

国際学部 紅粉芳恵先生研究室

国際学部 国際学科 畑 絵梨奈

紅粉先生の研究テーマは、「中国語教育」、そのなかでも中国語の語彙学習を専門とされています。これまでに中国語入門者から上級者までが使えるレベル別の単語帳、上級レベルになると知識として欠かすことができない四字成語のハンドブックを出版されています。また「中国語学習ジャーナル：Chinese Station」(<http://www.ch-station.org/>)というWEBサイトの制作・運営もされていて、中国語学習者のために様々な情報を発信されています。

私たち紅粉ゼミのメンバーは女子3人、男子1人の4人です。中国語ゼロスタートから1年半で留学に行けるレベルの中国語力を身につけるため切磋琢磨しあって勉学に励み、留学生活や就職活動を共に乗り越えてきました。現在はそんな仲間と紅粉先生の指導のもとで中国語の語彙に関する卒業論文作成に勤しんでいます。

畑

それでは紅粉先生、インタビューをさせていただきます、よろしく願いいたします。4年目にして、今更改まった感じで先生にお聞きするのは気恥ずかしいですね(笑)

紅粉先生

そうだよ(笑)。みんなとのこの3年半を振り返りながら、質問に答えていきたいと思います。

畑

では早速ですが、私たちは先生にとって初めてのゼミ生ということで、昨年度の国際学部1期生である先輩方の進捗状況を踏まえて、かなり早い段階から卒論に取り組み始めましたが、全体の所感としてはいかがでしたか？

紅粉先生

卒論のテーマを見つけるというのはなかなか難しく、大風呂敷を掲げすぎても書けないし、1年以上の時間をかけて仕上げるので自分が興味を持ったテーマでないところまた書き続けることができません。ゼミを通して自分の興味のありかを探り出していく作業を時間をかけてやったことで、みんな良いテーマが見つかったのではない

かと思います。

畑

そうですね、私の場合、テーマが固まるまでに割と時間がかかってしまったのですが、ゼミ生一人ひとりの卒論テーマに対して、どう評価していらっしゃるのかお聞きしたいです。

紅粉先生

みんな留学に行って自分の中国語レベルがどれほどのものかというのを体感して、それをもとにテーマを選んだと思うのね。畑さんは「日中同形異議語について」、今村さんは「日中のオノマトベについて」、村田さんは「様態補語フレーズについて」、岡崎くんは「成語について」と語彙がテーマになったから、お互いの研究を参考にできるので非常に良い形になったと思います。

私の研究分野は中国語語彙を中心とした中国語教育なので、みんなにはただ調査・研究して論文を書くだけではなく、それを成果物として中国語学習者に還元して欲しいという思いもあって、教材作成も含めて卒論を書き上げて欲しいと一段階ハードルを上げたけど、みんなしっかりとやっていると思います。

畑

先生がおっしゃったように、半年間の上海留学は私たちの中でもかなり貴重で、ターニングポイントとなる経験となりました。1年生から留学に行くまでビシバシと私たちを鍛えてくださった先生ですが(笑)、私たちの中国語を学ぶ姿勢や留学後の成長など、どのように見てくださっていたのか聞かせて頂けると嬉しいです。

紅粉先生

COVID-19で留学が半年だけとなり、みんなにとっては本当に無念の帰国だったと思います。5セメはオンライン授業となり、私が担当した「中国語総合1」の授業は、留学で身につけた中国語力を維持してもらうために中国語でやり、孔子学院の李翔先生にもゲストで参加してもらうなどしたけど、それぞれがレベルアップしていてほんとに驚きました。だからあと半年留学ができていたらもっと力がつい

ただろうに……と思うと残念でした。そして中国語力だけでなく、人間的にも成長したと思う、なんというか自信がついたのかな。留学前はそんなに積極的でなかった人が積極的になり、畑さんのようにもともと積極的だった人はよりパワーアップしたと思います。

畑

そう言っていただけて非常に嬉しいです。学年ごとに、色というか雰囲気はまた違うと思うのですが、私たち18P生は他の学年に比べてどのような印象なのでしょう？一人ひとりの性格や中国語への興味・関心度なども踏まえて聞かせてください。

紅粉先生

18Pの中国語コースの学生は7人ですが、みんな個性的ですよ。ま、中国語をやる人は個性が強いのかもかもしれませんが(笑)。1年生の時から女子3人が勉強面では男子を引っ張って行ってくれたと思います。私の中では、これは彼に任せたら大丈夫、これは彼女に任せたら大丈夫というのがあって、使い分けをしてました(笑)。中国語コースの母として、みんなの成長を見守ることができたのは、私にとって本当に幸せなことだと思います。

畑

ありがとうございます。先生からはそんな風に見えていたのですね、おもしろいです。

さて最後の質問になりますが、春には大学を卒業し社会人になるメンバーもいれば、中国の大学院への留学を目指しているメンバーもいます。それぞれの道に進む私たちへメッセージをお願いいたします。

紅粉先生

みんなは、人生100年時代、日本の国力がどんどん右肩下がりになり、不確実な要素がたくさんある中で、今の年齢の4倍近くを生きていかなければいけません。これで単位を取るための勉強は終わりだけど、次は自分の人生をより良く生きるための知識のアップデートをやってもらいたいと思います。中国の諺に“活到老、学到老”

(生きている限り学び続ける)というのがあるのですが、正にこれです！

畑

ありがとうございました。先生の学生への想いを感じることでできるメッセージで、非常に温かい気持ちになりました！^^ あと半年弱ですが、今後ともよろしくお願いたします。卒論完成に向けてがんばります!!!今回はこのような機会を頂き、ありがとうございました。



▲著作



▲ゼミメンバー

スポーツ健康学部 宮本忠吉先生研究室

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 早瀬 朱莉

本稿では、スポーツ健康学部の先生が実践されている研究について紹介をします。今回は、スポーツ健康学部の教授「宮本 忠吉」先生にお話を伺ってきました。宮本先生には、ご自身の研究に関するだけでなく、本学で担当されている授業のことや先生が担当されているゼミでの活動についてもお話を聞くことができたので、その点も紹介させていただきます。



担当授業について

本学で担当されている授業は、スポーツ科学実習など「一般体育」と呼ばれるものです。この授業では、スポーツ科学に関する概論的な内容を取り扱うとともに、卓球、バドミントン、テニスなど、生涯スポーツに通じるスポーツ種目を実施しています。スポーツ健康学部で実施されるスポーツ実技授業は、そのスポーツ種目に関する専門の技術や教え方など「スポーツの専門家を育てる」という視点で授業が実施されますが、一般体育は、スポーツを手段として使い、自分(学生)自身の健康増進や学園生活を楽しく過ごせる場を提供することを目的とした授業となっています。

研究分野について

呼吸・循環器系、筋肉の代謝などの生理機能が運動によってどのように変化するのか、そのメカニズムを調べる研究をされています。例えば、アスリートの心臓の大きさは、一般の人の2倍程度あるといわれています。その2

倍程の大きさを誇る心臓が血液を通して筋肉まで酸素を送り込み、運動パフォーマンスをどの程度上げるのか?といった仕組みを調べたり、なぜアスリートは、そのような優れた心肺機能を持つに至ったのか?といった原因を探ったりする研究をされています。

具体的に、どんな研究をされているか尋ねてみると、下記のように教えていただきました。

宮本先生

人間の身体は、トレーニングを実施することによって、酸素不足や血圧上昇といったストレスを感じます。そして、身体は、そのストレスの原因となっている酸素不足などを、どのように補えば良いか?を学習し、ホルモンなどの体内の仕組みを使って機能改善を図っていきます。その仕組みを解明していくことで、「より効率的なトレーニング方法」を提案できるようになると考えています。

例えば、10~15分程度の高強度トレーニングを週1回実施する場合と、中~高強度のトレーニングを毎日長時間実施する場合(運動部活動など)とでは、身体の機能の変化に違いがないことが明らかになってきました。つまり、毎日コツコツとトレーニングを続けている人と週1回程度、自分自身の限界に迫るような高強度のトレーニングをしている人とは、そのトレーニング効果に違いがないということです。これは、短時間で効果を得ることができる効率的なトレーニング方法があることを示しています。

今後は、これらの研究をさらに発展させていき、将来的にはアスリートが怪我無く、楽に、効率的に身体機能を高めることの出来るトレーニング方法を開発・提供していきたいと考えているそうです。また、一般の人のQOL向上、健康増進、疾病予防、老化防止などを目的としたトレーニングメニューの開発・提供、疾患を抱えた人の身体機能回復などを目的としたトレーニングメニューの開

発・提供など、幅広い層に向けた「効率的で優れたトレーニングメニュー」を提供できるようになることを最終目標とされており、多くの人がそれぞれの目的に沿ったトレーニングを「効率的で」「短時間で」実施できるようになる未来が来るかもしれないと思うと、ワクワクしました。



ゼミについて

ゼミでも同様に、運動による身体機能の変化、身体の仕組みについて理論と実践を往還しながら学んでもらうようにしているそうです。それらの学びや経験を通して、「身体機能の測定ができる」「測定結果を正しく読み取り、評価できる」「測定結果をもとに、身体機能について説明できる」といった3つのことを身に付けてほしいと考えていらっしゃいます。

自分自身の身体に興味を持って、身体機能を測定できる装置を使って学んでみたいという意欲がある学生達と

ともに先生ご自身の研究を進めたり、学生が、その研究の一端を担ってくれたりすることが大変嬉しくて、ゼミの時間は先生にとってもかけがえのない時間となっているとのこと、宮本先生のゼミに所属すると学びもたくさんあるし、先生やゼミ生と一緒に学びながら楽しい時間を過ごせるような気がしました。

終わりに

1つ1つの質問に対して、丁寧に優しく受け答えしてくださった宮本先生。先生の研究現場にはたくさんの測定装置があり、たくさんの学生が測定に夢中になっていました。研究に対して真摯に向き合っていらっしゃる宮本先生の周りには、情熱に満ちあふれた人達が集まってくるんだろうなあと感じました。貴重なお時間を頂きまして、ありがとうございました。



経営学部 澤登千恵先生研究室

経営学部 商学科 森本 恵未

森本 先生の研究テーマは何ですか？

澤登先生 私の研究テーマは「19世紀イギリスの鉄道会計とガス会計」です。ですが、ゼミでは、皆さんに会計知識の有用性を実感してもらうことを目的に、会社の経営のシミュレーションを通して会計の実践を行っています。

森本 卒業までに「使える会計技術」を身につけて欲しいと？

澤登先生 そのとおりです(^^) /

ここでもっとイメージが湧きやすいように、どのようなことを実際に勉強しているのかについて、私がおもしろいと感じた内容を中心に紹介します。

まず、ゼミ生それぞれが、投資したい企業を選んで、安全性や収益性、株価の分析をし、他社と比較し、その結果を発表し合いました。そして、出てきた企業の中からみんなだ5社を厳選してYahoo!ファイナンスでポートフォリオを作成しました(株を疑似購入しました)。株について最初はピンとこなかったのですが、この授業を通して、投資したいと思える企業の探し方や数値の見方を学ぶ事ができました。

続いて、自分が経営者になったことを想定して、事業計画書を作りました。その計画書にそって損益分岐点図表を作成し、何回取引すれば利益が出るのかを算定しました。経営するときの大まかなイメージを浮かべやすくなった授業でした。



▲鈴木ゼミ、澤登ゼミの合同写真

森本 今年は、鈴木ゼミと合同で、大東市役所と産経新聞社と協力し「大東市の魅力を伝える」というコンセプトでの企画も実施してますね？

澤登先生 はい！ゼミ生の皆さんの視点で、大東市の魅力をInstagramで発信してもらうことに挑戦しています。Instagramでの発信経験は、皆さんが将来、ビジネスパーソンとして活躍するときに「絶対、役に立つ!」と考え、この企画に参加しました。

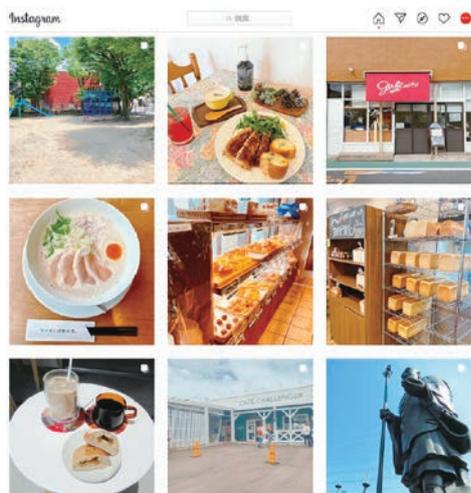
私たちゼミ生は、大東市のグルメや観光、人物などを取材してInstagramに投稿するといういわゆる「インフルエンサー」として活動しています。私はあるカフェ屋さんへ取材に行かせていただきました。店主のおすすめや料理のこだわりを取材したり、外観や内観の写真を撮らせていただいたりしました。投稿する際には、見やすさを重視した文章の構成や写真選び、ハッシュタグを多くつけて、たくさんの人に大東市の魅力を届けられるようにと工夫を凝らしました。

森本 最後になりますが、突然ですが先生に質問してもいいですか？

澤登先生 はい!なんでも答えますよ!



▲大東市グルメNo.1を決めた座談会!



▲Instagram「daito_shimbun」



▲Instagramへの投稿

森本 ゼミ生みんなと一緒にしたいことってありますか？

澤登先生 ゼミ生で一番したいのは、バーベキューですね！澤登ゼミではまだしたことがないので…。火起こしから、飯盒炊爨、最後の焼きそばまで！ただし、私は火起こしや飯盒炊爨はできないので、これらは皆に任せたい(笑)

森本 皆でバーベキュー楽しそうですね！私はバーベキューしたことないので、バーベキューしたことある子に火起こしから教えてもらって頑張りたいですね(笑)するとしたら、こんな場所ですてみたいという理想とかがありますか？

澤登先生 学研都市線だと、寝屋川公園でできるみたいですが、材料やコンロとかは皆でもって来ないとダメみたいです。ここでもみんなの協力が

必要です(笑)

森本 本当に一からみんなの協力が必要だと、ものすごく絆が深まりそうですね(笑)

澤登先生 はい(笑)本当の理想を言うと海辺でしたいです(笑)それこそ、夜に花火とか！それじゃあ、一泊になってしまいますね(笑)

森本 海辺最高です(笑)なんだかバーベキューしたくなってきました(笑)いつかゼミ生で本当にできると良いですね！

澤登先生 そうですね！

最後に(ゼミの雰囲気)

新型コロナウイルスの影響で、前期はほとんどオンラインで授業を行っていました。私は画面越しでしか皆の顔を見ることができず、少し寂しい思いをしながらも、それぞれの人物像を膨らませながら毎回の授業を楽しく受けました。そんな中でも、先生が一人一人が発言できる時間を設けてくださったため、みんなのことを知ることができました。例えば、出欠確認をする時に近況報告や自分の情報を共有したり、授業の中でプレゼンテーションを使って発表する際に、一枚目を自己紹介欄としてはさんだりすることで、みんなの個々の性格や趣味、好きなものを知ることができました。後期になると、対面で授業が行われるようになりました。オンラインの画面越しで見ていたみんなに直接会って、さらに個性あふれた雰囲気や圧倒されたのが印象に残ってます。澤登ゼミは、真面目ですが、必要な時やあるいはグループディスカッションするときは、楽しく話し合いながらもしっかり意見交換ができるゼミです！



▲授業風景

経済学部 李東俊先生研究室

大学院 経済学研究科 呂秋陽

呂

今日は先生の研究テーマについてインタビューさせていただきます。よろしくお願ひ致します。

李先生

こちらこそよろしくお願ひします。

呂

それでは、早速ですが、先生の研究分野についてわかりやすく説明してください。

李先生

私の研究テーマですが、広い範囲で言えば、応用ミクロ経済学(=Applied Microeconomics)の理論研究です。狭い範囲で言えば、産業組織論(=Industrial organization theory)です。より具体的に説明すれば、世界で起きている経済現象を経済学の理論モデルを用いて説明することです。

呂

ありがとうございました。次の質問ですが、私は先生について少し調べてみましたが、先生は大学での学部は貿易学科でしたね。それは経済学ですか。

李先生

貿易学科も経済学の一つの分野です。それは国際経済学として理解すれば分かりやすいと思います。その学部では経済学の基礎分野である数学や統計学、および計量経済学などを習ってから、経済学、国際経済学、金融論、国際金融論などを学びました。

呂

はい、分かりました。それでは次の質問ですが、先生は修士号を取得した後、約10年間会社で働いていたと伺いましたが、そのときの仕事の内容は何でしたか。

李先生

そのとき、生命保険会社や証券会社でファンドマネージャーとして働きました。ファンドマネージャーの主な仕事は2つあります。一つは株や債券、およびデリバティブなどの金融商品の売買です。もう一つは、企業訪問やIR(=Investor Relationship)参加です。残念ながら仕事

の内容は研究分野と全然違います。

呂

はい、良く分かりました。次の質問ですが、研究分野と仕事の経験は何か関係がありますか？

李先生

直接には関係なさそうに見えますが、それらは関係があると思います。仕事をするとき、数多くの大手会社に訪問していましたので、ある産業の特徴や企業成長に必要なものなどを広く取得することができました。そのような基礎知識や現実の例は理論研究をやる人でもちゃんと理解しておく必要があります。

呂

はい、分かりました。先生は仕事を辞めて博士課程に進学した理由は何でしたか

李先生

あの、そのとき仕事に疲れていました。その切り口として博士課程に進学することを決めました。しかし、40代の私にとってそれはチャレンジでした。私の人生にとっては一番大きなチャレンジでしたよ。博士号を取ったとしても仕事が不透明な状況で、仕事を辞めてから博士号を取りに日本に来ましたので。

呂

次の質問ですが、先生にとって理論分野の魅力は何ですか？

李先生

理論経済学の魅力は、頭以外には何も必要ないです。頭や紙およびペンさえあれば、理論研究は十分です。ただほかの分野は、別のものがたくさん必要です。ですからそれは自分でコントロールできないから、一応自分の頭とボールペンと紙さえあれば行けるところでやっています。

呂

次の質問ですが、学校のホームページには、研究分野のキーワードはNetwork Effect、Private Information、Passive Belief、Wary Beliefなどが書かれていますね。その中でNetwork EffectとPassive Beliefの意味をわ

かりやくす説明してください。

李先生

Network EffectとPassive Beliefの意味ですね。Passive Beliefはライバル企業の情報が分からないとき、例えば、相手企業の限界費用が観察できないときです。クールノーモデルは自分の限界費用も相手企業の限界費用も観察できる状態で、競争モデルを解きます。しかしながら、そのPassive Beliefとは、相手の限界費用が観察できない状況で、Passive Beliefという概念を使って均衡を解きます。ネットワーク効果についてですが、携帯電話をはじめとする情報関連財は、個々の消費者が財を消

費するときに得られる効用が当該の財の属性のみならず、同種の財を利用する他の消費者の数に依存していることが多いです。このように他の消費者の数に消費者の効用が影響を受けるとき、ネットワーク効果が存在するといいます。時間があれば教えます。

呂

はい、分かりました。ありがとうございました。今日のインタビューは以上でございます。ありがとうございます。

李先生

はい、ありがとうございます。

デザイン工学部 船曳悦子先生研究室

デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 出川 翔

出川

先生の専門分野と研究内容について教えてください。

船曳先生

私の専門分野は建築計画学です。都市・建物といったヒューマン・スケールの環境におけるデザインやその空間構成要素を研究しています。現在のテーマは、「駅周辺空間の人の行動」ですね。コロナ禍によって、ソーシャルディスタンスの確保が日常の生活スタイルとなる中で、駅周辺空間で人の行動がどのように変化したのかに着目しています。人って面白いですね。ポケモンGOの配信が開始された時も人の行動がしばらくの間は変化して、数カ月経つとともに戻っていました。身近な生活の中で、研究テーマに遭遇することがあって楽しいです。

出川

卒論ゼミを受講しているときによく分かります。先生を見ていると楽しそうで。

船曳先生

基本的に調べることが好きなのかもしれないですね。研究の楽しさがゼミ生と共有できているとより嬉しいのですが…。コロナのため、研究室の恒例行事であるゼミ調査旅行に2年連続で行くことができず残念ですが、今だからこそ取り組む価値のある研究テーマがあると思うので、そのあたりをゼミ生と探っていきたいですね。今年のゼミ生の研究のテーマは、私の興味範囲のど真ん中に位置づけられるテーマを見つけてくれる学生が多くて、成果が楽しみです。

出川

卒業研究の中間審査が終わり、そろそろ本腰を入れなければいけない時期になってくると思いますが、アドバイスをお願いします。

船曳先生

まず、正確な研究スケジュールを立てることです。そのため、自分の作業スピードを把握しておく必要があります。人間は機械ではないので同じペースでこなすことはできません。だから1時間でどこまで、半日でどれくらいでき

るのか、できるだけ正確なペースを掴むこと。そして、どれだけの作業工程があり、いつまでに完成させなければならないのか、締切日から逆算します。上手くスケジュールを立てることができたら、全体の6割が終わったようなものです。後は進めるだけです。自身にノルマを課して、できるまで寝れないとか…。でもこれはあまりおすすめできませんね。人間、究極に眠たくなると知らない間に寝落ちしてしまいます。私がまだ学生の頃、指導教員に「研究はセンスとガッツだ!」と言われたことがあります。本質が何か見極めることができなければ、研究自体がグラついてしまいます。膨大なデータを前にして、自分が正しいと思った方法で喰らいつく、忍耐力も必要なんですよね。私、忍耐力だけはあるんですよ。3歳から18歳まで15年間ほど器械体操をやっていたので、負けず嫌いで、技を修得できるまで練習を繰り返す、運動神経は抜群だったんですよ。今では見る影もないですがね。研究は、それを抜いて20年間以上やっていますね。それだけ打ち込めるものを見つけて、幸せ者です。

出川

研究の息抜きは、何かありますか。

船曳先生

コロナ禍でパソコンの前にいることが多くなり、応援したいピアノ系YouTuberを見つけまして、そのピアノの音色に癒されていますね。もう少し余裕ができればピアノを再開したいですね。5歳から14歳までピアノ教室に通っていました。その当時はピアノが嫌いでしたが…。

出川

今までに手掛けられた研究の中で、一番しんどかった研究はありますか。

船曳先生

一番しんどかったのは、最近のビジネスホテルに多い2配色の壁の研究ですね。出張先で4面の壁の内、1面だけが色がついていて、どうしてだろうと思ったのがきっかけです。出張ついでにデータを集められるから、一石二鳥と思って始めたのですが…。何が大変だったかという、ま

ず、2色配色のビジネスホテルを宿泊サイトで選ぶこと。初めは駅周辺の立地なのですが、だんだん駅から離れ辺鄙な場所になります。ホテルによっては、サービスで部屋のグレードを上げてくれたりします。そのために2色配色の部屋ではなかったりしたときには、落胆します。部屋に入って見るまでわかりません。その上、疲れて部屋に入っても調査を先に済ませる必要があります。連泊する場合には、1泊ずつ別のビジネスホテルに泊まり、できるだけたくさんのデータを取るようになります。約5年で100件



▲卒業研究中間審査に向けて頑張っている様子

のデータを集めて、やっとまとまったという感じで、足で稼いだ研究ですね。

出川

最後に、今年度のゼミ生に向けて一言。

船曳先生

船曳研究室も6期生になり、研究室として充実してきていると思います。精一杯卒業研究に取り組んで、巣立って行ってほしいと思っています。



▲船曳研究室恒例のゼミ調査の一コマ

工学部 川野大輔先生研究室

大学院 工学研究科 寺田 将也・浅井 優騎・武元 章

川野先生

エネルギー変換研究室は、空力やエンジンなどの自動車に関する研究を中心に行っています。自動車の性能を向上するためには、損失を減らすことや効率を上げることが必要不可欠です。ここでは、研究室の3つの研究に焦点を当て、担当の学生から紹介させていただきます。

川野先生

まずは、空力の話聞きましょう。なぜ、空気抵抗に着目したのでしょうか？

空力チーム

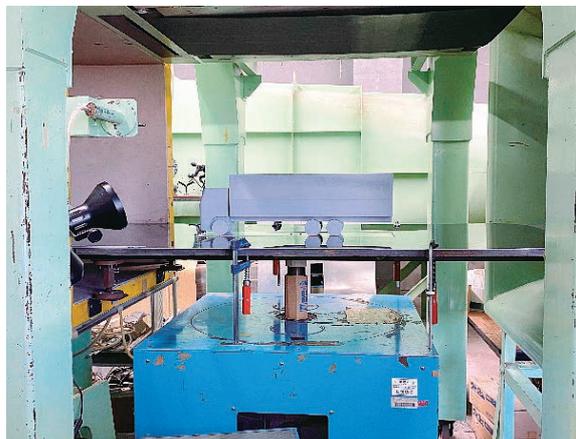
空気抵抗は速度の2乗に比例するため、高速道路走行が多い大型トラックでは、空気抵抗を減らすことで実際の燃費が大幅に改善されることが期待できます。しかしながら、車両寸法には制限があり、特に重量車では荷室を確保する必要があることから、空力を向上するために大幅に車両形状を変更することができないのが現状です。

川野先生

トラックの空力性能を大幅に向上するためには、何をすべきと考えていますか？

空力チーム

車両寸法制限や燃費試験法の法改正を行うことが必要だと考えます。そこで本研究では、風洞試験装置や数値シミュレーションを使って、現行の法律に規定されている全長や車幅などを考慮せずに、空力性能を大幅に改善す



▲図1 風洞試験装置

るための車両形状の研究を行っています(図1)。

川野先生

ありがとうございました。次に、バイクの排気騒音予測の研究についてお聞きします。なぜ、バイクのマフラー音の予測を行う必要があるのですか？

エンジン騒音チーム

バイクからの騒音を測定するためには、都市部の走行状況を踏まえた走行状態で、テストコースや実験装置上で実車両を走行し、騒音計で測定します。また、マフラー性能はエンジン性能にも影響を与えます。そのため、マフラーの試作品を多く製造する必要があり、膨大な費用や時間が必要です。

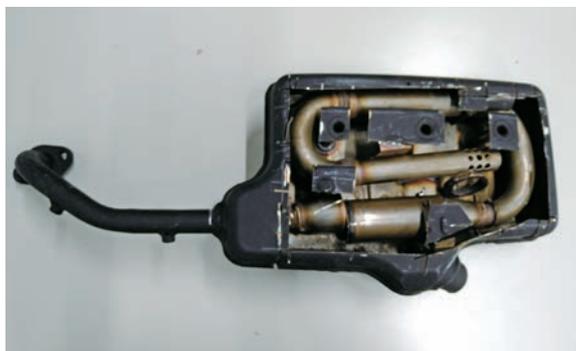
川野先生

この研究は、1次元シミュレーションを使用していますが、その理由はなにですか？

エンジン騒音チーム

1次元シミュレーションは、流れの方向のみ解析するため、計算時間が短く済みます。そのため、マフラーの試作回数を少なくすることができ、法規制値を下回り尚且つエンジンサウンドの要求に答えることのできるマフラーを少ない工程で作ることができます。

マフラー音の実車試験を行い、シミュレーションと比較することで、計算誤差の特定を行っています(図2)。



▲図2 マフラーのカットモデル

川野先生

ありがとうございました。次に、エンジン燃焼チームにお

聞きします。カーボンニュートラルへの動きが加速する中、どのようなエンジンの研究をしていますか？

エンジン燃焼チーム

エンジン燃焼チームでは、カーボンニュートラルに向けてガソリン系燃料とディーゼル系燃料双方の研究をしています。ガソリン系燃料では、木材ゴミからエンジンを動かす研究を行っています。木材ゴミを酸素が薄い中で高温にすることで可燃性ガスを抽出することができます。そのガスをエンジンに供給することでエンジンを動かすことができます。ゴミからエンジンを動かすため、環境にやさしいエンジンです。

川野先生

このシステムの問題点はありますか？

エンジン燃焼チーム

木材ゴミからエンジンを動かすまで大規模の設備が必要となることや、高温にするために電気やガスが必要となるため効率が悪くなります。そこで本研究室では、木材ゴミからエンジンまで小規模な設備で行い、エンジンから出た熱を利用することで高効率となるシステムの研究をしています(図3)。



▲図3 ガソリン系エンジン試験装置

川野先生

ディーゼル系燃料ではどのような研究をしていますか？

エンジン燃焼チーム

ディーゼル系燃料では、e-Fuelの研究をしています。e-Fuelとは、風力発電や太陽光発電などで発電された

カーボンフリーな電力で水などから作られた水素と、大気中のCO₂を使って作る燃料のことです。自動車メーカーが水素を使ってエンジンを動かす研究は盛んに行われていますが、水素は気体であるために、輸送コストや保管が難しい問題点がありました。そこで、このe-Fuelが考えられさまざまな種類の燃料が作られています。本研究室では、電動化が難しい貨物車利用を想定し、e-Fuelの燃料性状を生かした高効率な燃焼方法の研究を行っています。現在トラックは、ディーゼルエンジンを使用しているため、大幅な改造を必要とせずにe-Fuelの実用化が可能であると考えています。実用化されれば、太陽光発電などの再生可能エネルギーからエンジンを動かすためCO₂排出が実質ゼロとなります(図4)。



▲図4 ディーゼル系エンジン試験装置

川野先生

ありがとうございました。

本研究室では、実験とシミュレーションの併用を心掛け研究しています。エネルギー社会の変革時代を牽引していけるような研究をこれからも行っていきます。

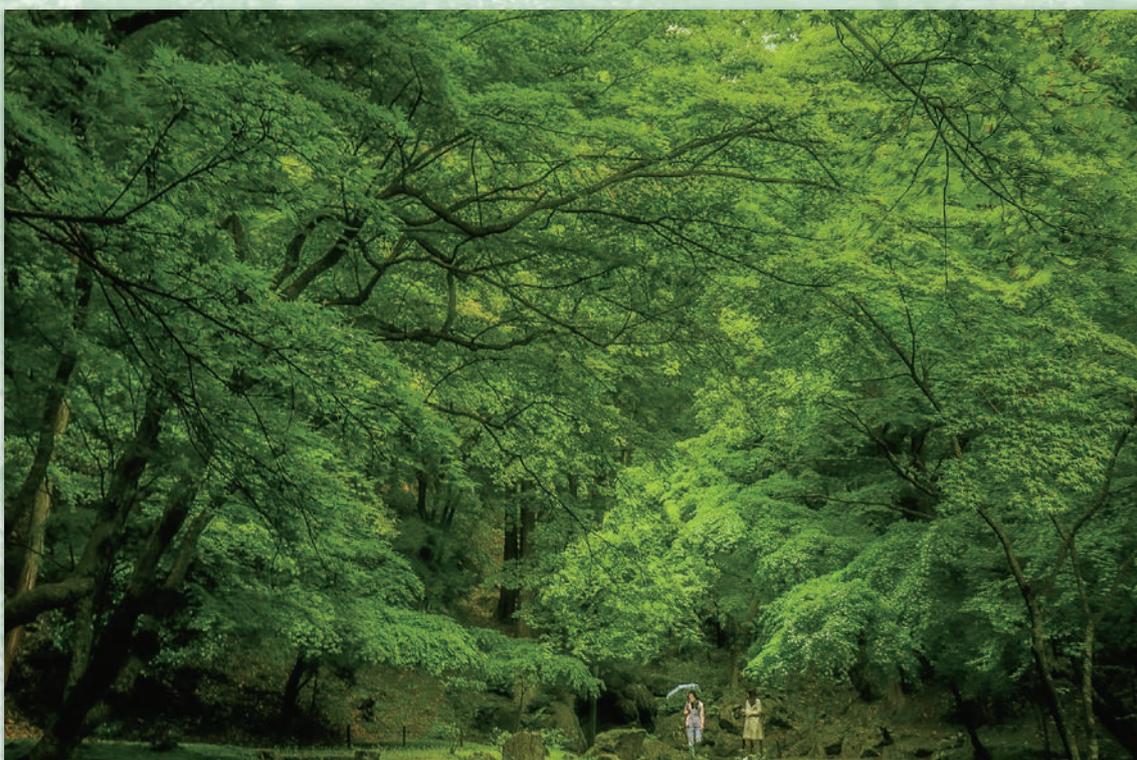


▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)奨励賞作品
『見返り美人』
西倉 匠惟(経済学部)

各支援部門の活動紹介

各支援部門の活動紹介

Introduction of Support Division Activities



令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
「やすらぎの庭」
南 雄大(工学部 都市創造工学科)

COVID-19(新型コロナウイルス)禍における 就職活動の変化とその支援

キャリアセンター 富永 利和

令和元年中に発生したCOVID-19(新型コロナウイルス)は、令和2年初頭から日本国内にも影響が広がり、国民の行動制限と経済活動に大きな影響を与えることとなり、本学においても3月に開催を予定していた卒業式の式典を中止したことに始まり、令和2年度のオンライン授業の実施、入学式などの各イベントも感染防止を目的とした参加人数を制限した開催形式に変更するなどの事態となりました。

キャリアセンターではCOVID-19感染拡大を受けて、まずキャリアセンター内での感染防止対策を実施することから始めました。

アルコール等の飛沫感染対策用品という職場での感染対策に加え、職員がオンラインでも学生対応できる環境整備のため、パソコンの購入から始まり、Googleドライブの利用による情報の共有、SUBLINEを利用した学生への連絡体制の整備等を行い、課内でのオンライン対策の練習会なども実施しました。それに加え、センター内で危機管理対策として、大学に出勤する職員とオンラインで在宅勤務する職員をシフト制とし、いずれかのグループで感染が生じてもキャリアセンターの就職支援が継続できるよう、勤務体系を整備しました。

また、学生の就職支援についても次のような、取組を実施しています。

ZOOM等のオンラインツールを利用した学生面談

WEBによる予約制で、各担当者がオンラインで学生からの就職相談を受け、履歴書等の添削や企業採用情報の提供等を行います。

人数を制限した対面面談

WEBによる予約制で、オンライン面談で実施することが不可能な指導を対面で行います。

就職ガイダンス動画の配信

就職ガイダンス動画等を配信し、オンデマンドで後日に視聴できるようにし、低学年生にも公開しています。

オンラインによる企業説明会の開催

採用選考に直結する個別または複数の企業による合同企業説明会を開催しています。

また、令和元年度までは体育館で実施していた大型企業研究会も令和2年度は開催時期を前倒して11月にオンラインで約200社の企業が参加する「OSU就活フェスタ」として開催しました。

前年度より多くの学生の皆さんが参加し、各企業の事業内容や採用情報を得ることにより早期に就職に向けた意識を高めてもらいました。

キャリアカウンセラーによるオンライン講座の開催

キャリアカウンセラーによる「就活の進め方講座」や「履歴書・エントリーシート書き方講座」等の各講座を企画し、随時開催しています。

LINEによる情報発信とチャットによる相談受付

キャリアセンターが開催するイベント情報等をポータル以外で学生の多くが利用するLINEで情報を公開しています。

また、チャット機能を利用して学生や保護者がキャリアセンターへの質問を気軽に行えるようにしています。

インスタグラムによる情報発信

学生の多くが利用するインスタグラムを利用して、キャリアセンターの開催するイベントの発信とともに、就職活動に必要なノウハウ等も定期的に配信しています。

語学留学・海外研修の現状とオンライン研修の可能性

国際交流課 大友 康司

私はオンラインを含めITというものに疎く、書かせていただく内容には、誤解や理解不足があるかもしれませんことを、お許しください。ここでは、国際交流課が募集する派遣プログラムを基にお話しさせていただきます。

グローバル化云々と言いだめたのも随分以前のことで、本学の語学留学・研修と言えば、1998年に私が大阪産業大学附属高校から国際交流課に移った年の夏に、海外英語研修(短期大学部)に同行させていただいたときのことを今でも覚えています。当時は、大学がロサンゼルスに所有していたOSULAを拠点に研修を実施していました。その年の英語海外研修は、短期大学部が約50名、4年制学部も同規模であったと記憶しています。私は、参加人数が多いことに驚きましたが、現地での活き活きとした学生の表情が今も印象に残っています。しかし、残念ながら、近年は参加者が減ってしまっている状況で、募集に工夫が欠けることも要因の一つであると反省していますが、長引く不況とそれに伴い学生が後ろ向きになりがちなのもその要因であると強く感じています。それでも、比較的費用が安い研修地を追加し、派遣先となる大学と新規に協定を結ぶなど、語学留学・研修の環境と整備に取り組む、今後の発展に期待をしていました。

そんな時、2019年末にコロナウイルスの感染が始まり、年が替わって急速に感染が世界中に拡大し、本学でも中長期で海外に派遣していた多くの学生を急きよ呼び戻すことになりました。学長執行部と各語学の先生方の的確な判断と迅速な対応もあり、全員無事に帰国することができ、先生方には感謝しかありません。それから2年近く経過した今も、学生派遣は再開できておらず、留学・研修だけでなく、働き方、授業の在り方、ショッピング、レジャー、外食を含む食生活など、それまでの生活様式や常識も大きく変わりました。その中で、オンラインシステムが仕事や学習などに導入され、いろいろな方面に広がり進化してきました。IT後進国と言われる日本にとっては、当初オンラインの普及に手間取った感もありましたが、ITリテラシーを底上げできる良い機会でもあったと思いま

す。本学でも、学生だけでなくオンライン授業に不慣れな先生も中にはおられたと思いますが、今ではハイブリッド授業が当たり前になっています。ITとは言えないかもしれませんが、私も個人的にスマホに入れるアプリが増え、使う機会も相当増えています。

本学の海外語学研修でも2021年度は英語と朝鮮語の海外研修でオンラインを導入しました。海外現地留学・研修の目的は、語学力向上に加えて異文化交流を実体験することですが、語学力云々より現地でのホームステイや学校生活、買物、小旅行などを通して実際に現地の文化に触れ人と交流して、日本以外の世界を肌で感じることに重要だと思えます。ただ、この2年で、オンライン語学研修のクオリティーも向上し、オンデマンドから双方向型リアルタイムに移行し、現地学生や他国学生との交流を採り入れるなど進化してきました。本学のオンライン語学研修でも「バーチャル現地ツアー」や「現地学生とのオンライン交流」などを採り入れ、参加した学生からも好評を得ています。現地研修と比較すると、オンライン研修は費用も相当安く、自分の生活リズムを大きく変えることなく、安心して受講できるなど、メリットもあります。

現在、コロナ禍による各国の入国制限は、ワクチン効果もあり緩和する方向に動いており、海外派遣を再開する大学も徐々に増えているようです。国際交流課としても2022年度海外語学研修、後期長期派遣などについて、今後の状況に応じて、適宜学長の判断を仰ぎ、適切な準備を整えた上で、現地派遣を再開する予定です。今後も学生のニーズに合わせて研修個々のプログラムを柔軟に組み合わせるなど、オンラインのメリットを活用できればと考えています。

実は、大学のオンライン研修導入に先駆けて、2020年の夏期間に私自身もセブのオンライン研修を受講しました。8時～22時の間で自由に時間を選んで、土日も受講可能、全レッスンマンツーマンで講師が現地人であるため私にとってはネイティブよりも聞き取りやすく、多くのメリットを実感できました。オンラインでは、リアルタイ

ムに世界の人と簡単に繋がることができることを知識としては知っていましたが、経験のなかった私にとっては、それを実感できた瞬間でした。ただ、テキストがない、先方のネット環境が少々不安定でレッスン中にフリーズすることがあるなどマイナス面もありましたが、それも世界を知ることかもしれない。何れにしても、私にとってはとても満足できるものでした。

個人と世界、地域と時差、機器と設備などのネット環境

やその他の課題を今後クリアにする必要もあると思いますが、ITを効果的に活用しリアルタイムでの現地留学、研修をサポートすることで研修の成果を向上できるものとオンライン研修の可能性に期待しています。

でも、それ以上に現地留学、現地研修を希望する学生が、一日も早く、安心して、現地に赴き留学・現地研修が実現できるコロナ禍の終息する日が来ることを祈っています。

コロナ禍によって爆発的に加速した情報コミュニケーション技術とその今後、また、新しいICTと私たちの生活の変化について

情報科学センター 大屋 秀文

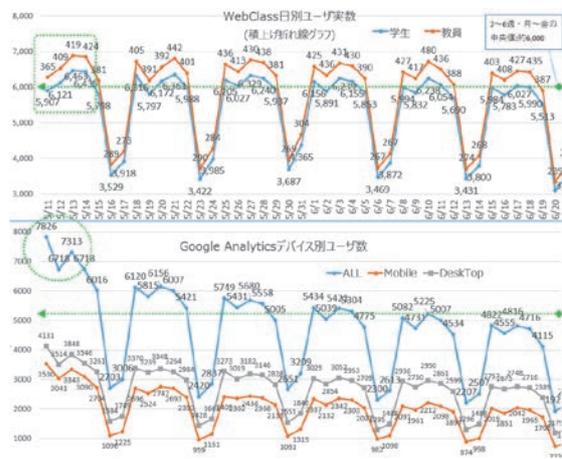
オンライン型遠隔授業の開始

令和2年4月に全国に緊急事態宣言が発出され、本学ではオンライン型遠隔授業を5月11日に開始した。

準備期間も少ない中、既に運用していたLMS (Learning Management System) 機能を持つWebClassを軸とし、大学ライセンスとして保有していたGoogle Meetを活用することになった。多くの教員や学生がこれらを使って初めてオンライン授業を実施するため、前期期間中は電話回線がパンクするほど問合せが集中した。

他の大学でも相当切羽詰まっていたのであろう、情報科学センターとしては繋がりなかった大学からG Suiteの導入方法の問合せを受けることもあった。

オンライン授業の利用状況について



この図は、令和2年度前期開始から6週分の日別ユーザ数を表す。上側はWebClassの統計機能により学生の利用実数をグラフ化、下側はGoogleのAnalyticsの解析データよりグラフ化したものである。Googleでは学生という属性を特定することはできないが、アクセスの大半を学生が占めるためWebClassの利用傾向とほぼ同じとなっている。

令和3年度のGoogleおよびWebClassの利用状況と比較してみたが、共に令和2年度とほぼ同じ傾向であっ

た。

Google側の丸枠内のユーザ数が突出し、WebClass側の四角枠内のユーザ数が下がっているように見えるのは、WebClassのサーバに負荷が集中しログインできなかった可能性が高い事を示す。この間は授業が滞るなど多大なご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げたい。メーカーによる連日連夜におよぶチューニングが功を奏しサーバダウンだけは免れた。オンライン授業を迎えるにあたって、学生も何をどうすればよいのかわからず不安に駆られたのであろう。初日の早朝にも関わらず、ほとんどの学生がアクセスを頻繁に繰り返していたことが、サーバ負荷原因調査でわかった。

学生のWebClassの実利用者数は、平常時の月～金の中央値ではおよそ6,000名、土日においても常に3,000名を超える。ちなみに授業の有る土曜より日曜の値が常に10%程度高い。

Google Analyticsのデバイス解析情報からは、オンライン授業で40%強のユーザがモバイル端末を使っていることが窺える。学生にとってはスマホで授業を受けるのは苦にはならないのであろうか？ちなみにモバイル端末のうちiPhoneの利用率が年々高くなる傾向にあり、3年前は83%程度であったが今年度は95%を占める。

利用科目数は、コロナ禍前は500～700程度であったが、コロナ禍後は約3,700もの科目が実運用されている。教材数も6,129から93,890と約15倍近く跳ね上がった。まさに爆発的加速といえる。

非常事態時におけるマニュアル整備の効果

スムーズに対応できたとは決して言えないが、なんとか全学レベルで遠隔授業ができたのも、遠隔授業関係者(事務部、学長執行部等)による教室環境の統一、マニュアル整備、周知徹底等々が功を奏したのではないかとオンライン授業支援要員は話す。平常時では授業毎の形態に適した様々な工夫がなされていると思うが、コロナ禍のような非常事態下では授業の混乱を抑えるためにも使う

機能はシンプルに、そして、基本的な手順は統一しておくことが大事なのかも知れない。

オンライン教材への期待

オンライン教材の作成方法やLMSへのアップロードをサポートしていると、思わず教材に見入ってしまうことがあった。わかりやすい教材コンテンツは学ぼうとする意欲が自然と湧き、授業だけでなくリメディアル教育にも適していると感じる。

また、教材を他の科目に容易に流用できるため、科目ごとに教材を用意する手間ひまが省けることで、より良い教材作成に時間を割くことができるのではないだろうか。

学生にとっても、時間と場所を選ばずに学習する機会が増え、さらに倍速機能を使って学ぶこともできるので効率よく学習することができる。

今後、コロナ禍によってこれまで使ったことのないLMSやオンライン教材などのICTの活用が、教育にプラスになることに期待したい。

オンライン授業が業務にも恩恵を与えるきっかけに？

ウェブ会議システムが遠隔授業で使われるようになったことで、各種会議や委員会などで本来のウェブ会議システムとしての利用が浸透することにつながった。

また、事務方によるGoogleフォームやWebClassを活用した学生への連絡やアンケート利用なども広まりつつある。ICTの利便性というものがオンライン授業だけでなく、事務業務などあらゆる方面で認められ、コロナ禍後も有用な道具として使われることは間違いない。

ICTを使うためにはまずセキュリティ対策を！

IPA独立行政法人情報処理推進機構が2021年度のセ

キュリティ10大脅威を発表しているのでご参考頂きたい。

昨年順位	個人	順位	組織	昨年順位
1	スマホ決済の不正利用	1	ランサムウェアによる被害	5
2	フィッシングによる個人情報等の詐取	2	標的型攻撃による機密情報の窃取	1
7	ネット上の誹謗・中傷・デマ	3	テレワーク等のニューノーマルな働き方を狙った攻撃	NEW
5	メールやSMS等を使った脅迫・詐欺の手口による金銭要求	4	サプライチェーンの弱点を悪用した攻撃	4
3	クレジットカード情報の不正利用	5	ビジネスメール詐欺による金銭被害	3
4	インターネットバンキングの不正利用	6	内部不正による情報漏えい	2
10	インターネット上のサービスからの個人情報窃取	7	予期せぬIT基盤の障害に伴う業務停止	6
9	偽警告によるインターネット詐欺	8	インターネット上のサービスへの不正ログイン	16
6	不正アプリによるスマートフォン利用者への被害	9	不注意による情報漏えい等の被害	7
8	インターネット上のサービスへの不正ログイン	10	脆弱性対策情報の公開に伴う悪用増加	14

1位は「ランサムウェアによる被害」であり、中でも最恐のマルウェアと呼ばれるEmotetによる被害が大きな話題となった。幸いにも大事には至らなかったが本学も感染被害に遭っている。3位の「テレワーク等のニューノーマルな働き方を狙った攻撃」は、コロナ禍で増加するオンラインを使う業務を狙った新たな攻撃であるので、今後要注意である。

本学においても、サーバに対し億単位(1か月あたり)の件数の攻撃が頻発しており、学内のLMSやファイルサーバに危険がおよぶ可能性が十分にある。セキュリティの脅威から大切なデータ(教材、学生の成績情報等)を守るには、常にバックアップを取得することが一番大事である。

ICTを使うためには、まずセキュリティ対策を日頃より心掛けたい。

コロナ禍はまだ続きそうであるが、災害が起きてようやく「教訓」＝「新しいよりよい生活」が生まれるのだと改めて実感した。



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『フィルム写真で令和を撮る』
小谷 陽太郎(工学部 機械工学科)

キャンパスリノベーション

キャンパスリノベーション

Campus Renovation



令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
「通学途中の冠」
東 啓示(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

キャンパスリノベーション

Campus Renovation



2023年の竣工を目指して、学生会館(クラブハウス)、18号館、体育施設倉庫の建設が始まり、大学キャンパス整備計画が進んでいます。
今回のキャンパスリノベーションでは、これから新設される施設、前年度から今年度にかけてリノベーションが行われた施設をご紹介します。

これから建設される施設



学生会館(クラブハウス)

学生会館は、ウェルネス2008の西側に建設され、中央キャンパスとブリッジで連結される予定です。



18号館

18号館は、東キャンパスに位置する4号館と10号館の間に建設される予定です。





体育施設倉庫

体育施設倉庫も、東キャンパスに建設予定です。



昨年から今年にかけてリノベーションが行われた施設



総合体育館第一教室

床改修工事が行われ、美しい床に生まれ変わりました。



トイレ改修工事

5号館(1階男子・1階女子・おみやりトイレ)、7号館(1階男子・2階女子)のトイレ改修工事が行われました。



学会報のテーマでもある「大学キャンパスの将来像」、みなさんはどんな将来像を思い描かれるでしょうか。



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『天つ風が吹く中で』
細井 皓介(工学部 都市創造工学科)

学会主催見学会



学会主催見学会

Tours Sponsored by the Academic Society

令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
「高知県西南端の海と漁村から」
石川 陽大(工学部 交通機械工学科)

神戸海洋博物館と人と防災未来センター見学

中来田 航

私は今回、神戸海洋博物館と人と防災未来センターの見学会に参加しました。

最初に訪れた神戸海洋博物館では館内に展示されたさまざまな種類や大きさの船の模型を見ることができました。西洋帆船であったり豪華客船、貨物船など時系列に沿ってわかりやすく時代の流れやその船が持つ役割を知ることができたと思います。船の模型を間近で見るとても精巧に作られており、普段から建築模型を作っている私にとっては船の構造がどのようになっているのか関心を持ちきっかけになりました。



模型の他に操船シミュレーターとガントリークレーンのシミュレーターといった体験型装置があり実際に体験してみたのですが、思ったように操作することができずスムーズに操作することの難しさが実感できました。このようなお仕事をされている方々のおかげで神戸港の物流が支えられているのだとわかりました。

中でも西洋帆船の断面の模型があったのですが、その断面を見ると5つほどの階に分かれており下の方の階には階級の低い人(奴隷)が働かされており、上の方の階やデッキには階級が高い人が並んでいました。上の立場の人が指示を与えて効率的に現場を動かしているのを表現されていると感じたので建築関係の仕事に就き、現場で仕事をするようになればこのように指示をする役割の人がいて、その指示に従う人がいて自分が指示をする側になった時にいかに少ない回数でしっかり内容を伝えるかが重要になってくると感じました。そのような行動を取れるように今、大学で学んでいる知識やスキルをしっかり身につけておかなければならないと思いました。

神戸海洋博物館にはカワサキワールドも併設されておりバイクや船舶、鉄道車両、航空機など陸・海・空の各分野で活躍するテクノロジーを見学することができまし

た。我々の生活を豊かにしてくれている技術をわかりやすく身近に感じてもらえるように体験型の装置があり小さな子どもたちはもちろんのこと私たち大学生でも楽しめるものになっていました。

次に訪れた人と防災未来センターでは阪神・淡路大震災が発生した瞬間の状況を再現した映像をシアターで迫力のある音響と共に体感したり、震災関係の資料を展示しているコーナーを見学することで震災当時に被災者の方々がどのような体験をしてどのような心情だったのか、そして復興への道のりを知ることができました。



センターの職員の方のお話を聴いている中で南海トラフによる津波の被害についての話題になり、実際に南海トラフが起こった際に来ると想定されている津波がまちにどのような被害を及ぼすのかを想像しながら歩いてみるのが重要であると思いました。私たちは過去の事例から学ぶことができます。東日本大地震での予想していなかったスケールの津波が襲い甚大な被害をもたらしたことは我々の記憶に鮮明に焼き付いています。これらの事例を無駄にしないためにもしっかりと学び、次の災害に備える必要があると思います。

また災害そのものを発生させないようにしたりする取り組みの防災に加えて災害が起こることを前提に、被害をできる限り小さくする取り組みの重要性も学びました。大学の講義の課題で自分が住んでいるまちのハザードマップを作成するといったものがあったのですが、その時に危険な箇所を避けて避難するにはどのような経路を想定する必要があるのか、災害時に使える設備がどこにあるのかを知れて防災・減災に関心を持つきっかけになりました。このように自分の身の回りに潜む危険性に関心を持つことができるきっかけをくれる施設でした。

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

聖地・鈴鹿で安全運転研修

西川 諒

2021年9月15日、鈴鹿安全運転研修に参加しました。

私がこの研修に参加した理由は、まずは自動車が好きであることと、所属している自動車部の後輩が一昨年にこの講習会に参加したことを嬉しそうに語っていたのを聞いていつかは参加したいと思っていたからです。

鈴鹿サーキット交通教育センターに到着し、挨拶及び説明を受けたら早速コースへ向かいます。コースにはホンダ・フリードが3台並んでいました。

乗り込む前にまずは日常点検です。安全運転はドライバーのスキルだけではなく、そもそも車両が安全な状態でない事には成り立ちません。中でも特にタイヤは消耗品です。日頃からタイヤ溝のチェックが大事です。

日常点検が終わると運転席に座り、ドライビングポジションの確認です。私は普段、車を運転する際はせいぜいブレーキペダルを目いっぱい踏み込める位置かどうかでポジションを決めていましたが、実際にはステアリングの位置や座席の高さでもポジションの良し悪しが変わることを今回学びました。

ドライビングポジションが決まると、インストラクターの方が操る先導車に追従する形で慣熟走行を行いました。いわば肩慣らし走行ですが、先導車のマネをするイメージで走行することでより適正なブレーキングのタイミングやステアリング操作が手に取るよう分かりました。この感覚は教習所等では味わえないと思います。

慣熟走行を終えると、次は急制動の項目へと移ります。指定された速度で走行し、パイロンが配置された地点に差し掛かったところで急ブレーキを踏みます。また、信号機の点灯したタイミングで急ブレーキを踏むパターンも行いました。しかし、これがなかなか難しいのです。日頃から急ブレーキを踏む機会などほぼ無く、ブレーキをゆっくり踏むことに慣れすぎてしまっているせいか、どうしても踏み始めが優しくなってしまいます。当然、これでは制動距離も伸びてしまい大変危険です。

また、この項目に伴い車間距離の取り方も学びました。目視で前を走行する車との距離を把握することは難しい

ため、前の車がある地点を通過してから何秒後に自分の車両がその地点を通過する、という「時間」で考えれば良いと分かりました。

そして本研修で最も楽しかったのがスキッド走行です。なぜなら、車を滑らせる機会なんて滅多になく、アトラクションのような感覚で学べたからです。濡らしたタイル路面を走行した際、車の駆動法によって車両の滑り方が異なることを実感する項目なのですが、こちらでは先ほどのフリード（FF車両）に加えてMR車両のS660に乗ることができ、FFとMRとでは全く挙動が別物だということを実感知らされました。また、横滑り防止機能をOFFで走行することでいかに現代の電子制御が優れているかを実感しつつ、反対にONで走行していても多少は滑ってしまうので電子制御はあくまで補助であり、最終的にはドライバー自身のスキルが肝心であることを改めて認知することができました。

研修を終えると、隣接する鈴鹿サーキット本コースの観客席へ入らせていただきました。車好きにとって鈴鹿サーキットは聖地であり、大変感動しました。

今回の研修は、自身の運転に対する意識を改めて見直しできる大変素晴らしい機会でした。学んだことや体験したことを肝に銘じ、事故の無い楽しいカーライフを送り続けたいです。



(工学部 交通機械工学科)

第6回芸術鑑賞巡りに参加して

藤澤 佳歩

今回私は、第6回芸術鑑賞巡りにて大塚国際美術館と淡路夢舞台を訪れました。

まずは大塚国際美術館です。私が感じた一番の魅力は作品を近くでじっくり見られるという点です。本物の有名な絵画は、厳重な管理で近づけなかったり、観覧者が多くてゆっくり見られなかったりします。壁画の方も、天井に近い部分は双眼鏡等を使わなければ細部まで見ることができません。しかし、大塚国際美術館の作品はどれもレプリカのため顔を近づけて見ることができたり、壁画の天井近くの部分が背の届く高さに展示されていたりします。また、展示方法も印象的でした。大塚国際美術館では様々な国、時代の作品が幅広く集められています。その作品が作られた時代背景に合わせて壁紙や額縁が選ばれており、その違いを見るのも面白かったです。特に印象的だったのは、「環境展示」と言われる空間そのものを再現した展示方法です。環境展示の例として挙げられるのが、クロード・モネの『睡蓮』です。屋外に展示されたレプリカの周りに水が張られ、睡蓮の花が植えてありました。すぐ側には花を眺めながらくつろげるカフェの座席もあり、モネはどのような気持ちで睡蓮の花を眺めていたのだろうかと思わず考えてしまいました。一方、『鳥占い師の墓』や『聖テオドル聖堂』は壁画の一部分を絵画のように飾るのではなく、その壁画がある空間そのものを再現してあります。低い天井や狭い入口がリアルで、まるで自分がその場に入り込んだような感じがしました。ただ見るのではなく、その雰囲気を感じることができるのが面白かったです。大塚国際美術館にあるものはあくまでもレプリカではありますが、作品名や作者と共に本物の作品が展示されている美術館も記載されているため、気に入った作品はコロナの終息後に本物を見に行くというのもいいかもしれません。

二つ目は、淡路島にある淡路



▲百段苑から望む淡路夢舞台

夢舞台です。淡路夢舞台は有名な建築家、安藤忠雄氏の建築作品ということで建物の随所に彼らしい特徴が見られました。1年次に彼の作った建築を見に行く機会が何度かあったのですが、その時の記憶と重ねつつ当時見た建築との共通点を見つけたり授業で聞いた話を思い出したりと、施設の内容だけでなく建築物も見応えが在りました。そんな素晴らしい建築が立ち並ぶ広い敷地の中、私が見学したのは温室植物園であるあわじグリーン館と百段苑です。植物園に行くのは幼少期に祖父母と行って以来、約十年ぶりくらいだと思います。日頃生活する中では見ることでできないような植物が多数あり、思わず見入ってしまいました。中でも『ジュラシックツリー』という木が強く記憶に残っています。ジュラシックツリーは中生代ジュラ紀に現れた植物で、一度絶滅したと思われていたものの、1994年にオーストラリアで発見されたそうです。そのような歴史を経て今日本にあるというのが面白いと思います。百段苑の方はこの旅の季節もあり、基本的には緑だけの植物に加えてマリーゴールドとコスモスが少し咲いているだけでした。しかし、淡路夢舞台全体と海を望めるその光景は素晴らしいものでした。今度は百段苑が数々の花で彩られる季節にまた訪れたいです。

今回の芸術鑑賞会は天候にも恵まれ、思い出に残る旅になりました。コロナ禍で思うように観光に行けない時世の中、友人と共に芸術に触れ、語り合える機会を得られたことはとても貴重な経験だと思います。元々美術館や観光に行くことは好きでしたが、今回の見学会を通じてよりこれらの素晴らしさを体感しました。残りの大学生活の中で、また友人と芸術鑑賞に出かけられたらなと思います。



(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

「空宙博(そらはく)見学会」感想文

上田平 まいか

私は宇宙推進ロケット工学研究室に所属しており、もともと宇宙や空に憧れや興味を持っていました。そらはく見学会の集合時間は大学に朝8時半という早い時間でしたが、通学に1時間半以上かかる私がわくわくして集合時間の15分前には到着していたほど楽しみでした。

いざバスに乗ると皆早起きしていたのか、ほとんどの人が寝ていました。バスでおいしいお弁当を食べながら移動し、最初の目的地の岐阜かかみがはら航空宇宙博物館に到着しました。着くとすぐに大きい飛行機やヘリコプターなどがたくさん並んでおり、圧巻でした。館内に入る前に集合写真を撮影しましたが、天気が良かったのでまぶしくて皆しかめっ面になっていました。



館内に入ると、1階は飛行機やヘリコプターや戦闘機など空を飛ぶものが展示されており、2階には宇宙に飛ばすものが展示されていました。1階の展示品を見て回り驚いたのが、今から80年以上前からすでにジェットエンジンの飛行機が存在していたということです。見た目はもうほとんど今の飛行機とそう変わらないものばかりで、この時代からほとんど完成形の形を作っていたことに驚きました。ガイドさんの説明も分かりやすく、たくさん質問を聞いて頂けました。展示されている飛行機の先端についている棒のようなものは、アナログのスピードメーターだと教えていただきました。棒の先端に穴があいており、そこから空気が入ることでコックピットのメーターの針を動かしているそうです。とても興味深いことをたくさん教えていただきました。

その後、航空自衛隊の練習機T-4のシュミレーターを体験しました。離陸から操縦までの操作ができ、最後に成績が出てきてS、A、B、Cの順に評価されました。思った以上に難しく、引率の先生と友達にC評価で私はB評価でした。シュミレーターでもこんなに思った通りに動かない

のに、本物を操っている航空自衛隊の方々には本当に素晴らしいなと思いました。

2階の宇宙の展示にも行きたかったのですが、もう集合時間になってしまったので行くのを諦めてお土産売り場でお土産を買って、また次の目的地までバスに乗りました。

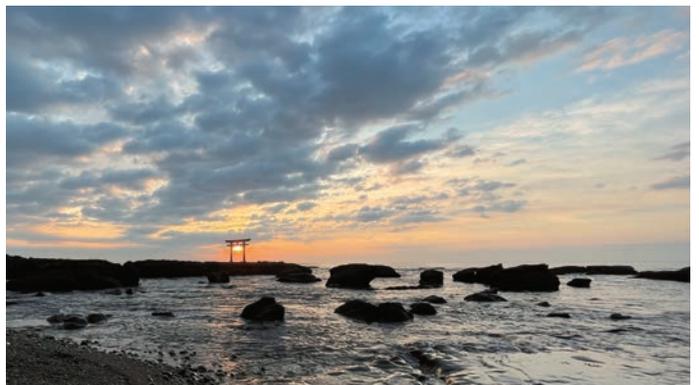
そして、もう一つの目的地のあいち航空ミュージアムに行きました。ここでは飛行機や戦闘機などが展示されており、館内が吹き抜けになっていて、とても広かったです。チケットの絵柄が飛行機や戦闘機やヘリコプターになっていてひとりひとり違う絵柄でした。それは、実際に展示されているものだったので、みんなのチケットの絵柄の展示品を探して回っていました。一番楽しかったのが、屋上に上ると飛行場が見学できて離陸と着陸を延々と見ていられる事でした。たくさんの種類の飛行機が次々と着陸して、瞬間に離陸するのが本当に素晴らしかったです。その中にヘリコプターの飛行も見学できたのですが、ヘリコプターの操縦の中でも難しいとされるホバリングを3分ほど続けていて、興奮が隠し切れなかったです。



少し悲しかったのが、ここでもお土産を買おうと思い早めに行動したのですが、ショップの営業時間がすでに終了していて買えなくて残念でした。その後、バスで大学に帰りそらはく見学会が終了しました。

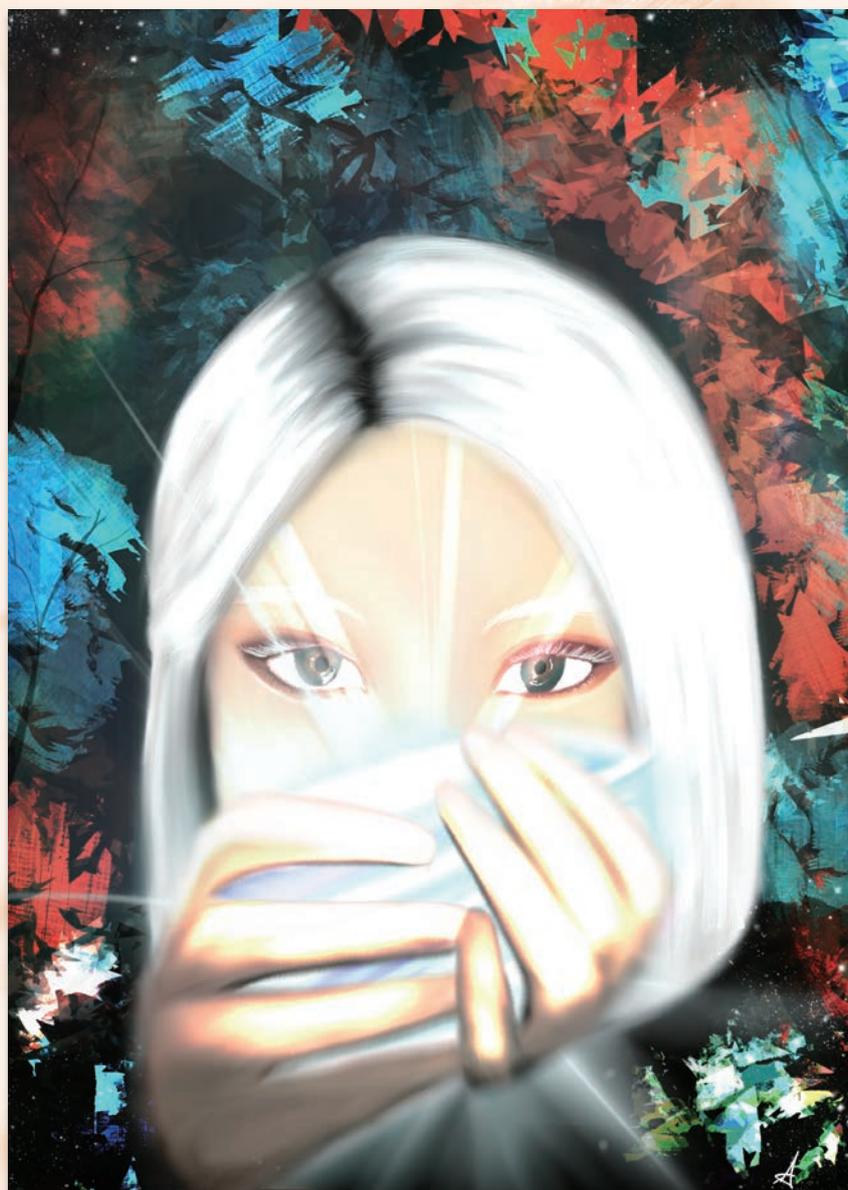
今回のそらはく見学会に参加して、本当に素敵な体験ができました。自分で岐阜や愛知に行く機会なんてそうないので貴重な時間を過ごせたと思っています。引率の先生方、バスの運転手さん、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館とあいち航空ミュージアムの方々、一緒に来てくれた友達に感謝を伝えたいです。

(工学部 機械工学科)



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『海と空、そして陽の美しさ』
近藤 聖那(国際学部 国際学科)

コンテスト報告



コンテスト報告

Excellent Works of the Contest

令和3年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)努力賞作品
「光」
眞木 稜介(デザイン工学部 環境理工学科)

コンテスト報告

令和3年度 企画委員長 大橋 美奈子

第22回「ぶんかくコンテスト」

(長編部門／短編部門)

第6回「写真・イラストコンテスト」

(写真部門／イラストデザイン部門)

大阪産業大学学会では、例年、学部生・大学院生を対象に学会コンテストを実施しています。

ぶんかくコンテストでは、「長編部門」「短編部門」でそれぞれ募集し、小説やエッセイなど、たくさんの応募がありました。

写真・イラストコンテストの「写真部門」では、学内だけに限定しない風景写真を募集し、近年において最多の応募がありました。新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言下で、出かけることが困難な中でも、工夫を凝らして撮影された様々な写真がたくさんありました。また、「イラスト部門」では、手書きの水彩画や、パソコンを用いて制作された作品、キャラクターデザインなど多くの応募がありました。

例年行っていた、次年度の見学会の企画を募集する見学会プランニングコンテストですが、新型コロナウイルス感染拡大による影響を考慮し、今年度は中止となりました。

次年度以降も、学生がより興味をひくよう工夫を凝らしながら、継続していきたいと思います。

大阪産業大学学会
コンテスト2021
Osaka Sangyo University Academic Society
Contest 2021
大阪産業大学学会主催

Let's try!
日頃書き溜めている文章やイラスト、この一年の思い出の風景写真、
学会見学会キャラクターなどをこの機会にご応募ください！

応募期間
2021年9月21日(火)～10月15日(金)
締切厳守

優秀賞 賞状+Quoカード3万円分
奨励賞 賞状+Quoカード2万円分
努力賞 賞状+Quoカード1万円分
参加賞 Quoカード1,500円分
※参加賞は他の賞に該当しない応募作品が対象
(但し、重複審査通過作品のみ)

<募集コンテスト>
◆ぶんかくコンテスト
◆写真・イラストコンテスト

【応募方法】
学会webサイトの応募フォームよりご応募ください
【お問い合わせ先】
大阪産業大学学会事務局
(本館5階 産業研究所事務室内)
(平日) 10:00～16:00
TEL: 072-875-3001 (内線: 2815)
MAIL: gakkai@cmt.osaka-sandal.ac.jp

夏学期中の思い出を
文章や写真・イラストにし
て応募してみませんか？

今2021年度受賞作品 → 2021年度受賞作品

▲2021年度学会コンテストチラシ

大阪産業大学学会コンテスト2021実施結果

募集期間 2021年9月21日(火) ～ 2021年10月15日(金)
審査 書類審査
2021年10月18日(月) ～ 10月29日(金)
最終審査
2021年11月16日(火)

第22回 ぶんかくコンテスト実施結果

募集内容 長編部門・短編部門
応募件数 長編部門……………2件
短編部門……………4件

〈受賞者一覧〉

[長編部門]

【優秀賞】

山中 郁弥(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：明日、『何者』かになるために

【奨励賞】【努力賞】 …該当者なし



▲山中郁弥さん

[短編部門]

【優秀賞】【奨励賞】 …該当者なし

【努力賞】

近藤 聖那(国際学部 国際学科)

作品：ある世界からの使者



▲近藤聖那さん

〈審査委員〉

張黎、田口まゆみ、村田好哉、藤田拓之、三宅敦、山本到、福森徹、藤岡芳郎、李東俊、
山本泰三、服部純典、喜多見洋

(順不同、敬称略)

第6回 写真・イラストコンテスト実施結果

募集内容 写真部門・イラストデザイン部門
応募件数 写真部門……………43件
イラストデザイン部門…10件

〈受賞者一覧〉

[写真部門]

【優秀賞】

岡本 大誠(経済学部 経済学科)

作品：伊丹の夜景と輝く飛行機



▲岡本大誠さん

【奨励賞】

加藤 竜一(工学部 交通機械工学科)

作品：和洋折衷

【努力賞】

吉永 有輝(経営学部 経営学科)

作品：新緑の空間へと導く階段



▲加藤竜一さん

▲吉永有輝さん

[イラストデザイン部門]

【優秀賞】

竹重 風美(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

作品：大学の将来像

【奨励賞】

西倉 匠惟(経済学部)

作品：見返り美人

【努力賞】

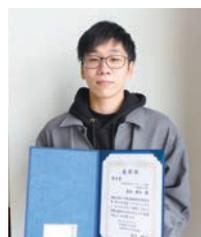
眞木 稜介(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：光



▲竹重風美さん

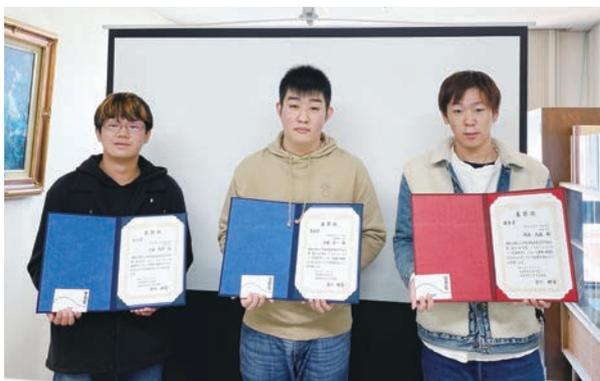
▲西倉匠惟さん



▲眞木稜介さん

〈審査委員〉

佐藤慶明、谷本英彰、紙谷卓之、川口将武、岡田準人、川田美紀、
伊藤一也、藤長愛一郎、青木孝憲、塩見剛一、吉田武則、大橋美奈子
(順不同、敬称略)



▲授賞式の様子

明日、『何者』かになるために

デザイン工学部 環境理工学科 山中 郁弥

1

こうやって、モノを書こうと思ったのはいつぶりだろうか。

何度か書こうと思ったが、就活やら新社会人生活やらの多忙さから書けなかった。

「さて、どこから書こうか」

パソコンを立ち上げた俺はゆっくりと文字を打ち込んでいく。

慣れたタイピングの音が部屋に反響し、リズムを刻む。

「始まりは……」

こうして、俺は誰に読まれることもない独りよがりの物語を紡ぎ始めた。

そうだな、冒頭の一文はこうしよう。

『小さな頃から将来の夢がなかった』

2

小さな頃から将来の夢がなかった。

幼稚園や小学校、親戚の集まりなんかでよく将来の夢を聞かれることがあった。

周りの皆はそれに対して「プロ野球選手になる」や「ケーキ屋さんになる」など、目を輝かせて夢を口にしていた。

しかし、俺にはそれができなかった。

どうしても、自分の将来を考えることができなかった。

ませていた、とは少し違う。

俺は、本当にやりたいことがなかった。

だから、将来のことを聞かれた時はいつも周りに合わせて適当に回答していた。

俺は、そんな自分が心底嫌いだった。

自分のやりたいことも、したいことも、なってみたくいものも決められない。

そんな自分が情けなくて、嫌いだった。

そんな俺、藤島和樹は大学三年生の夏を迎えていた。

夏の厳しい日差しがカーテンの隙間から差し込む。

「こんなもんあったら苦労してねえよ」

俺はパソコンを睨みつけ、文句を零す。

画面にはインターンへ申し込むために必要なエントリーシートが映っていた。

そして、その中の一つの問いで俺の手は完全に停止した。

『幼少期の将来の夢は何ですか?』

「だああ! こんなもんやっつけられるか! 休憩だ休憩!」

何も思いつかないことに腹を立てた俺は、一度頭をリセットするためにパソコンから離れ、風当たりの良い廊下に寝そべる。

辺りからうるさい蝉の声が聞こえてくる。

「はあ、なんで地元に戻ってきてまで就活やらなきゃならねえんだよ」

脱力しきった体じゃ文句が抑えきれない。

俺は夏休みを使って田舎の実家に帰省していた。

最初は山に囲まれたここでゆっくり何もせずに過ごそうと考えていたが、大学三年生の夏がそれを許してはくれなかった。

大学からは夏休みから就活を始めた方がいいと言われて、ネットにはもう就活の戦争は始まっていると書かれている。

「日本の就活早すぎるだろ。まだ本番まで一年弱もあんだぞ」

とは言え、俺も始めないといけないことぐらいは分かっている。

だから、こんな田舎にまで来てエントリーシートを書いていた。

しかし、とんだ伏兵に出くわしてしまった。

「将来の夢、か」

ぼそりと呟いたその声は蝉の声にかき消される。

嘘の夢を書こうと何度も思った。

しかし、どれだけ案を練っても俺はそれを書くことができなかった。

なぜなら、夢がないことは俺にとって最大のコンプレックスだから。

「……そんなもん、今もねえよ」

どこに焦点を合わせることもなく、俺は外に広がる壮大な自然を眺める。

昔から夢を語る人が羨ましかった。

その夢が叶う叶わないは別として、何かに本気で取り組めるその姿勢が俺にとっての憧れだった。

一方、俺にはやりたいことがなかった。

周りは意気揚々と夢を語り、その中で俺は嘘の夢を自信なさげに語る。

まるで、俺一人だけが置いて行かれるような、そんな疎外感が俺を満たしていた。

そして、俺は次第に夢を語る人に嫉妬し、いつしか自分の不満を理不尽にぶつけるようになった。

ただの八つ当たりだってことは俺が一番よく分かっている。だが、俺はそうして自分のプライドをどうにか守ろうとした。

守るべきプライドではないものを執拗に守ろうとする。そんな俺の卑賤で醜い考え方がこの上なく嫌いだっ

「……やめだやめ！ んなもん考えたってしょうがねえよ」

俺はこれ以上負の思考に陥らないように声を荒げ現実世界に戻ってくる。

と、そんなところに。

「随分と荒れてんなあ和樹。女に振られたか？」

寝転がる俺を見下ろす男が廊下の奥からやってくる。

「はっ！ 俺は負ける勝負はしねえタチなんだよ」

「小心者だな」

「賢いと言え」

軽口を軽口で返した俺は起き上がり、隣に座った男からお茶を貰う。

彼は俺の幼馴染で親友の塚本寛太。

親が神主をやっていて、その跡取りとして現在勉強中だ。

「で、何にうなされてたんだ？」

「インターンのエントリーシートでちょっとな」

「人ん家でエントリーシート書いてたのかお前……」

「別にいいだろ。家だと親が色々とちょっかいかけてくんだよ」

俺は乾いた口にお茶を流し込む。

暑さと大量に汗をかいたせい、いつもより美味しく感じる。

「ふーん……どんなこと書いてあるか見てもいいか？」

「別にいいぞ」

俺が許可を出すと、寛太はそのそと動き出しパソコンの画面を見る。

普通はちょっとでも嫌がる場所かもしれないが、俺と寛太の仲だ。今さら隠し事したってしょうがない。

「へえ、結構しっかり書けてる……ん？ 幼少期の夢のところ白紙じゃないか」

その言葉を聞いて、俺の心臓が大きく脈打つ。

いずれ言われると心構えはできていたと思ったが、いざそこを指摘されると俺は言葉に詰まった。

「ちなみに……まだ、ないのか？」

「絶賛募集中だ。これじゃ、エントリーシートどころか就職先も決めらんねえな」

俺は上手く笑うことのできない表情を寛太に向ける。

夢を探そうとはしてる。でも、結局俺が本気で取り組みたいと思うことはなかった。

「そういうお前はどうかんだよ？」

「俺か？ 俺はあるぞ」

「はあ！？ んな話聞いたことねえぞ!？」

思わず俺は振り返り、寛太に一步近づいた。

最近会っていなかったとはいえ、俺は今の言葉が衝撃でならなかった。

「どんな夢だよ？」

「まずは神社を継いで、増築でも何でもしてもっと多くの参拝者が来てくれるような神社にしてやろうと思ってる」

身振り手振りを大きく使い、寛太は自分の掲げる目標を高らかに宣言する。

寛太の瞳には迷いが無い。本当に実現してやると言う気概が瞳に宿っている。

その目を見た俺は、どこかに置いて行かれる感覚に陥った。

よく感じているものだ。だが、今回はこれまでとは違う。

一番近い人が自分から離れていく。追いかけても手が届きそうにないと感じてしまう。

「そっか……」

唇が震える。手が震える。

どうにか笑おうと思っても、上手く表情が作れない。

そして俺は、

「まあ、こんな田舎の神社に人が来るか分からねえし？

赤字にならないこったな」

親友の夢ですら、応援もせずに皮肉を言ってしまった。

いつもの発作だ。どうしようもない自分を守る防衛本能が働く。

「まだ先は長いし、別に否定はしないけどな、なかなか難しいと思うぜ」

違う。俺はこんなことを言いたいわけじゃない。

しかし、頭とは裏腹に自分の口から出る言葉は悪意に満ちている。

俺は寛太の顔を見ることができない。

怒っているだろうか。悲しんでいるだろうか。

どっちにしる、俺にはもうどうすることもできない。

「大体だな」

「——おい」

寛太はたった一言で、俺の言葉を遮った。

俺は寛太に目を向ける勇気はなかった。

そして、俯いている寛太は俺に、

「お茶、おかわりいるか？」

優しい笑顔を向けたのだった。

「お前が荒んでることは大体予想がついてた。だからいったん落ち着け」

優しい声音に、優しい言葉。

俺は、その優しさに心が痛む。

どうせなら、こんな俺を否定してほしかった。寛太にそう言われたら、俺だって変われる気がしてたから。

「ごめん。ちょっと歩いてくる」

俺はその場にいることが苦しくなり、家を飛び出した。

呼吸が荒い。景色が色褪せていく。

自分が自分でなくなる。そんな感覚が頭から離れない。

「はあ、はあ」

何も考えず、がむしゃらに走った俺は、いつの間にか神社についていた。

この神社は寛太の父親が神主をやっている神社だ。

俺はふと、賽銭箱の前に立った。

虚ろな意識の中、俺は考えなくてもできる作法で参拝を済ます。

——神様、どうか俺に夢を下さい。

何と他力本願な願いだろうか。

でも、今の俺にはこれしかなかった。

それから、ゆっくりと脇道にそれて神社の裏手に回り、子供の頃から愛用しているベンチの前にやってきた。

「……クソ。なんであんなこと言ったんだよ、俺は」

ベンチに座ると同時に、さっきの言葉を思い出し俺は俯いた。

決してあれが本心から出た言葉ではないと願いたい。

でも、もしかしたら……。

「考えるな……考えるな」

一刻も早く忘れようと、俺は目を瞑る。

それから、どれだけの時間そうしていただろうか。

しばらくして、唐突に目の前の茂みがガサガサと揺れだし、そこから。

「——猫？」

草木をかき分け、猫がゆっくりとやってくる。

その猫は茶色の猫だが、額だけひし形に白という何とも特徴的な模様をしていた。

そんな猫は俺を気にすることなく、俺の横に座った。

「……？ お前、なんか見覚えあるな？」

俺はその猫に既視感を覚えた。

どこかで会ったことがあるか？ いや、全く記憶にない。

でも、どこかで見たことあるような……。

俺は横に座った猫に手を伸ばす。

そして、もう少しで触れると言った時に、

「人間様も大変じゃな」
声がかえった。だが、俺は耳を疑った。
「聞いておるのか？ わしはお前様に話しかけてるん
じゃ」
どうやら横から話しかけられているようだ。
間違いはない。でも、いやそれは……流石にないだろお
……。
しかし、現実はどうやら真実を語るらしい。
横にいる猫が、
「おお、やっと気づきよったか」
「ね……」
「ね？」
「——猫が喋ったあ!？」
「——にやあああ!？」

3

「おいおいおい! 寛太ッ!」
俺は猫を捕まえて急いで寛太の家に戻った。
「そんな慌ててどうしたって、なんだその猫？」
「この猫! 喋んだよッ!」
「おお、お前様はこいつの友達じゃな? 助けてくれ」
首根っこを掴まれている猫は、足をばたばたとさせてい
る。
「あー、和樹はいったん落ち着け。で、猫を離してやれ」
「いや、でも」
「大丈夫だ、そいつは悪さはしねえよ。ただ喋るだけだ」
「その『喋るだけ』がヤバイんだろうが!？」
取り乱す俺を寛太は宥める。
少ししてから俺はわずかに落ち着きを取り戻し、猫を
そっと手放した。
「まったく、猫の扱い方がなっとらん」
猫はそう言って前足を舐めて乱れた毛を手入れし始め
た。
「その猫どこで拾ってきた？」
「神社の裏側だ。寛太なら分かるだろ」
寛太は「あそこか」と顎に手を当てる。

というか、なんで寛太は喋る猫を前にしてそんなに冷静
になっていられるんだ。
こっちは心臓が飛び出るかもしれないってぐらい驚い
たってのに。
「寛太、お前こいつが何なのか分かんのか？」
「ああ、多分——神様？」
「……はあ？」
寛太の一言を俺は一瞬で理解することができなかった。
神様? この足元でゴロゴロしてる奴が?
「んなわけ」
「忘れたのか? あの神社に祀られているのは猫神様だ」
寛太は座り込んで猫を撫で始める。
確かに、あの神社に祀られている神様は猫だ。子供の
頃何度も寛太のお父さんから聞かされた。
「神様が山から下りてきた、実に夢のある話だろ」
「そんなもんを信じるのかよ？」
「神主が神を信じなくてどうすんだよ」
寛太は軽く笑い流す。
「……にしてもこの猫の模様……あの時の小説の……
まあ、それよりも」
撫でるのを止めた寛太は猫と向き合い、そして深々と頭
を下げた。
「お初にお目にかかります、猫神様」
「別にそんなにかしこまらんでもええというのに」
「一応、これでも神主見習いですから」
俺はそのやり取りを横から呆然と眺める。
寛太は本気でこの猫を神様だと思っているようだ。
「猫神様はなぜこのような場所に？」
「別に大した理由はない。強いて言うなら暇だったから
じゃな」
呆れて言葉も出ない。
こんな自分勝手な神がいていいものなのか。
「じゃが、実際は人間様が必死に参っておったんでな。特
別に手助けするために出てきたわけじゃ」
「はっ! 俺の願いなんて知らねえくせして何を偉そうに」
俺は不服とばかりに猫のことを睨みつける。

猫はその俺の敵意を感じたのか、若干毛が逆立ち威嚇しているように見えた。

「なら、お前様の願いを当ててやる」

「やってみろやってみる」

俺はその挑戦的な発言にぶっきらぼうに答えた。

でも、ちょっと待てよ？ こいつはなんで俺が神社で参ったことを知ってるんだ？ 神社にいたからって俺が参ったとは限らないだろ。

わずかに鳥肌が立ち、俺は猫の言葉を遮ろうとしたが遅かった。

猫は言う。

「確か——『神様、どうか俺に夢を下さい』、じゃったか？」

俺はそれを聞いた瞬間、目を白黒させた。

あの神社には他に誰もいなかった。それこそ猫一匹も。

それどころか、俺はこんな恥ずかしい願いを口に出した覚えはない。

汗が額から流れ、次第に頬から顎に伝わる。

「……本物、なのか？」

「もちろんじゃ。お前様の願いを見に来た」

猫特有の鋭い目に俺の顔が映る。

やがて、汗は床に零れ落ちた。

話を聞くために俺達はさっきまで寛太と二人で話していた風当たりの良い廊下に移った。

「和樹はお茶でいいとして、猫神様は……トマトジュースでも飲みますか？」

「なんでトマトジュースだよ。普通に水でいいだろ」

「じゃあ、トマトジュースで。100%じゃろうな？」

「もちろん」

したり顔をしながら寛太は飲み物を取ってくる。

ああ、もう突っ込むのも疲れた。

しばらくして、寛太は各々に飲み物を配る。

「では、改めて聞くとしよう」

猫はトマトジュースを器用に飲みながら話しかけてくる。

「つっても俺が神社で願った言葉の通りだよ。俺には夢がないから、夢が欲しいって願っただけだ」

俺はお茶を一気に喉に流し込む。

ちらりと猫のことを一瞥すると既にトマトジュースは飲み干されていた。

「して、どうして夢が必要なんじゃ？」

飲み終えた猫は俺の横にちょこんと座る。

「神様が就活のこと知ってるか知らねえけど、就活で将来について考えなくちゃならねえんだよ。でも、俺には夢がない。だから、俺にやりたいことを作ってほしい」

俺は飲み終えたグラスを強く握る。

なんで猫にこんな情けない願いを聞いてもらっているのか。

馬鹿馬鹿しいとも思う。でも、今の俺はなんにでも縋りたかった。

それこそ、変な猫にでさえ。

「人間様も大変じゃな。いちいち将来について考える必要があるとは」

「猫神様はそう言ったことは？」

「ない。むしろ猫はいかに今日を生き延びるかだけだ。どうやって人間様に餌を恵んでもらえるかで必死じゃ」

「神様クソ情けねえ……」

自信満々に答える猫の姿にはまるで貫禄がない。

何度も言うが、本当に神なのだろうか。

「まあそんなことよりよ、パパッと俺に夢を与えてくれよ」

と、俺が催促すると猫は、

「無茶言うでない。そんな洗脳じみたことわしにはできん」

とはっきりと言った。

「しかし、折角ここまで来たんじゃ。手助けには協力しよう」

「ほんとか？ どうやって」

「今からワシが言うことに対してやりたいかやりたくないかを考える。では行くぞ」

——。

「普通に会社員というのはどうだ？」

「それは夢なのか？」

——。

「では、自分で会社を立ち上げるんじゃな」

「経営難しそうだし、赤字になったらどうするんだよ。自己破産とか勘弁だぜ」

—。

「今、人間様で流行ってる動画投稿者ならいいんじゃないか？」

「いやいやいや、あの人達毎日死ぬほど頑張ってる、それなのに成功者は一握り。続ける自信がねえ」

—。

「じゃあ小説はどうじゃ？ お前様はどうやら昔楽しそうに書いていたようじゃが？」

「あれは、ただ書きたかっただけだ。別に夢にするようなもんじゃねえよ」

—。

—。

どれだけの時間、言い合っただろうか。

既に太陽は山に隠れ、空が茜色に染まり始めた。

「お前様！ 本当にやる気があるんじゃないろうな！」

「あるに決まってるだろ！ だからお前の言ったことに対して真剣に答えてんだろが！」

「その答えが全部否定から入ったら意味がないじゃろ！」

「仕方ねえだろ!? 失敗はしたくねえんだよ！」

太陽が隠れて気温が下がったが、俺達の言い合いは徐々に熱を増していく。

猫が言ったことに対し、俺は至って真面目に返答する。

しかし、その全てが押し問答にしかならなかった。

「じゃあお前様は何がしたいんじゃない！」

「それを一緒に考えてくれるんだろ!？」

そして、現在はこんな感じに至る。

途中、話が終わらないと踏んだのか、寛太は自室に戻ってしまった。

「こんな人間様がいたとはな！」

「そういうなら、変な提案しかできないやつが良くも神様なんて大それた肩書を背負ってるなんてな！ 信仰してる

やつに謝りやがれ！」

俺達は唾を吐きながら、お互いに悪態をつきまくる。

もはやそこに、最初の願いを叶えるための言葉は一つもなかった。

「そこまでだ」

と、そこへ寛太が戻ってくるなり仲裁に入った。

「まともに考えられないならもう話し合うな」

「つってもこいつが」

「和樹」

寛太のその冷たい声音に俺は背筋が凍る。

「お前は他人に任せすぎだ。自分のことぐらい、自分で決めたらどうだ？」

静かに、淡々と言葉を紡ぐ寛太。

「和樹は昔からそうだ。全部人任せで済ませようとする」

「それは……」

「何を焦ってるんだ？」

寛太の乾いた声が俺の頭で反響するが、言い返すことはできない。

「……」

既に辺りは暗い。

りんりんと、鈴虫のひんやりとした鳴き声だけが聞こえる。

「お前様の優柔不断ぶりはよく分かった」

最初にこの静寂を切り裂いたのは猫の声だった。

そして猫は寛太と目を合わせる。

「お前様、確か、近いうちに祭りがあったよな？」

「はい、一週間後にあります」

「そこで、毎年なんか叫んでるじゃろ？ あれに参加しろ」

右前足を俺に差し向ける猫。

一週間後、この町には一年で一番大きな祭りがやってくる。

そして、そこでは毎年メインイベントとして、祭りの参加者が一人ひとり壇上に上がって各々好きなことを叫ぶ催しがある。

「これから一週間の間、お前様は必死に自分の夢を考え、そして祭りのあの壇上で叫ぶんじゃない」

「そんなこと言われても……」

「いいからやるんだ」

猫は語気を強めて言い放つと、徐に外に歩き出した。

そして去り際、

「どんな夢でもいい。だが、これができなければ今後未来はないと思え」

これまでの声とは打って変わった神妙な声で忠告を残して、猫は姿を暗闇に消した。

「……未来はない」

最後の言葉を噛み締めるように俺は反復した。

なぜだろう。それまではまるで強制力の欠片もなかったくせに、その言葉だけは俺の心に深く突き刺さった。

「俺は手伝わないからな。お前の未来だ、自分で考える」

「説教された奴に助けしてくれなんて言えねえよ」

苦笑いを浮かべて、寛太を弱く見つめる。

分かってるよ。これは俺の問題だ。

「俺の未来か……」

空を見上げ、雲に隠れて見えない月を眺める。

この問題は俺にとっていずれは避けては通れない問題だ。

「俺は——」

いつまで経っても月が見えない暗い空を見上げた俺の口から、言葉が零れる。

——俺は、『誰』になるんだろうか。

4

あれから一週間が経過した。

既に夕方だというのに、町には多くの屋台が並び、この時を待ちわびたと言わんばかりに活気に溢れ、至る所から威勢のいい声が飛び交う。

そして、祭りの中心部には大きなステージが建設され、祭りのメインイベントが現在進行中だった。

「……」

俺はその舞台を睨みつけるように立っていた。

そう、祭りが幕を開けてしまったのだ。

「よう、調子はどうだ？」

「いいと思うか？」

寛太が綿あめや焼きそばを持ちながら俺に近づいてくる。どうやら祭りを満喫しているようだ。

「お前は気楽でいいよな」

一方で、俺は自分でも分かるぐらいにやつれていた。

一週間前。猫から与えられた課題として、ここ一週間ずっと自分の将来のことと向き合っていた。

結論から言うと、まだ夢といえるものは見つかっていない。

色々と案を考え、自分なりに答えを見つけようとした。

だが、考えているうちに自分が本当にやりたいことが何なのかがよく分からなくなってしまった。

「……そういえば、あの猫は？」

俺は自虐的な考え方を振り払うように首を振り、話題を変える。

「猫神様ならあそこだ」

寛太が指を向けた先には、道行く人から餌を貰っている光景があった。

あれが本当に神様なのか……大丈夫なのかこの街は。

と、そんなことを考えていると餌をもらい終えた猫はこちらにやってきた。

「やはり祭りはいいものじゃな！こんなに美味しいものが溢れかえっておる」

「太るぞ」

「ふくよかなことは平和の象徴じゃ」

猫はその我儘な体を見せつけるように俺に言う。

「して、お前様は……どうやら結果はあまり良いものではないようじゃな」

俺の顔をまじまじと見た猫は呟いた。

「じゃが、約束は約束じゃ。どんなことでもあそこで喋ってもらうからな」

猫がさっきまで俺が睨んでいた舞台に目を向ける。

既に壇上に誰かが上がっている。

「まあ、まだ時間はあるからな。他の人の叫びでも聞いて考えてみるよ」

一步踏み出した寛太の後を俺はついていく。

壇上の周りには多くの観衆が立ちおり、熱気か他とは

比べ物にならない。

「やっぱ、毎年ここは凄いな」

寛太は感心するように声を漏らす。

マイクを通じて放たれる想いの叫びに対し、観衆は発表者に声援を浴びせる。

様々な声が交差し、この場を最大限に盛り上げていた。

「さあ！ 続いて叫びたい方はいますか！」

司会者が声を張り上げ、次の発表者を募る。

周りからは「お前行ってこい」だの「行ってくるか」だの、この騒がしい雰囲気と充てられた人の声が耳に入る。

「では、そちらの方！ 壇上にお上がりください！」

そして、手を上げていた一人の男性が壇上に上がった。

彼はふらつく足取りでマイクを手取る。どうやら酔っぱらっているらしい。

「俺あ、嫁と娘を連れていつかあ、日本一周でもしてやるかなあ！」

気持ちよさそうに声を荒げる男性はマイクを高く掲げる。

その叫びに呼応するように、

「いいねえ！ 幸せにしてやれよ！」

「もっとでっかく世界一周ってのはどうだ！」

観客が大いに盛り上がる。

いつもの祭りの光景だ。子供の頃から変わってない。

それから先も老若男女問わず、壇上で思い思いのことを叫んだ。

「——将来は宇宙飛行士になる！」

「——無理かもしれないが、告白してみようと思う！」

「——起業して、この町を豊かにしてみせる！」

「——上京して一躍有名なモデルになってやる！」

彼らの瞳は輝いていた。

絶対にやってやる、成功してやる。そんな思いが声から、言葉から、仕草から伝わってくる。

「今年は例年以上に活気があるようじゃな」

「そうですね。皆威勢がよくって気持ちがいいです」

寛太と猫が発表者に向かって感心の声を上げる。

その隣で、俺は心に霽がかかり始めていた。

どうしようもなく暗い、最悪の霽が。

「……でもよ、あんなもん本気でできんのか？」

気付かぬうちに俺はその言葉が口から漏れ出ていた。

始まった。始まってしまった。俺のいつもの発作が。

「今はいいかもしれねえけど、いつかは夢から覚めるもんだろ」

「おい、今はそんな時間じゃないだろ！」

寛太が強めに俺のことを止めに入ろうとするが、今回は止まらなかった。

「いや、ああいうのは後から後悔するもんなんだよ」

俺は自然と周りに負けないように声を張り上げようとしていた。

いつものことだ。いずれ止まる。

——止まれ。

「後悔したらあんな夢見られなくなるんだからよ」

——止まれ。

「大口叩くのにも程があんぜ」

——止まれ。止まれ。

「いずれ現実を見ることになるんだ！」

——止まれ。止まれ……頼むから、誰か止めてくれ。

「だから夢なんて下らねえこと見ずにだな——ッ!!」

気が付いたら、俺は倒れ顔が地面についていた。

直後、頬に流れる鈍い痛みを感じる。

俺は、殴られたようだった。

「和樹、いい加減にしろよ」

俺が見上げると、寛太が怒りの形相をこちらに向けていた。

「いつまでうだうだ言ってんだよ！」

俺の胸倉を掴んだ寛太は青筋を立てている。

「自分に夢がないからか！ だから人に当たって少しでも楽になろうとしてんのか！ もうこっちはうんざりなんだ

よ！ 何度も何度も何度も何度も！ 自分の夢を馬鹿にされる身にもなったことがあるか！」

寛太の剣幕と大声が多くの人を釘付けにする。

しかし、寛太にはそんな視線は関係なかった。

「お前はいつだってそうだ！ 自分のことを自分で決められない！ 何か言ったら常に否定から入る！ それで、自分の機嫌が悪くなれば八つ当たりだ。楽しいだろうな！ そうやって自分は頑張らずに人を馬鹿にして、威張り散らかすのはさぞかし気持ちがいい生き方だろうな！」

胸倉を掴む寛太の手にさらに力が加わる。

「いい加減気づけよ。今のお前には、夢を持つ資格すらないんだよ」

ざわざわと周りに人が集まってくる。

すると、寛太は投げ捨てるように手を離し、人ごみの中に紛れて行った。

「……」

俺はただ、寛太のその背中を見つめることしかできなかった。

5

俺は祭りの喧騒から遠く離れたベンチに腰を掛けた。

「……返す言葉もねえよ」

お前の言う通りだよ、寛太。俺は正真正銘の屑野郎だ。

俺だって、頭では人を馬鹿にして自分の矜持を守ろうとすることがどれだけ虚しいことか分かっているつもりだ。

でも、俺の弱い心が、自分を守るために勝手に動いてしまう。

どうしようもないんだ。俺の心と頭は昔から、ちくはぐなんだ。

「資格がない。全くもってその通りだ」

そんなこと、俺が一番よく分かっている。

「どうしたらいいんだよ……俺は」

答えは常に探してきたつもりだ。でも、いまだにその答えは見つからない。

その時だ。

「そんなもの、お前様以外に誰が分かるというんじゃ」

猫が俺の横に座った。

「派手にやられたな」

「当然の報いだ。俺は、それだけのことをしてきたんだからな」

何度も人の夢を嗤った。何度も人の夢を馬鹿にした。

一発殴られるだけじゃ足りないぐらいの罪が、俺にはある。

「お前様は、どうしてそこまでして夢に執着する？」

「置いて行かれるのが、怖いからだ」

「本当に、それだけか？」

猫は俺の目を見て言う。

その猫の瞳に映る自分を見ていると、心がざわめきだした。

心に蓋をしていた部分が抉られ、俺の本心が顔を出し始める。

俺の、本当の想いは――。

「俺は……『誰か』になりたかった」

俺は寛太にも明かしたことのない心の内を語り始めた。

「夢を持ってる奴はいつも『誰か』になってる気がするんだ。ちゃんとした、『誰か』っていう存在に。でも、俺は違う。夢のない俺は、その『誰か』にもなれていない感じだ。ただ、漠然と生きているだけで、存在意義すらもあやふやで」

まとまらない言葉をぼつりぼつりと紡いでいく。

「それが怖かったんだ。置いて行かれる疎外感も怖かった。けどそれ以上に、自分が本当に生きている価値があるのかどうか分からなくなるのが、凄く怖かったんだ。だから、俺は人の夢を馬鹿にした」

馬鹿にすることで、相手は『誰か』ではないと自分に言い聞かせたかった。

相手が、俺と同じく存在意義をまだ持っていないと思いたかった。

「正真正銘の屑野郎だ。俺はそんな自分が嫌いだ。だから、夢を見つけて俺自身が『誰か』になりたかった。そうしたら、もうそんなことしなくて済むから」

動機の根底にあるものは全て自分への嫌悪感だけだ。

寛太の言う通り、俺は焦っていた。

自分への嫌悪感を払拭するため、俺は一刻も早く夢を見つけなければならなかった。

「これが、俺が夢を求める本当の理由だ。馬鹿だよな。夢を馬鹿にしながらか、夢を求めるなんて」

矛盾した考えに、俺は反吐が出そうだった。

遠くの方では祭りの明かりが見える。しかし、そこから流れてくるはずの喧騒は届かない。まるで、ここだけ隔離されているかのように。

「これが俺の本心だ。笑ってくれ」

俺は自嘲しながら吐き捨てる。

それからしばらくして、ようやく猫が重く閉ざしていた口を開き、

「なあ、一つ良いか？」

「なんだ？」

「夢がそんな簡単に見つかるわけないだろ」

そう言ったのだった。

「ある者は運命的な出会いをし、ある者は何かに感激を受け、ある者は天才的な直感で思いつく。そうやって、人は幾重の偶然という奇跡を得て、自分の夢を語るんだ。たかが一週間で決められたものが夢なんてありえない」

「お前が一週間で考えるって言ったんだろ」

「確かに言った。しかし、最初からお前様が決められるとは思っておらんよ」

衝撃の告白に、俺はわずかに憤りを感じる。

「じゃあ、なんだ！ 今日までの時間は全て無意味だったってことかよ！ 俺の考えた時間は全部、全部！」

「無意味なわけあるか」

怒る俺のことを猫は優しい表情を浮かべて見つめてくる。

すると、俺の怒りが静まっていくようだった。

「この一週間ほど自分と向き合ったことはあるか？ 自分は何がやりたいのか、何ができて、何が好きなのか。自分のことを徹底的に調べ上げ、自分の将来について真剣に、真摯に考えたことはあったか？」

俺は猫の言葉にゆっくりと首を振った。

「そうだろ？ だったらその時間が全部無駄だなんてことはない。この一週間、お前様がもがいて苦しんで、それでも必死に答えを出そうとしていたことは知っておる。その一瞬、一秒が、お前様をいずれ出会う答えへ導く手助けをしてくれる」

猫の言葉は今まで以上に、すんなりと胸に入ってくる。

それこそ、本当に神様に……いや、この感覚はまるで自分自身に諭されているような気分だった。

「それに、夢がないことを嘆くな。本当に大切なことは夢を見つけることじゃない。自分の夢が何なのか、それを考え自分自身と向き合うことこそが大切なんだ」

「考える、時間……」

「そうだ。その自分と向き合った時間が、思考が、真摯さが——お前様を『何者か』にしてくれる」

猫は静かにそう言うと、笑った気がした。

とても暖かい。優しい暖かさを感じる。

その優しさのおかげか、俺は今まで隠してきた弱い心を、口から吐き出した。

「——ずっと、他人任せにしてきたんだぜ？」

「別にいいだろ、人に手を借りても。もちろん、今のままじゃ駄目だけどな。ちゃんと、最後には自分一人ですべてを決めるようになれ」

「——色んな人を傷つけたんだよ」

「だったら謝れ。それで、今後はその癖をきっぱりやめればいい」

「——こんな俺でも、夢を見て、いいのかな？」

「当たり前だ。自分と向き合った者に、夢を持つ資格はある」

目頭が熱くなる。

ふと、何か頬を伝う感覚がある。きっと、熱が零れ落ちたんだろう。

それを見た猫は、俺の手を思いっきり叩く。

「さあ！ 行ってこい！ 今のお前の気持ちを叫んで来

い!」

「……ああ!」

俺は熱を乱暴に拭い、そして会場に走り出した。
前を向け。今こそ、自分と向き合う時だ。

会場に着くと、丁度壇上で寛太が叫んでいた。

「俺は神社にもっとたくさんの人に来てもらえるように努力して、色んな人を幸せにしたい!」

力のこもった声に観客も負けじと声を張る。

そして、発表が終わると司会者が「では、この辺で」と幕引きをしようとした。

「待ってくれ!」

俺はその終止符を強引に遮った。

視線は俺に集中する。その中で、呼吸を整えながら俺は壇上に登った。

すると、司会者は「では、これで最後の発表者です」と言い、観衆も急な割込みに大いに盛り上がる。

「夢は見つかったのか?」

壇上に上がると、寛太がマイクを投げってくる。

「見つかんねえよ。だから、これが初めての負け戦だな」

「そうか。だったら精一杯、情けない負け宣言を見せてくれよ」

短く笑った俺達はお互いに手を合かし交代する。

これから話すことは俺の惨めで、みっともない自分勝手な話だ。

知り合いが聞いて笑うかもしれない。罵声が飛んでくるかもしれない。

でも、全部受け入れる覚悟はある。

それが今の俺だから。

俺はマイクを持って大きく息を吸った。

話す内容など考えていない。今はただ、自分と正々堂々と向き合うだけだ。

そして、

「——俺には、夢がありません」

俺の止まっていた時間を動かしたのだった。

6

「俺には、小さい頃から夢がありませんでした。

周りの友達がたくさん夢を言う中、俺は彼らの夢を「どうせ叶わない」と馬鹿にしていました。

そんな自分が嫌いで、何とかして自分も皆と同じように夢を探しました。

気が付けば俺は大学生になってました。

俺は大学生になったらきっと見つかると思ってました。

ドラマとか映画とかで描かれる大学生は現実ではないと分かっていながらも、なんとなく大学生になったらやりたいことが見つかる、そう勝手に思っていました。

でも、現実はそのように甘くはなかった。

どんどん周りとの距離が離されていっていった。

そして最近、本気で自分の将来と向き合えないといけなくなりました。

だけど、全然見つからなくて。

俺は焦ってました。皆が夢や目標を持って走っているのに、俺だけは何も無い。

皆『誰か』になろうとしているのに、俺はその『誰か』にもなれないのが怖かった。

馬鹿馬鹿しいと思うかもしれませんが、俺は自分の存在意義が欲しかった。

夢を持ち、夢に向かうことで、自分が生きてる理由が欲しかった。

でもそんなもんがすぐに見つかるわけもなく、俺は人の夢を馬鹿にして、皆は自分と同じでちゃんとした夢がまだないと思いついた。

俺は、そんな俺がすごく嫌で、一刻も早く夢を見つけないといけなかった。

……でも、ある奴が俺に教えてくれました。

夢がないことを悪く思うなど。自分と向き合った時間が大切なんだと。

もちろん、夢を馬鹿にしてしまった人には謝ります。

また、誰かの手を借りるかもしれません。

ですが、俺はこうやって悩んで、悩み抜いたこの時間を大切にします。

そして、これから先、もっと悩むことになると思います。
でも、その悩んだ先に、夢があると思うんです。
だから、俺の今の夢は——」

体の震えが収まらない。
こんなもの夢とは言わないのかもしれない。
でも、今の俺が精一杯考えて出した唯一の答えだ。
笑われたっていい。馬鹿にされたっていい。
これが、今の俺の夢なんだ。

「——夢を見つけること。これが今の俺の夢です」

俺の一世一代の、みっともない告白が幕を閉じる。
持っていたマイクを下げ、観衆を見渡す。
すると、
——パチパチパチ。
まばらながらも、ゆったりと拍手が鳴り出す。
さっきまでの声援はない。でも、そこには確かに優しい
音が溢れていた。
俺は唇を噛み締め、流れそうになる涙をこらえながら
最後に一礼をした。
「ありがとう、ございました」

「よかったのか？」

和樹の発表が終わると同時刻、観衆の後ろの方で寛太
と猫が喋っていた。
「お前だったら、自分のやりたいようにあいつを誘導できた
だろ？」
「何を言っているんじゃ。わしはそんな洗脳じみたことはで
きないと言ったじゃろ」
「いや、和樹相手ならできるだろ」
寛太は下を向いて猫のことを見つめる。
「お前は猫神じゃない。お前は——和樹だろ」
猫は何も言わず、ただ壇上にいる和樹を見つめていた。
「どこかで見たことがあると思ったんだ。お前の特徴的な
模様。まさか、和樹が昔書いた小説の中にいるとは思わな
かったけどな」

「……それだけでは何とも」
「だから俺は一つ手を打った。トマトジュースだ。あの小説
にいた猫はトマトジュースを飲んでたからな」
「よく覚えてんな」
「結構読み込んだんだよ」
寛太がそう言うと、猫は短く笑う。
「自分自身を誘導することは余裕だろ？　なんでしなかつ
た」
「……俺は、俺自身に何か特別なことをしてほしいわけ
じゃない。ただ、自信を持って生きてほしいだけなんだ」
猫はそう言うと、踵を返す。
「いいのか、最後に自分自身に挨拶しないで」
「いいよ。あいつはようやく、自分と向き合うことができるよ
うになったんだ。これから必要なのは俺じゃない」
「そうか」
猫は近くの茂みに入っていく。
そして、最後に寛太にこう伝えた。
「俺を、よろしくな」
「ああ。和樹を助けてくれてありがとう」
そのやり取りを最後に、猫は完全に姿を消したのだっ
た。

太鼓の音と共に祭りが終わりを迎える。
俺は、少しでも前に進むことができただろうか。
多分、進んではいないだろうな。ずっと足踏みしたまま
だ。
でも、これからだ。これから先、俺は前に進むために努力
しないとイケない。
「今日は、満月か」
あの日のように月は雲に隠れていない。
しっかりとした輝きを持って、俺を照らしていた。

7

「よし……」
最後の文字を入力したと同時に、俺は大きく息を吐い
た。

「こうやって書いてみると、俺って本当にどうしようもない屑野郎だな」

あの頃を思い返しながら、自分のしてきたことに苦笑いをする。

あれから数年経ったが、未だ夢という夢はまだない。

でも、これから先、未来の俺が夢を見つけるかもしれない。

それが五年後か十年後かは分からない。

でも、どれだけ時間をかけようとも探していればきっと見つかるはずだ。

そして、心の底からしたいことが見つかった時、足枷にならないように今日を精一杯生きよう。

今日を、今を精一杯生きて、そして明日の自分に繋げよう。

そうやって、明日の自分が『誰か』になれるように、今日を一所懸命に生きよう。

「こんなもんか」

俺は小説の確認作業をしていると、一本の電話がかかってきた。会社からだ。

「藤島です……え？ 今度のプロジェクトに俺が？ はい、ありがとうございます！」

電話を切った俺は一人でガッツポーズをする。

「よっしゃ！」

ずっと目標にしてきたプロジェクトに参加でき、俺は嬉しくて思わず声が出る。

「今日は明日に備えて早く寝るか……っと、その前に」

俺は、書き上げた小説に最後の仕上げを施す。

「『誰か』……いや、ここはあいつの言葉を借りて」

そして、ページの一番初めに俺は題名を付け加えた。

「題名は——」

2021年10月14日



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)応募作品
『きょうたくん』
真鍋 香槻(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

講演会報告



大阪産業大学学会主催 学術講演会

向谷実氏講演会

～One and only～好きこそものの上手なれ

「音楽でつなぐ世界の鉄道と安全」
音楽が好きで鉄道が好き、その思いは
世界の鉄道の安全を支える力となる
音楽活動で培ったコンピュータ技術を活かして鉄道シミュレーションゲームを開発。
その技術が評価され、業務用シミュレータを制作。その技術は世界へ～



学術講演会終了後の感想と報告

元木 裕太郎

10月26日、大阪産業大学多目的ホールにて。気温が程よく暖かく、晴天下の心地よい季節の中「学会主催学術講演会 向谷 実氏オンライン講演会」が開催された。講演中は、向谷さんが好きで取り組んでいる鉄道音楽について色々なことを学べたので、これからその感想等を書いていきたい。

まず、向谷 実さんは、株式会社音楽館の代表取締役で著名な音楽家の方だ。音楽制作はパソコン用ソフトの使用を主とし、これまでに多くの鉄道会社と連携し多岐に渡り活動されてきた。九州や関西のJR列車の発車メロディと車内メロディの制作、音楽CDの販売、列車運転シミュレーションゲームの制作販売、これらはどれも日本国内外の人々の中で爆発的な人気を誇った。また、福祉系の新規事業「駅内のデジタルホームドアの製作」に会社全体で取り組み、社会貢献に対しても情熱的で積極的である。私自身、向谷さんの活動やそれに対する向谷さん自身の想いにとても興味がそそられた。鉄道音楽やシミュレーションゲームは、若者世代や鉄道好きの人からは勿論、老若男女問わず興味が出るであろう。

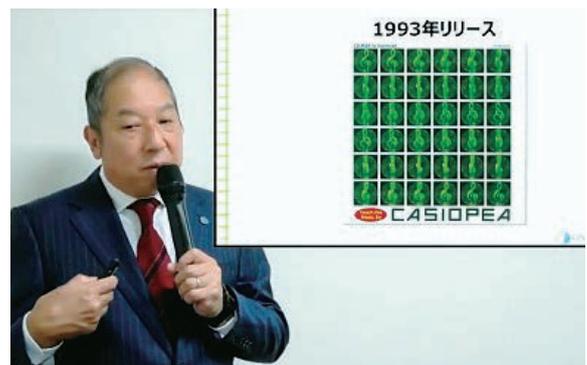


1つ目、発車メロディ。向谷さんが初めて発車メロディと車内メロディを制作したのはJR九州。当時のJR九州の新幹線責任者のアオヤギさんと手を組み、初となる楽曲提供を行った。発車メロディ、車内メロディともに穏やかな音感で聞いていて落ち着いた。これらのメロディには、人々の乗降促進のために色々と工夫されていて、発車から降車までメロディを流し続けるというのも、そのひとつ

だ。乗車している人には、通勤中や通学中の方がいる。向谷さんは、これらそれぞれの場面と時間帯に合わせた曲を発車時から降車時まで流し続けるという提案をした。結果、通勤中や通学中でも気分ノリノリで電車に乗っていた人が毎日多発し、列車も人気を得たというデータが得られている。また、曲の間にもアレンジを加えており、曲の間に自動音声流れる。列車で高速移動から低速移動に変化する際の曲も作られており、それに加えて人の乗り降りのタイミングも考慮されている。発車と車内メロディには人々への曲の説明責任を果たし、ただ曲を作っているのではないという向谷さんの想いが込められている。



2つ目は、音楽CDの販売だ。昭和時代からCDの販売活動を行い、1993年、向谷さんは自身が経営する音楽館で、カシオペアが題材となった、映像と音楽を融合させたCD-ROMソフト『Touch the Music by Casiopea』を制作して発売する。これは後に制作する『Train Simulator』のヒントともなった。向谷さんの大作でもある。



3つ目、家庭用シミュレーションゲーム「Train Simulator」の制作販売だ。PS2用、PSP用のソフトがある。それも年代が重なるにつれシミュレートがよりリアルになった。運転席から見た街の景色、鉄道博物館、従業員の業務する様子が細かく再現されていて、ハイクオリティだと感じた。コストも良く、世界中の人々に楽しんでもらうための工夫を惜しまなかったのだと思う。また、鉄道の仕組みも勉強できてプレイ中も楽しいので一石二鳥だ。これに加え、シミュレーションゲームに似たソフトは、会社の研修でも実際に取り扱われている。社員が楽しそうに運転していて良かった。



今回の講演会で、向谷さんが持つ鉄道音楽への愛や努力が伝わってきたのに加え、鉄道ツールの制作の歴史について熱心に説明して下さったため、鉄道ならではの良さと本質が身に染みた。鉄道は、今後の日本国内外の社会で様々な分野で用いられ、人々に愛されるのであろう。今後またこのような講演の機会があれば是非参加したいし、鉄道についてもより詳しく触れたいと思いました。貴重な機会をいただきましてありがとうございました。



(工学部 機械工学科)



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『華やかに』
中村 詢弥(デザイン工学部 情報システム学科)

留学記



私の2週間の朝鮮語海外研修

国際学部 国際学科 川口 紗耶

はじめに

私は、2週間「朝鮮語海外研修」に参加して、韓国の知識だけでなく履修している授業に関しての気づきも得ることができました。

コロナのためオンラインでの研修でしたが、期待以上の、普段ではできない貴重な経験をすることができました。

研修に参加した理由

私は、「韓国人と韓国語で話したい」「韓国に留学したい」「アイドルの言っていることを字幕なしで理解したい」という目的を持って今回の研修に参加しました。

高校の時から韓国に興味を持っていたので少し知識はあったのですが、本格的に勉強し始めたのは大学に入ってからでした。

研修に参加することで大学の授業とは違ったことを学べ、学生生活を意味あるものにできると考えたため参加を決意しました。

実際に研修を受けて

実際に授業が始まり、最初の方は先生の指示を聞き取るのが精一杯で常に余裕がない状態で授業を受けていました。そこで、韓国語で韓国語の文法を学ぶことの難しさに気づきました。

しかし毎日授業を受けていると徐々に聞き取れるようになり、余裕を持って授業を受けることができるようになりました。

聞き取れるようになったことで授業が楽しく感じ、意欲的に勉強することに繋がったと思います。

担当の先生は2人いて、曜日で分かれています。若い先生が多く、授業の中でBTSやTWICEの写真を使っていたのでとても楽しく授業できました。

また、先生と学生のコミュニケーションだけでなく学生同士のコミュニケーションの時間も設けられていました。Zoomのブレイクアウトルームを使って3、4人のグルー

プになりコミュニケーションを取りました。

他大学の生徒とのコミュニケーションの時間はとても有意義で、みんな同じような目的や趣味を持って研修に参加しているので話しやすく共通の話題を見つけやすかったです。

私は、SEVENTEENというアイドルが好きでそれがきっかけで友達を作ることができ、とても嬉しかったです。

授業の最後には韓国の学生とのコミュニケーションの時間があり、そこではその日に習った文法を用いたテーマで、グループで様々な話をしました。

ネイティブの韓国語を聞き取るのは少し難しかったですが、フレンドリーに話せたので楽しい時間を過ごすことができました。ここでは自分の考えを韓国語で伝える能力が身に付きました。

現在も一緒にグループになった韓国の学生とLINEで話しているので、ずっと韓国語の勉強を続けることができます。

文法は一日の授業で2、3個学びました。休憩時間にした課題をカカオトークで先生に送り、フィードバックをもらうという形式でした。課題の量は多すぎず、学んだ内容に対応しているものだったので復習に役立ったと思います。

また、先生のフィードバックは迅速でコメントをつけてくれていることが多かったので、やる気にもつながりました。授業中の発言に対しても、否定せず肯定する場面が多かったので積極的に発言しやすく自信にもつながりました。

さらに、韓国語以外で先生の「教授法」について気づいたことがあります。

私は、今「日本語教育法」という授業を履修しており、そこで「直接法」という教授法を学びました。これは外国人に日本語で日本語を教えるのですが、私はこの経験があまりなかったので難しさを理解できていませんでした。

しかし、今回の研修で韓国語で韓国語の授業が行われていたことにより、「直接法」の難しさを身をもって感じる

ことができました。

自分が教える立場になった時、学習者の気持ちを理解できることは大切なことだと思うのでこの経験を活かしたいです。

おわりに

私はこの研修に参加してよかったと感じます。

私は韓国語の能力の中で、リーディングとライティングが得意な方でしたが、今回の研修でさらに能力がついたと感じます。さらに、苦手だったリスニング、スピーキング

も研修前より確実にできるようになりました。

この研修では、韓国語を話せるようになりたいという同じ目的を持った人が集まり、レベル分けがされていて同じくらいのレベルの人と勉強できるのでやりやすかったです。

大学の授業だけでは経験できない事が多かったので有意義な2週間を過ごすことができました。

まだ知らない単語や文法が多いので、これからも勉強を続けてもっと韓国語の能力を伸ばしていきたいです。

私の充実したECCオンライン留学

国際学部 国際学科 船田 理紗子

3週間の授業を終えて、この研修の授業に挑戦することが出来て本当に良かったと思います。最初は、実際に現地に行かないと意味はないのではないかと考えて研修を受けるか迷っていましたが、オンラインでも十分英語の修得は可能だということが分かりました。毎日の授業が本当に楽しかったです。得たものが沢山あるし、良い経験ができたと思います。最初はうまくできるか心配でしたが、私が分からなくても講師の方がサポートしてくれたので、分からなくても挑戦してみる大切さを学んだ3週間でした。1週目は、スピーキング強化、ライティング強化、発音クリニック、プレゼンテーションがありました。スピーキングテストでは、いろんな会話の表現を学びました。それを使って練習するのですが、スムーズに言葉が出てこなくて悔しかったです。ライティング強化では、Journal、Friendly E-mail、Formal E-mail、paragraphを習いました。英語を正しい文法で書くことは難しかったけど、自分の知っている単語を最大限に出して頑張りました。発音クリニックでは、Linking、Elision、Flap、Weakeningを習いました。スペルと発音では異なっているので、発音を聞き取ることが難しかったです。クリフエッジプログラムのプレゼンテーションは非常にうまくできました。本番までに一番苦労したのは発音です。Preventing、occurrence、carbohydrates、vitamins、この4つの単語の発音が特に難しかったです。ですが、プレゼンテーションギリギリの時間まで沢山練習をして、本番では完璧に発音できました。このレッスンを通して語彙を沢山覚えることができたし、自信がつかえました。2、3週目は、スピーキング強化、ライティング強化、プレゼンテーションがありました。2週目は、スピーキング力とライティング力が付いた気がします。この週は、間違いを恐れずとにかく英語で話してみることを意識して取り組みました。1週目の時は、Do you have any question?と聞かれた

らnoだけでしか答えることができませんでした。ですが2週目は、No, I don'tと文章で答えることが出来たし、文法が間違っていない、単語を並べて伝えることが出来ました。さらに、文章を作るにあたって、Topic Sentence、Body、Conclusion、transitional devices、を考えながら文章を作成することが出来ました。クリフエッジプログラムのプレゼンテーションは、前回と同じようにジェスチャー、話すスピード、声の大きさも前回の発表でよかった点を継続することが出来ました。発表の内容は簡単でしたが、Genres、become、fairy、thumpedの発音とイントネーションが難しかったです。ですが、たくさん発音して練習することによって発音できることが分かりました。3週目は、1、2週目と比べて、語彙力がアップしました。さらに、今まで先生から質問されて答えるばかりで自分から質問をしたいけど、英語でどういう風に伝えたら良いか分かりませんでした。なので、いくつかフレーズを作って覚えて授業の時に質問することを3週目の授業で実践できたので良かったと思います。最後のクリフエッジでは今までで一番いいプレゼンテーションができました。難しかった発音は、expressionsとcomfortableです。何回も発声練習することによって、発音と意味が頭の中に定着して記憶に残りやすいことが分かりました。3週間の授業で一番難しかった授業は、スピーキング強化の授業です。一つのセンテンスを覚えるのが大変でした。ライティングテストとスピーキングテストでは、文法は正しくないけど、伝えたいことを自分の今持っている語彙力で伝えることが出来たし、レッスンの中で分からない語彙が沢山出てきたので、語彙の勉強をしないといけないなということに気づきました。その経験から今後の英語学習に繋げていき、これからも英語の勉強を続けて外国の方ともっとコミュニケーションをとれるようになりたいです。

学術研究書出版助成本の概要



学術研究書出版助成本の概要

Financial Aid for Publishing

令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
「交差」
渡辺 直哉(工学部 交通機械工学科)

『流通システムの基礎と展開』の概要

経営学部 商学科 教授 藤岡 芳郎

本書はこれまでに流通・マーケティング領域を対象に研究した成果をもとに新たな研究を進展させるための学術・研究書としてまとめた。研究活動は日本マーケティング学会、アジア市場経済学会、日本消費経済学会が中心である。研究テーマは、20世紀の工業社会を背景としたマーケティングの視点での流通システムから21世紀のサービス社会を背景としたマーケティングの概念化である。

流通システムは生産者が作った商品を消費者に届けるための仕組みである。この仕組みは企業活動(ビジネス)の基本である。流通システムは環境変化の影響を受けながら構成員がそれぞれの立場で役割を果たすために変化して行く。システムとは誰が(主体：流通システムの構成員)、何を(客体：商品)、どのように(流通の流れ、届け方)顧客に届けるのかについての体系である。「誰が」、「何を」については流通システムが想定してきた物財(グッズ)の枠組みだけでは捉えきれない時代になってきた。

例えば、生産者が、サービス化して特定領域のプラットフォームになることを目指している。卸売業者や小売業者の流通業者は製造業化、情報産業化を戦略として掲げている。したがって、生産者、卸売業者、小売業者はそれぞれの既存の機能(生産、卸、小売)の枠内からはみ出しながら流通システムを変化させている。消費者は物財を所有することから使用・利用へ、モノからコトへと価値観を変化させている。

さらに、「どのように」顧客に届けるのかについてはスマホに代表されるIT機器、AIやロボット、そしてサブスクリプションのような新たな提供方法へと大きな変化の中である。小売業はこれまでの実店舗と無店舗、モノの販売(所有)とサービス(サービシーズ)の販売(使用・利用)のような二項対立的な視点で十分考察できない時代になってきた。しかし、現在においても流通システムの本質的な機能や役割は変化していない。

本書はこれまでの学術的研究をもとにして4部構成にした。I部は流通システムの基本概念とフレームワーク、II

部は流通システムの構成員の役割とこれまでの動き、III部は各論として生鮮物、街づくり、国際化、無店舗販売、IV部は現状とこれからの展望についてまとめている。



21世紀の流通環境(ビジネス環境)において、企業は市場経済だけでなく幅広く社会全体や一人ひとりの顧客を対象とした活動をする必要がある。なぜならば、企業がデジタル・マーケティングやダイレクト・マーケティングで商品や顧客体験(CX)を届ける顧客は生活世界で独自の価値観で評価するからである。したがって、企業は生活世界で一人ひとりの顧客と個別につながりながら長期的な良い関係性を維持していくことが重要になる。そのため企業は倫理性と社会的課題への取り組みが求められている。

新しい商品を顧客に届ける仕組み(流通)は流通の構成員や業界の溶解化、融合化の先に出現するであろう。具体的には生活世界の中で企業が顧客と直接つながりながら、顧客の求めに対応するリアルとネットの仕組みで

ある。

たとえば、企業は顧客のコモディティ化したニーズに対して、顧客があらかじめ決めた取引方法(リアル/ネット)で自動的に商品を自宅に届ける。個別のニーズに対しては積極的にリアルまたはネットでつながりながら対応する。顧客の商品を探索する楽しみや購入する楽しみに対しては、企業が取引データから把握している「顧客の好みリスト(仮称)」の中から選択したいくつかの商品や体験をリアルまたはネットで提供する。現在は商品と情報の量が一人の人間の処理能力を超えている。企業が顧客の良き支援者となって商品を絞り込むサービスをする。そして、市場に存在しない商品は企業が顧客と一緒に創り出す。

現在描いているのはこのような「価値共創」の視点での企業のシステムである。「価値共創」の視点での企業システムを動かすためには新しい視点での組織運営が不可欠である。今後の研究においてさらに考察を深めて学術的な貢献をしていく予定である。

目次

I部 流通システムの基本概念と流通環境分析

第1章 流通システムの基本概念

第2章 流通環境の変化 マクロ環境

第3章 流通環境の変化 ミクロ環境

第4章 流通環境の変化 消費者

II部 これまでの動き～誰が(主体:流通機関の構成員)

第5章 流通システムの構成員～生産者の立場から

第6章 流通システムの構成員～卸売業者の立場から

第7章 流通システムの構成員～小売業者の立場から

第8章 業態の変化

III部 これまでの動き～何を(客体:商品)、どこで・どのように(取引方法:市場・提供方法などの届け方)

第9章 生鮮物の流通の変化

第10章 流通と街づくり

第11章 流通の国際化

第12章 無店舗販売とEC

IV部 流通システムの現状と展望

第13章 変化する流通システム～生産者の視点から

第14章 変化する流通システム～流通業者の視点から

第15章 出現する新しい流通システム

最後に、本書は大阪産業大学学会学術出版助成金のご支援で出版しました。謹んで御礼を申し上げます。

『憲法教育研究』の概要

国際学部 国際学科 教授 佐藤 潤一

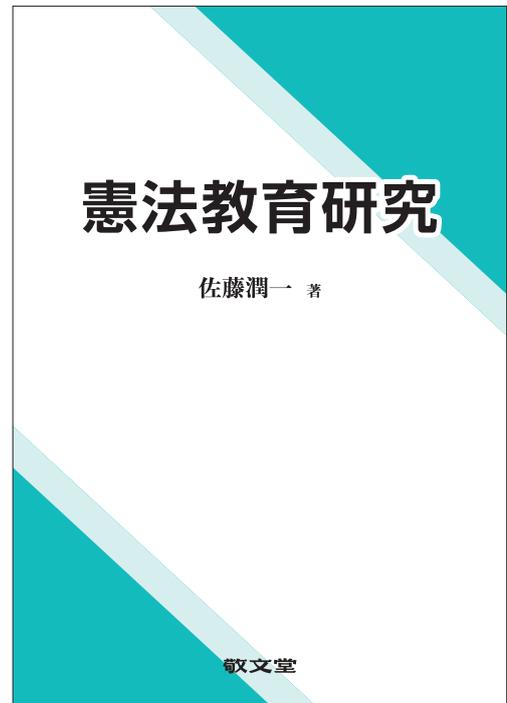
本書は、筆者がこれまで講義の傍ら、講義の前提としてものしてきた考察を踏まえつつ、**憲法教育を行う基礎となる研究を集成したもの(本書第1部—第3部)**である。多くの憲法体系書が体系性と解釈論の精緻化を目的としているのに対し、本書の特に第1部及び第2部は教育効果とのかかわりを重視して執筆したが、佐々木惣一『改訂日本国憲法論』(有斐閣、1952年)、美濃部達吉著・宮澤俊義補訂『日本國憲法原論』(有斐閣、1952年)、清宮四郎『憲法I(第3版)』(有斐閣、1979年)、宮澤俊義『憲法II(新版)』(有斐閣、1972年)、宮澤著・芦部信喜補訂『全訂日本国憲法』(日本評論社、1978年)[宮澤註釈]、芦部著・高橋和之補訂『憲法(第4版)』(岩波書店、2009年)、佐藤幸治『憲法(第3版)』(青林書院、1995年)、中川剛『基本的人権の考え方』(有斐閣、1991年)の他、近年の有力説である、長谷部恭男『憲法 第7版』(新世社、2020年)、松井茂記『憲法(第3版)』(有斐閣、2007年)、渋谷秀樹『憲法』(有斐閣、2007年)などのそれぞれ特色ある代表的な体系書を踏まえた研究となっている。

また、統治機構、天皇制、平和主義については、比較的オーソドックスな立場を踏まえているが、いくつかの点で通説に対する問題提起もしている。

最もチャレンジングなのは、人権論である。体系的考察という点では不十分であるが、人権性質論を、条文を踏まえてどのように解すべきであるか、現時点での問題提起をしている。この点、当該論文掲載時の査読者のコメントが大いに役立った。ここに感謝申し上げる。

人権の各論的考察については、現在進行形で比較憲法的考察も含め研究を進めている。

本書掲載の人権各論研究は**憲法の基本原理にかかわる多文化共生観念にかかわる研究および憲法改正議論と密接にかかわる教育基本法改正問題にかかわる研究**のみにとどめたが、それは**今後の研究の基礎となるものに限定した**こと、第1部—第3部の総論的考察に係る部分が相当程度膨大なものとなってしまったことによるやむ



を得ない措置である。

あまり一般的には意識されていないようであるが、政治学との違い、現実の政治との憲法学及び政治学の関連についても教養教育において意識されることが望ましいことがあり得るであろう。現実の政治と憲法学政治学との関連は、規範の学と認識の学の現実との関係を認識させるべく考慮されるべき点を明確にすべきであるとの主張に連なる。憲法学は中心的課題が憲法解釈学であり、あるべき実質的意味の憲法を憲法から読み取ることが学問的営為の中心である。もちろん、憲法学の一部を構成するものとしての憲法史学、比較憲法学、といった研究分野は認識の学である。認識の学としての側面を持つ政治学研究との違いが分かりにくいと解される。筆者は政治学者ではないが、比較憲法研究の著書は政治学者が執筆することがあった。これはアリストテレスを例に挙げるまでもなく、政治学が古典的にあるべき政治を論じるところから始まっていたことからすれば不思議ではない。少なくともア

アメリカの行動政治学などは科学的政治学をうたい、社会選択理論やゲーム理論など、数学的手法を用いる「政治学」の研究手法は、認識の学としての比較憲法学にも共通する。いずれにせよ、政治の現状認識とそれに対するの規範的主張が憲法の解釈として提示されるかそうでないかが、教養教育における憲法学教育と政治学教育の違いの分かりにくさにつながっていると考えられる。

以上のような考察を踏まえつつ、憲法(学)および政治

学の大学における講学上の工夫が、専門課程における体系的考察とは異なる考慮を要することは疑いないであろう。本書はそのための基礎となる研究をまとめたものである。分量が膨大で学術書出版が困難な現況において、助成を得ることで初めて出版が可能となった。また、商業的には必ずしも期待できない本書の出版には、敬文堂竹内氏の大きいなる助力を得た。

『路面電車とまちの風景—LRT デザインパレット—』の概要

デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 ペリー 史子

1. 本書の概要

筆者らは100以上の路面電車のあるまちを訪れ、人々が集い、いきいきとしたまちの様子を目のあたりにしてきた。本書「路面電車とまちの風景—LRTデザインパレット—」は、これらの実地調査に基づき、路面電車がどのようにまちの風景・魅力に影響を及ぼしているかについて、専門分野のプロフェッショナルのみならず、風景やデザインに関心のある一般の人々にも楽しく読んでもらえるように、わかりやすく解説したものである。

本書は6つの章により構成されている。

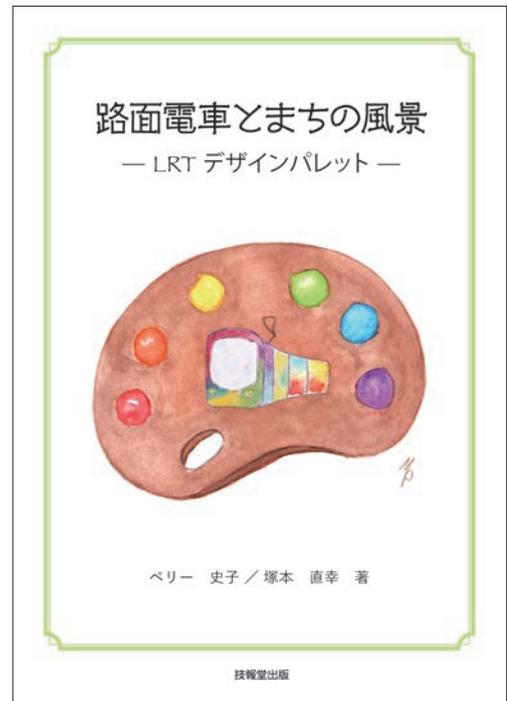
第1章では、最近新しく開通した路面電車のいるまちから、スペインのセビーリヤとビトリア/ビルバオ、フランスのオルレアン、ナント、プレスト、ル・アーブル、ル・マン、イギリスのノッティンガム、アメリカのヒューストン/ダラス、そして日本の富山を選び、これらのまちの風景の魅力について紹介する。

第2章では、最近30年程度の間新しく開通した路面電車が、すでにあった自然景観や歴史的景観、ランドマーク等の中に、どのようにうまくとけ込んでまちの風景を造りあげているかを、事例写真をあげて解説する。

第3章では、路面電車開通に合わせて実施されたまちの改造、沿線開発等の実例を示す。特に、歩行環境改善のために自動車を排除した歩行エリアの拡大策、沿線や交通結節点での土地利用変更、施設整備という観点から、どのようにまちの風景が変化したかについて説明する。

第4章では、街路に新しい交通機関である路面電車が通ることで、街路空間に生まれている新しい価値、例えば、斬新なデザインの車両が創り出す風景や個性的な停留所、連続する架線柱や芝生の敷かれた軌道の美しさ等について様々なデザイン事例と共に述べる。

第5章では、人がいる風景を取り上げる。路面電車の導入は物理的な景観変貌だけでなく、人々の交通行動を変え、それによってまちの風景にも変化がもたらされる。多様な人々が行き交う、様々な歩行空間について解説する。



特に、安心、安全な歩行環境が整って初めて人々が夜景を楽しむことができるので、夜景と路面電車との関わりについても述べる。

第6章では「新しい路面電車はどのように計画されたか」というテーマを取り上げる。新しい路面電車によって生み出された新しいまち風景は、注意深く計画された仕組みの表れである。この30年の間に新しく路面電車を通した都市の内、スペイン、フランス、イギリスの14都市で、交通計画プロジェクトの担当者に、新しい路面電車導入の背景や目的、手法等についてインタビューしてきた内容に基づいて述べる。

2. 関連する研究の経緯と本書の出版目的

本書は、筆者らが一連の科学研究補助費等を得て進めてきた「LRT(Light Rail Transit)とまちづくり」に関する研究成果の中の、特に「路面電車プロジェクトのデザインと風景」に焦点を当て、それらをわかりやすく一般読者向けに書き下ろしたものである。

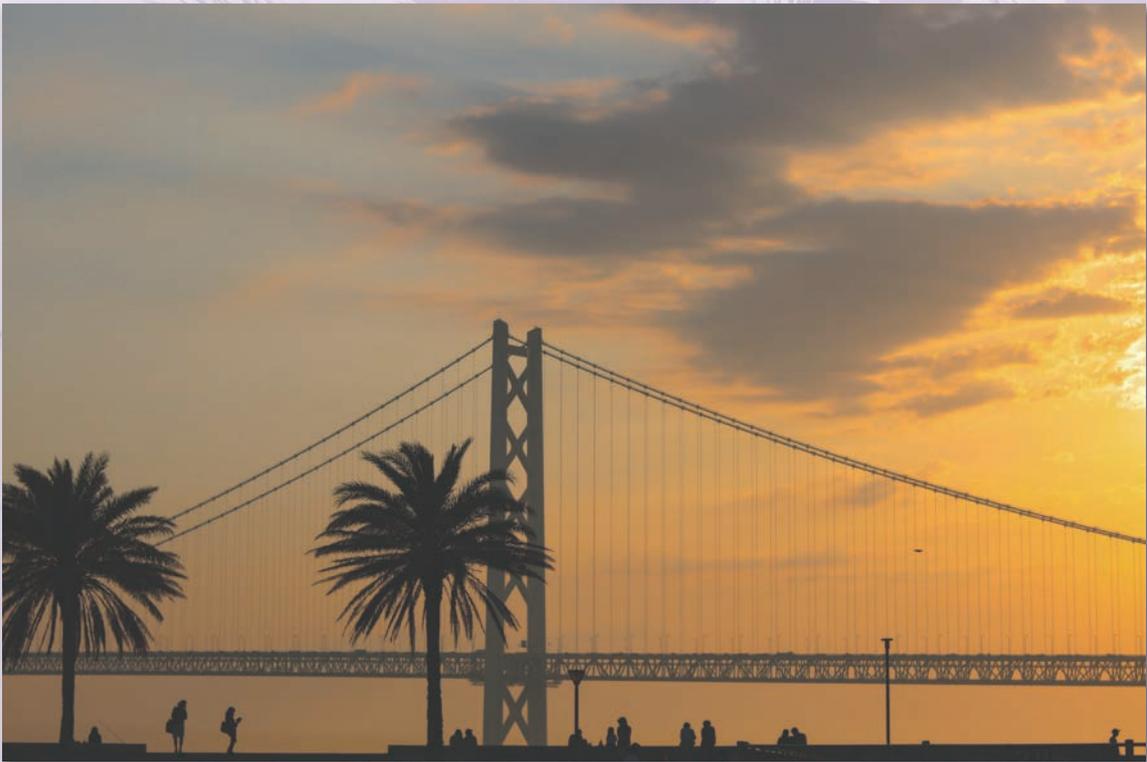
筆者らがインタビューをした欧州のLRTプロジェクト担当者達からは、その導入理由として「まちを美しくする」という声が多く聞かれた。一方、日本でLRT計画の構想に携わっている人達からは参考となる写真集のようなものが欲しい、等の声を受けた。そこで、筆者らの前著「路面電

車レ・シ・ピー住みやすいまちとLRTー」(技報堂出版、2019年3月)の続編と位置づけ、人の交通行動をも変える路面電車プロジェクトやそこに連動するまちの改造に関して「デザイン・風景」という視点から分析し、それを広く社会に還元しようとするものである。



▲令和3年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『西の湖の夕日』
平野 璃久磨(工学部 交通機械工学科)

学会報告



令和3年度 年次報告

令和3年度 常任委員長 喜多見 洋

大阪産業大学学会は、その会則にあるように「学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて研究助成等を図ること」を目的としています。そのため例年は『大阪産業大学論集』や『大阪産業大学学会報』を発行し、講演会・研究会・シンポジウム・学外研修会等を開催するとともに、学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事業、さらには主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々な学外見学会を行なっています。

けれども令和3年度の大学は昨年度に引き続いて新型コロナウイルス感染症の蔓延という事態を受けて、入学式、授業の実施方法、学生の課外活動等様々な面で従来とは異なった対応を迫られました。大学学会の活動についても新型コロナウイルス感染症の状況を考慮しながら随時変更を加えて、いわば手探りでの活動となりました。『大阪産業大学論集』や『大阪産業大学学会報』の発行などは幸いほぼ例年どおり行なうことができましたが、学生会員の学会活動への参加拡大を目ざしたいくつかの事業は変更や中止を余儀なくされました。具体的には、「第16回鈴鹿安全運転研修」や「神戸海洋博物館と人と防災未来センター見学会」、「第6回芸術鑑賞巡り(徳島)」、「宇宙博(そらはく)見学会」などは日程、内容を変更することで何とか実施できましたが、前期に実施を予定していた「関西国際空港見学会」などは中止を余儀なくされました。また昨年中止となった学術講演会は、音楽プロデューサー向谷実氏の講演をオンラインの形式で実施することができました。

企画事業では、ウェブ応募が可能な学会コンテストのみを開催しています。このうち「ぶんかくコンテスト」には

長編2件、短編4件の応募があり、「写真・イラストコンテスト」には写真43件、イラスト10件の応募がありました。

助成事業としては、コロナ禍でしたが出版助成をほぼ予定通り進めることができました。出版助成の申請は3件で、その内訳は商業出版の単著2件、共編著1件となっています。

このほか、学生の卒業論文集に発行援助金を支給し、海外留学費の補助事業については、1件の補助を行いました。例年行われている国際交流課の海外語学研修はオンラインで実施され、これに補助を行いました。

こうして今年度の学会活動は、『大阪産業大学論集』『大阪産業大学学会報』の発行、出版助成などは、ほぼ当初の計画通り実施できましたが、学生会員に関連した事業のいくつかについては、残念ながら計画変更や中止を余儀なくされてしまいました。次期の委員会にはこの点にとくに留意していただければと思います。

最後になってしまいましたが、通常とは異なった状況のなか、今年度の学会活動を支えていただいた常任委員の先生方、とくにチーフ会メンバーである編集委員長の藤岡芳郎先生(経営学部)、企画委員長の大橋美奈子先生(工学部)、法務委員長の藤田拓之先生(国際学部)、財務委員長の塩見剛一先生(全学教育機構)、広報委員長の紙谷卓之先生(デザイン工学部)、さらに幹事の産業研究所事務室の伊藤治尚事務長、学会事務局の松村泰子さん、奥田いづみさんのご協力とご尽力に深く感謝いたします。

(経済学部 教授)

令和3年度 学会活動報告

【評議員会】

第1回評議員会 (オンライン開催)	6月15日	議題①令和3年度学会行事予定表について ②令和2年度会計報告 ③令和2年度会計監査委員報告 ④令和3年度予算(案)について ⑤令和3年度の各委員の作業目標 ⑥その他
第2回評議員会 (オンライン開催)	3月15日	議題①令和3年度活動報告 ②令和4年度チーフ会人事について ③令和4年度活動方針について ④会則・規程集改正(案)について ⑤令和4年度学会予算(案)について ⑥令和4年度学会行事予定表について ⑦その他

【常任委員会】

常任委員会 (オンライン開催)	2月15日	議題①財政安定化基金運用について ②令和3年度常任委員から令和4年度常任委員へ引継ぎ資料(内規)について ③評議員会について
新旧合同常任委員会	各学部で引継ぎを行う	

※学会報56号において、新旧合同常任委員会を3月16日に開催としましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とし、各学部で引継ぎを行っていただくこととしました。

【出版助成審査委員会】

出版助成審査委員会 (オンライン開催)	9月21日	議題①申請者一覧 ②出版助成申請書類一覧
------------------------	-------	-------------------------

【会計監査】

5月12日 令和2年度外部会計監査
6月2、3日 令和2年度内部会計監査

【チーフ会】

第1回チーフ会	4月20日 オンライン開催	第7回チーフ会	11月16日 オンライン開催
第2回チーフ会	メール審議	第8回チーフ会	12月21日 オンライン開催
第3回チーフ会	6月 1日 オンライン開催	第9回チーフ会	1月25日 オンライン開催
第4回チーフ会	7月20日 オンライン開催	第10回チーフ会	2月15日 オンライン開催
第5回チーフ会	9月21日 オンライン開催	第11回チーフ会	3月 1日 オンライン開催
第6回チーフ会	メール審議		

【編集委員会】

第1回編集委員会	4月20日 オンライン開催	第6回編集委員会	メール審議
第2回編集委員会	メール審議	第7回編集委員会	11月16日 オンライン開催
第3回編集委員会	休会	第8回編集委員会	1月25日 オンライン開催
第4回編集委員会	7月20日 オンライン開催	第9回編集委員会	休会
第5回編集委員会	9月21日 オンライン開催		

【令和3年度発行論集・学会報】

種別	分野	巻号数	備考
論集	経営論集	22巻3号、23巻1号	年3回 原稿募集
	経済論集	23巻1号、23巻2号	年3回 原稿募集
	人文・社会科学編	42、43、44	年3回 原稿募集
	自然科学編	132	年1回 原稿募集
	人間環境論集	21	年1回 原稿募集
学会報		57	年1回 発行

【企画委員会】

第1回企画委員会	4月20日 オンライン開催	第5回企画委員会	9月21日 オンライン開催
第2回企画委員会	メール審議	第6回企画委員会	10月19日 オンライン開催
第3回企画委員会	休会	第7回企画委員会	11月16日
臨時企画委員会	6月15日 オンライン開催	第8回企画委員会	1月25日 オンライン開催
第4回企画委員会	7月20日 オンライン開催	第9回企画委員会	休会

【企画事業】

◆学会コンテスト

第22回 ふんかくコンテスト

第6回 写真・イラストコンテスト

◆神戸海洋博物館と人と防災未来センター見学会 9月7日

神戸海洋博物館(カワサキワールド)、人と防災未来センター施設見学

◆第16回 鈴鹿安全運転研修 9月15日

鈴鹿サーキット交通教育センター研修

◆関西国際空港見学会 9月17日 (緊急事態宣言延長の為、中止)

海上保安庁・大阪税関見学

◆第6回 芸術鑑賞巡り(徳島) 10月29日

大塚国際美術館、淡路夢舞台見学

◆空宙博(そらはく)見学会 11月1日

空宙博(岐阜かかみがはら航空宇宙博物館)、あいち航空ミュージアム見学

<後援>

◆活動への助成

2月4日～2月7日 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 優秀卒業研究展 修士研究展2022への助成

3月9日～3月10日 経営学部 経営学科 デニムに関わる職場見学への助成

◆令和3年度 海外語学研修(オンライン)および海外留学をした学生への助成

◆博士論文の印刷・製本への助成(人間環境学研究所)

【広報】

適時 webサイト更新

【法務】

規程改正の検討

【財務】

毎月の学会会計処理(事務局)後に伝票の確認および預金通帳残高との照合(本会計)

【大阪産業大学学会会員数一覧】

(人)

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
学生会員(院生)	114	121	106	103
// (大学生)	7,774	7,766	7,889	7,630
正会員(専任教員)	218	209	207	208
特別会員	4	1	1	1
準会員(非常勤・卒業生)	21	22	26	26
名誉会員	15	16	14	13
賛助会員	1	2	3	3
計	8,147	8,137	8,246	7,984

12月末現在の会員数

令和2年度 学会会計報告 (令和2年4月1日～令和3年3月31日)

令和2年度 財務委員長 塩見 剛一

令和2年度における大阪産業大学学会の収支決算を、下掲の表のとおりご報告いたします。

収入の部では、昨年度に比べて学会費の決算額が約420万円の増収となりました。これは、平成29年度より学会費の徴収方法を4年分の一括徴収から1年分(前期・後期)ごとの徴収に変更したため、変更後4年目に当たる令和2年度は、昨年度と比べて学会費の収入が一学年分増加しています。

支出の部では、昨年度に比べて支出小計が約770万円の減少となりました。支出の減少はコロナ禍の影響を強く受けており、学会イベントの見学会ならびに学会主催の講演会が中止となったこと、海外留学の見合わせによる海外留学補助金の利用者数の減少などが主な理由として挙げられます。また論集発行費に減少が生じたのは、令和3年3月付の論集を例年どおり令和2年度内の予算での支出として予定していたところ、論集発行の遅れによ

り、令和3年度会計で処理することとなったためです。その結果、170万円超の支出が翌年に繰り越しとなりました。これも令和2年度の支出減に影響しています。

その一方で、新たに増加した支出としては法定福利費がありますが、これは学会事務局の方2名が直接雇用に切り替わり、それにとまって労働保険料を同予算で支出するようになったためです。

令和2年度におきましても、各種見学会や学会コンテストなどのイベント、出版助成、海外留学補助など、学業、研究から文化活動にいたるまで、幅広く助成を企画していたのですが、残念ながら実施がかなわなかった事業が少なからずありました。それでも総計として、次年度繰越金は昨年度より127万円減少しています。

今後も、新たな活動助成を考えるなど知恵を絞って学会活動の活性化をめざし、会員の皆様に少しでも有益な還元ができますよう、一層努めてまいります。

【収入の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
学会費(学生)	18,492,000	18,163,200	△ 328,800
// (正・準)	1,121,000	1,139,000	18,000
受取利息	3,500	1,332	△ 2,168
雑収入	510,000	880	△ 509,120
(小 計)	20,126,500	19,304,412	△ 822,088
前年度繰越金	22,245,226	22,245,226	0
合 計	42,371,726	41,549,638	△ 822,088

【支出の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
論集発行費	5,000,000	2,378,234	△ 2,621,766
学会報発行費	1,600,000	1,356,850	△ 243,150
講演会費	800,000	0	△ 800,000
イベント費	5,600,000	236,466	△ 5,363,534
諸活動費	1,000,000	200,000	△ 800,000
海外留学補助金	3,000,000	1,196,124	△ 1,803,876
出版助成	5,200,000	4,533,806	△ 666,194
ウェブサイト保守点検費	1,000,000	682,308	△ 317,692
人件費	5,900,000	5,870,041	△ 29,959
渉外慶弔費	200,000	60,000	△ 140,000
印刷製本費	250,000	133,754	△ 116,246
通信輸送費	250,000	98,469	△ 151,531
学生表彰費	1,800,000	1,450,000	△ 350,000
法定福利費	80,000	638,150	558,150
支払手数料	120,000	118,250	△ 1,750
その他	200,000	119,577	△ 80,423
(小 計)	32,000,000	19,072,029	△ 12,927,971
周年記念事業繰入金	1,500,000	1,500,000	0
次年度繰越金	8,871,726	20,977,609	12,105,883
合 計	42,371,726	41,549,638	△ 822,088

※令和2年度より、『60周年記念事業費』は『周年記念事業費積立』に名称変更

編集後記

学会報57のテーマは『大学キャンパスの将来像』です。テーマに則した特集記事のほか、「学生による、教員の研究テーマ紹介」「各支援部門の活動紹介」について特集しています。令和3年は、コロナ禍に加えて夏のオリンピックやパラリンピックそして秋には衆議院の総選挙などが実施されました。

私たちはグローバルな環境下で生活していることを実感しながら、国の現状や将来について考えることが多い年でした。日本の国内総生産(GDP)は1995年の5.5兆ドルから2020年の5兆ドルと25年間横ばいが続いています。日本の平均年収は過去30年間で4%増の3.9万ドル(440万円)です。米国は48%増の6.9万ドル、OECD平均が38%増の4.9万ドルに比べて伸びていません。企業が持続的に賃金を増やすためにはデジタルトランスフォーメーション(DX)で生産性を高め新たな成長分野に果敢に取り組む必要があるといわれています(日本経済新聞2021年10月16日1面)。平成時代における日本経済の停滞は何が真の原因なのかはわかりませんが、重要なことは社会に新たな価値をもたらすイノベーションを生み出すことです。

ビッグデータの時代になると人間の希少価値は創造力や編集力になります。創造力は独自の方法で新しい何かを創り出す力です。編集力は情報を収集して、それを取捨選択しながら再構成するプロセスとして捉えられます。データを収集してある目的や方向性の下で選別・加工して意味付けしたのが情報です。これらの情報をもとに経験則に沿って判断すると知識になり蓄積されていきます(日立東大ラボ(2018) pp.28-30)。編集工学を考案した松岡正剛は編集とは「対象の情報の構造を読み解き、それを新たな意匠で再生するもの」と述べています。彼は日本人が古の時代から独自の風土を背景に編集文化「異質なものの再編集から独創的なモノが生まれる」情報編集力を発揮してきたと提示しています(松岡(2001))。

学会報57は時代の転換点ともいえる現在、大学教育・研究や大学生活を支えるキャンパスのあり方、将来像を考えて編集をしました。キャンパス・リノベーションでは「今後建設される新施設と、昨年から今年にかけて行われたリノベーション」関連の写真をピックアップして掲載しています。このほかに、学会主催見学会、コンテスト報告、講演会報告、留学記、学術研究書出版助成本の概要などを掲載しています。

最後になりますが、本号の編集・発刊にご協力いただいた編集委員の方々、またとくに精力的に編集の任にあたっていただきました学会事務局に深く感謝申し上げます。

日立東大ラボ(2018)『Society(ソサエティ)5.0～人間中心の超スマート社会』日本経済新聞出版社。
松岡正剛(2001)『知の編集工学～情報は、ひとりではいられない』朝日新聞出版。

(令和3年度編集委員長：藤岡 芳郎)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or transmitted, in any form or by any means, without prior permission in writing from the publisher.

大阪産業大学学会報 第57号 非売品

発行日 2022(令和4)年3月4日
発行 大阪産業大学学会
〒574-0013
大阪府大東市中垣内3丁目1-1
TEL (072) 875-3001 (大代)
FAX (072) 875-6551
印刷 友野印刷株式会社
〒700-0035
岡山市北区高柳西町1-23
TEL (086) 255-1101
FAX (086) 253-2965

Academic Society
of Osaka Sangyo University

